Ｉ・ＯＯＯ・Ｓ - インフィニット・オーズ・ストラトス -

コントローラー・Ｘ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Ｉ・ＯＯＯ・Ｓ‐インフィニット・オーズ・ストラトス‐

【Ｎコード】

Ｎ６０５９Ｘ

【作者名】

コントローラー・Ｘ

【あらすじ】

女性にしか使えない世界最強の兵器、ＩＳ〈インフィニット・ストラトス〉。

しかし、世界で唯一ＩＳを使える男がいた。

今、この世界に《誕生》した《王のＩＳ》と男の物語が始まる。

プロローグ（前書き）

初投稿なので文章が目茶苦茶だと思いますが、暖かい眼差しで読んでくれると嬉しいです。

プロローグ

夜、とある高層ビルの会長室。そこには2人の青年と、椅子に座っている1人の男性がいた。

「明日がＩＳ学園へ転校だったな、竜馬君」

椅子に座っている白髪混じりの男性の名は、黒木　白黒。日本に数多くあるＩＳ開発企業（メルダ・ファウンデーション）の会長である。

「はい、白黒さん！」

そして、返事をした黒髪の青年……龍東　竜馬は元気に答えた。

「いゃ～もうすぐ俺の開発したＩＳが日の目に出るなんて、こっちも緊張してきたなぁ…」

白衣を羽織った青年……黒木　影宮はそう言いながら右手を胸に当てながら緊張していた。

「息子よ。竜馬君のＩＳは…」

「これだよ」

そう言いながら影宮は、ポケットから直径３ｃｍ、厚さ６ｍｍの銀色のメダルを取り出した。表に十字の模様、裏は三つ円が横に並んだ模様が描かれているメダルだった。

「待機状態になってるが、呼び出せばすぐに展開できるからな」

影宮はメダルを竜馬に渡すと、竜馬はメダルにある小さな穴に赤い

リボンを通して首に掛けた。

「…？そのリボンは…」

「あ、小2の転校する時に友達から貰ったんです。『いつまでも、私たちは友達だ！』って……」

竜馬は目を閉じて思い出していた。転校する事が決まりこの学校での最後の授業、ポニーテールをした女の子に友達の証として貰ったリボンの事を……。

「影宮さん、白黒さん、今までお世話になりました」

そして目を開けて、影宮と白黒に感謝の言葉を述べた。8歳に両親を亡くし自分を引き取ってくれた白黒と、実の兄のように相談に乗ってくれた影宮に。

「ハッハッハッ！竜馬君、長期休暇に入ったらまた戻って来なさい。ここはもう、君の家なんだからな」

白黒は笑顔で言うと、竜馬は「はい！」と嬉しそうに言った。

「アレが完成したら届けるから、それまではセルで頑張ってくれ。期待してるぞ」

影宮は竜馬の肩に手を置きながら言った。

「はい。これからもドロイドや武器の開発、頑張って下さい」

「あぁ、そっちも《オーバーズ》を頼むぞ」

「はい！」

二人は固い握手を交わし、会長室を出てそれぞれの部屋に戻っていった。

主人公設定（１１／２９訂正）（前書き）

主人公のプロフィールと設定です。

主人公設定（１１／２９訂正）

名前：龍東　竜馬（りゅうとうりょうま）
年齢：１５歳
性別：男
所属：１年１組
好き：大切な人や友達の笑顔、麺料理（パスタもＯＫ）、おはぎ
嫌い：大切な人や友達を傷つかせる存在、ゴーヤ
趣味：プラモデル、旅行

マイペースな性格だが、誰でも優しく接する事が出来る。
成績は中の上だが、なかなかの切れ者らしい。
身体能力は高く、天性の格闘センスを発揮させる。

千冬とは小さい頃よく遊んでもらっていた。
８歳の頃に両親を事故で亡くし、知り合いのＩＳ開発会社［メルダ・ファウンデーション］会長、黒木　白黒（くろきはくろ）に引き取られる。
引き取られると同時に、今いた小学校を転校してしまった。
箒とは同じクラスの友達だったが、転校当日に箒はリボンを《友達の証》として竜馬に渡した。
転校した学校では鈴、弾、蘭と出会い、親友になった。

中学校には通わず通信教育をしていた。そのため、白黒の仕事の邪魔にならないように着いて行き、世界中回った。

１３歳の時オーストラリアで束と出会い「君にはＩＳを使える才能があるね♪やったじゃん、ブイブイ！」等と言われた。

世界中を回った時に鈴と再会、ある事件の後に千冬と再会している。

その後、会社にあるＩＳを起動することができて世間に発表された。

０１話【男とクラスメイトとＩＳ学園】（前書き）

やっと１話の完成……のはずが、本文がめちゃくちゃな部分があったので修正しました。

０１話【男とクラスメイトとＩＳ学園】

◆メルダ・ファウンデーション　駐車場◆

「竜馬、準備ができたぞ」

「ありがとうございます、影宮さん」

影宮は、愛用の黒ベンツに竜馬を乗せていた。

「ゲート前でいいんだな」

「はい。そこから担任の方が案内に来てくれるから大丈夫ですよ」

「そうか。じゃあ、出発だ！」

そして、二人を乗せたベンツは駐車場から出発した。

◆ＩＳ学園　ゲート前◆

「……まだかなぁ」

影宮にゲート前まで送ってもらい別れて１０分、竜馬は担任の到着を待っていた。

（ＩＳ学園の職員って、全員が女性だったな。担任も美人なのかなぁ……）

そう思っていると、こちらに近付く女性に気がついた。
黒のスーツにタイトスカート、すらりとした長身、よく鍛えられているが決して過肉厚ではないボディライン。

「あっ！」

竜馬はその女性を知っていた。白黒の仕事でドイツへ行った時に面識があったのだ。

「すまない、遅くなってしまったな」

「千冬さん！お久しぶりですっ！！」

竜馬は女性…織斑　千冬に笑みを浮かべてお辞儀をした。

「あぁ、ドイツで会った以来だな竜馬。黒木会長は元気か？」

「はい。白黒さんも影宮さんも、相変わらず元気ですよ」

「ふっ、そうか」

千冬は軽く微笑むと、二人は歩き始めた。

「束に聞いたが、まさかお前がＩＳを使えるとはなぁ……」

「僕も最初は驚きました。２年前に束さんと会って、『君にはＩＳを使える才能があるね♪よかったじゃん、ブイブイ！』って、急に言いましたからねぇ……」

竜馬は束との思い出をしみじみとすると、千冬は小さく溜め息を吐いた。

「全く、束は相変わらずか。……その様子から見ると、基礎知識と訓練は十分そうだな」

千冬は改めて竜馬を見た。３年前の竜馬の体つきとは違い、がたいが良くなっていた。

「束さんの言葉から今に至るまでは、ＩＳの勉強を中心にしましたからね。それにこれも」

そう言うと、竜馬は首に掛けてあるメダルを千冬に見せた。

「これが、お前の……っ」

千冬は何か言おうとしたが、教室の前まで来てしまった。

「まぁ、後で話す。今はここで待機しろよ」

「はい、ちふ……じゃなかった。織斑先生」

竜馬は千冬を織斑先生と訂正して言うと、千冬は小さく微笑みをした。その後、千冬が教室に入りＳＨＲが始まった。

～数分後～

◆1年1組◆

「それではＳＨＲを終了する……と言いたいところだが、ここでまだ自己紹介をしていない奴がいる」

そう言い終わると、クラス全員がざわめいた。

（入学式早々に転校生？いったい誰だ？）

その一人、ポニーテールが特徴の女子……篠ノ之　箒は考えていた。

「入れ」

「はい、失礼します」

千冬は廊下で待たせている竜馬を呼ぶと、扉が開いた。
竜馬が入ると、まずクラス全員が固まった。

（え……？あい…つは……）

そして、箒は目を見開いていた。

「自己紹介をしてくれ」

「はい。えっと…、龍東　竜馬です。よろしくお願いします」
竜馬はそう言うと微笑んで、軽く頭を下げた。
「「「「「……」」」」」
「……？」
だがクラスの反応が無く、竜馬は頭にハテナマークを浮かべたような顔をした。
だが次の瞬間……
「「「「「……き」」」」」
「き？」
「「「「「キャアァァァァァ！！！！」」」」」
「ほわっ！」
突然の黄色い叫びに竜馬は後ずさりし、所々声が聞こえた。
「やったわ！男子よ男子！」
「しかもウチのクラス！」
「「竜馬くーん！こっち向いて～！」」
「凄くイケメンね！嫌いじゃないわっ！！」

「あ、あはははは……」

こんな場面に遭遇した竜馬も、流石に苦笑いするしかなかった。

「うるさいぞ馬鹿者共！……まったく。毎年、よくもこれだけの馬鹿者が集まるものだ…」

クラスを静めさせると、千冬は溜め息を吐いた。

「龍東、お前の席は篠ノ之の後ろだ」

千冬は窓際の席を見ながら言うと、竜馬は席に近づいた。そして箒と目が合うと、微笑んで言った。

「8歳の時以来かな。久しぶり、箒」

「あ、あぁ……。久しぶりだな、竜馬…」

二人は握手をしようとした瞬間……

―バシッ！―

「ぁ痛っ！」

「喜びの再会は後にしろ」

竜馬の頭に出席簿が叩き付けられ、握手が出来なかった。

◆休み時間　屋上◆

1時間目の授業が終わり、竜馬と箒は屋上に来ていた。教室ではクラス全員だけではなく、2・3年の先輩も詰めかけていたため箒と話が出来ないので、箒を連れて屋上へとやってきた。

「8年ぶりかな、最後に会ったのって……」

「あ、あぁ……そうだな…」

竜馬は話しかけたが、箒は顔を赤らめて頷いた。

「それにしても……」

「な、何だ」

竜馬は箒を見つめると、箒は更に顔を赤らめた。

「うん、やっぱり箒にはポニーテールが似合ってるね。可愛いよ」

「か、かわっ、可愛い！？嘘を言うなっ！！」

「ははっ。嘘じゃないよ」

「む、むぅ……」

竜馬は微笑みながら言うと、箒は顔を真っ赤にして俯いた。

「あ。あとこれ……」

竜馬は首に掛けてるリボンを箒に見せると、箒は懐かしむように見ていた。

「懐かしいな。まだ持ってたのか…」

「あぁ。友達の証を無くすなんて、出来ないよ」

「ふふっ、全くだ。無くしてたのなら、私の竹刀が黙ってないからな」

「おお怖い…」

二人はふざけながらも、久しぶりの再会を喜んでいた。

―キーンコーンカーンコーン―

「あ、もう時間か」

「そうだな」

授業開始のチャイムが鳴り響き二人は屋上の扉まで行くと、扉の前で竜馬は止まり、笑顔で箒に利き腕の拳を突き出した。

「これからもよろしく、箒」

「あぁっ！」

箒も笑顔になり、竜馬の拳を自分の拳に突き出した。
これが、竜馬の親友の証である。

◆2時間目　教室◆

箒　Ｓｉｄｅ

私は小学生の頃、道場に通うクラスの男子がいた。そいつの名前は龍東　竜馬。

同年代と試合して負けなしの私が唯一、勝てなかった奴だ。

最初は、「次は勝つ！」と、私が目標にする気持ちぐらいしか思わなかった。

でもある日、私が男子達に【男女】と言われて虐められた時に、竜馬が男子達に向かって言ってくれた。

「なに男が女の子を虐めてるんだよ！そんな最低な事して、恥ずかしくないのかよ！」

それからだ。私が竜馬を目標としての気持ち以外に、あいつを意識

し始めた。

竜馬は強いだけじゃなく、老若男女誰にでも優しく、あいつの笑顔はみんなを優しい気持ちにしてくれること。

そして……誰よりも……かっこいいのだと……。

だけどあの日、道場で竜馬と稽古をしていた時に雪子叔母さんが息を乱して入ってくると、涙を浮かべて竜馬に言っていた。

「竜馬くんの……ご両親が、交通事故で……っ！！」

私は目を見開いた。嘘だ！あの優しい竜子さんと人柄の良い竜治さんが亡くなったなんて。

その話を聞き終わる頃、竜馬は意識を失ってしまった。

数日後、竜馬のご両親の葬式が終わった頃に白黒さんが尋ねてきた。

白黒さんの息子、影宮さんは姉さんの研究者仲間でたまに顔を合わせた程度だ。

尋ねてきた理由は、竜馬を引き取りに来て、今の学校を転校してしまうと言っていた。

それを聞いた夜、私は布団のなかで泣いた。

竜馬が引越す日、私はある決心をしていた。あいつに告白すると、決心していた。

だが、いざ言おうとした時…

「い、いつまでも、私たちは友達だ！！」

私は臆病だ……あれだけ決心したのに、竜馬を前にしただけで心臓が壊れそうだった。

「……。ありがとう」

だが、それを聞いた竜馬は目に涙を溜めながら、私の好きな笑顔をしてくれ、親友の証をしてくれた。

それを終えると、私は髪を結んでいたリボンを竜馬に渡し、そして別れた。

あれから8年、私は竜馬を忘れる事はなかった。

だが2年前、ＩＳを使える男が現れたとニュースを見て驚いた。

竜馬だった。成長はしているが、あの笑顔を私は忘れなかった。

ＩＳ学園に入学し、姉さんの友達の千冬さんが担任で驚いたがさらに竜馬が転校してきて、更に驚いた。

休み時間にいろいろ話をしようとしたが、短すぎてあまり話せなかった。でも、親友の証をして私は思った。

私は今でも……竜馬が好きだ！

筆　Ｓｉｄｅ　Ｅｎｄ

◆休み時間　教室◆

「へぇー、りゅーくんってあのメルダに居候してたんだ～」

「メルダって、あのメルダ・ファウンデーションでしょ？」

「やっぱりＩＳを使える男子ってスゴイなぁー」

２時間目が終了すると、竜馬はクラスの女子に質問攻めにされていた。上から、布仏　本音、相川　清香、谷本　癒子が喋っており、本音の言う《りゅーくん》とは竜馬の事である。

「そうだなぁ、あとは「ちょっと、よろしくて？」……ん？」

会話中、後ろから声をかけられた竜馬は振り向いた。話しかけてきた相手は、わずかにロールがかかった金髪のロングヘアーの女子だった。

「まあ！なんですの、そのお返事。わたくしに話しかけられるだけでも光栄なのですから、それ相応の態度というものがあるんではないかしら？」

「えっと……（何なんだこの人。いきなり突っ掛かってきて……ん？この人は……）」

突っ掛かってきた女子に竜馬は戸惑うが、ベンツ車内で読んでいた1組の生徒リストで同じ顔だったのを思い出した。

「たしか……、セシリア・オルコットさんだよね？イギリス代表候補生で、入学試験で教官を倒した…」

「あら、ご存知でしたのね？」

「まぁ、クラスメートの名前くらいは覚えないと失礼だしね。まさか代表候補生と同じクラスになるとは、僕も最初は驚いたよ」

竜馬は右頬を掻きながら言うと、セシリアは人差し指をびしっと竜馬に向けた。

「そう！本来ならわたくしのような選ばれた人間とは、クラスを同じくすることだけでも奇跡……幸運なのよ。それは分かってますわよね？」

「まぁ箒にも久しぶりに会えたし、たしかにラッキーかも……」

そう言うと、セシリアの目がややつり上がり竜馬に迫っていった。

「わたくしよりも友人と会えた方が幸運って、どういう意味かしら！？」

「え、えっと…まぁ落ち着いて」

「こ、これが落ち着いていられ――」

―キーンコーンカーンコーン―

セシリアの話に3時間目開始のチャイムが割って入った。

「っ……！またあとで来ますわ！逃げないことね！よくって！」

セシリアは一方的に言うと、竜馬に背を向けて自分の席に戻った。

一方、箒は……

（りり、竜馬が、わわわ私と会えて……ららら、ラッキーって～～～）

……俯いて悶えていた。

◆3時間目　教室◆

「それではこの時間は実践で使用する各種装備の特性について説明する」

3時間目、教壇には千冬が立っていた。尚、1・2時間目の授業を教えていたのは副担任の山田　真耶である。

「あぁ、その前に再来週行われるクラス対抗戦に出る代表者を決め

ないといけないな」

思い出したように千冬が言う、クラスがざわざわと色めき立っていた。しかし、竜馬は冷静にしていた。

（代表者か……。対抗戦とか出れるから、データを取るには良い役所かな）

そう考えていると、女子の一人が手を挙げて言った。

「はい。龍東くんを推薦します！」

「私もそれが良いと思いますー」

「では候補者は龍東　竜馬……他にはいないか？自薦他薦は問わないぞ」

話が進むと、箒は竜馬に言った。

「いいのか？竜馬」

「何が？」

「これではお前が代表者になるが……」

「んー……まぁ良いけどね。男が乗るＩＳなんて、いろいろと経験を積めそうだし。なにより……」

「なにより？」

「面白そうだ」

ニカッ！と笑みをした竜馬を見て、箒は微笑んで「まったく…変わってないな」と言った瞬間、教室の後ろにバンッ！と音がした。

「待ってください！納得がいきませんわ！」

音の正体は、机を叩いて立ち上がったセシリアだった。

「そのような選出は認められません！大体、男がクラス代表だなんていい恥さらしですわ！わたくしに……このセシリア・オルコットにそのような屈辱を１年間味わえとおっしゃるのですか！？」

セシリアは怒涛の剣幕で言葉を荒げると、癇にさわったのか箒が言った。

「うるさいぞ。少しは落ち着いたらどうだ」

「貴女はお黙りなさい！ＩＳランクＣの貴女に、Ａのわたくし意見だなんて図々しいですわ！」

「なっ…！何だと――」

セシリアの言葉に、箒は怒りの表情で立ち上がろうとした瞬間、それは起こった。

「いい加減にしないか！！」

「「っ！」」

大声に驚いた箒とセシリアは、声がした方に目を向けた。そこには、

セシリアを少し睨むように見ている竜馬だった。
「黙って聞いていれば……。僕を馬鹿にしたり、侮辱するなら良いよ。だけど、親友を侮辱だけはするな！」
「竜馬……」
箒は竜馬を見て驚きと嬉しさを感じていた。まるで、昔に虐められたところを助けてくれたように。
「な、なにかと思えば……。大体、文化としても後進的な国で暮らさなくてはいけないこと自体、わたくしにとっては耐え難い苦痛で――「イギリスだって大してお国自慢がないくせに。あるのは世界一まずい料理の連続覇者ぐらいだろ」なっ……！？」
竜馬が言った一言で、怒髪天をつくと言わんばかりのセシリアが顔を真っ赤にして怒りを示していた。
「あっ、あっ、あなたねぇ！わたくしの祖国を侮辱しますの！？」
「先に侮辱したのは君だろ！？」
睨み合いのなか、セシリアはバンッ！と机を叩いて人差し指を竜馬に指した。
「決闘ですわ！」
「ああ、いいよ」
「言っておきますけど、わざと負けたりしたらわたくしの小間使い……いえ、奴隷にしますわよ」

「真剣勝負に男も女も関係ないよ。手を抜くほど腐ってないよ」
「そう？何にせよちょうどいいですわ。イギリス代表候補生のこのわたくし、セシリア・オルコットの実力を示すまたとない機会ですわね！」
セシリアが言い終わると、竜馬はある事を言った。
「んじゃ、ハンデはどのくらいつけたらいいかな？」
「……はい？」
竜馬が言った一言にセシリアはア然としたが、その瞬間にクラスからドッと爆笑が巻き起こった。
「り、竜馬くん、それ本気で言ってるの？」
「女尊男卑の今、男が女より強かったのって大昔の話だよ？」
クラスの女子は話しかけるが竜馬は動じなかった。
「ふふっ、日本の男子はジョークセンスがありますのね。むしろ、専用機を持つわたくしがハンデを付けなくていいのか迷うくらいですわ」
そう言うと、セシリアは左耳に付けてあるイヤーカフスを竜馬に見せた。どうやら、あれがセシリアのＩＳのようだ。
「ハッハッハッハッ！」

だが、竜馬は気にせず笑っていた。

「……やっぱり、ハンデ付けた方がいいかな？」

「はあ！？だからそれは、専用機を持つわたくしが――「だから、専用機を持ってたらハンデを付けていいんでしょ？」……え？」

竜馬の言葉に、セシリアや箒を含むクラス全員が静まり返った。それをよそに、竜馬は首に掛けてあるリボンを外し、メダルをセシリアに見せた。

「ま、まさかそれは…」

「あぁ。僕の専用機だよ」

「「「えええぇぇぇ！！！」」」

クラス全員が驚き叫ぶと、コンコンと何か音が聞こえていた。

「あれ？何でしょうか…」

真耶は音のする方に目をやると固まった。窓を見ると、黒い小さな鳥型ロボットが３２インチ薄型テレビを持って窓を突いていた。

『何やら面白そうな事が始まるみたいだな』

画面に映し出されたのは、影宮だった。

「影宮さん。どこでそれを……」

『細かい事は気にするな！それより、専用機と闘えるなんていいじゃないか。頑張れよ！』

「はい、頑張ります！」

影宮は親指を立てて健闘を祈ると、竜馬も親指を立てた。そして、鳥ロボットはテレビを持ちながら空に飛んでいった。

「さて、話はまとまったな。それでは勝負は一週間後の月曜。放課後、第3アリーナで行う。龍東とオルコットはそれぞれ用意をしておくように」

ぱんっと手を打った千冬は話しを締めて、授業を再開した。

０２話【同棲と代表決定戦と誕生のオーバーズ】（前書き）

２話ができました。
やっとＩＳがでたよ……。戦闘シーンが難しいです……。

０２話【同棲と代表決定戦と誕生のオーバーズ】

◆放課後　学園内◆

授業が終わり、竜馬は一人で学園内を探索していた。

「それにしても、ものすごい視線だな……」

中庭を歩いているだけで、竜馬は女子の目線を集めていた。元々ＩＳ学園は女しかいなかったので無理もない。

「今日で全部回るのは無理だな……。ん？」

竜馬は立ち止まると、黒い自販機を見つけて近づいていった。

（ここにもベンダーがあるんだ。形状から見ると販売専用型か……。よし！）

そう思うと、竜馬は意識を手に集中するとメダルが５枚現れた。首に掛けてあるメダルと同じ形だが、裏の模様は５枚全て違っていた。共通するなら、全て生き物が描かれていた。
これがＩＳ専用メダル…セルメダルである。

「……」

竜馬はＩＳのメダルを自販機にかざすと、硬貨投入口とは別の投入口が中央に現れた。同時に飲み物が全て、赤、緑、水色、黄と、色とりどりの缶に変わった。

「この場合は、タカにするかな…」

言いながら全てのセルメダルを投入し、赤い缶を5本買った。

「そんじゃまあ……」

竜馬は、プシュッ！と缶を1本開けた。すると……

【TAKA-KAN】

『キュイー！』

『『『『キュイー！』』』』

赤い缶は鳥型ロボットに変型し、残りの缶も同時に変型した。

これが、メルダ・ファウンデーション製作の可変型缶ロボット《カンドロイド》と、カンドロイド販売機（ベンダー）である。

「学園の施設・設備の場所を調べてくれ。あと、学園にあと何台ベンダーがあるのかも頼むね」

『キュイー！』

そう言われたタカ・カンドロイド達は手分けして飛び立ち、竜馬は見届けたあと再び歩き始めた。

◆廊下　職員室前◆

日も暮れる頃、竜馬はタカ・カンドロイド達が集めた施設の場所をメモに記入しながら歩いていると、前から真耶が歩いて来た。

「あっ、龍東くん。何しているんですか？」

「さっき学園の施設等を調べてました。ここは広いから、迷わないように一様……」

竜馬は書きかけのメモを見せると、真耶は頷いた。

「そうですか。実は寮の部屋の事ですが……個室の方が用意出来てなくて、1ヶ月程相部屋になってもらいますね」

そう言った真耶は部屋番号の書かれた紙と鍵を渡した。

「届いた荷物は部屋にありますから、時間を見て部屋に行ってくださいね。それじゃあ私は会議があるので、これで」

「はい。さようなら、山田先生。また明日」

竜馬は頭を下げると、寮に向かって歩きだした。

◆寮◆

「１０２５室……ここか」

竜馬は紙に書かれた番号と見比べると、数回ノックした。

「……いないのかな？」

返事が無かったのでドアに鍵を差し込むが、ドアは開いていた。

―ガチャ―

「失礼しまー……おぉ！」

竜馬は部屋に入ると驚いた。大きめのベッドが二つ並び、そこいらのビジネスホテルよりも遥かにいい部屋だった。

「荷物は…これだな」

竜馬は机の下に置いてあった荷物を開け、中にあるものをチェック

した。

「えっと……着替えに携帯充電器、ｉＰａｄ、セルメダルケース……ん？」

すると、箱の底にはオレンジ色の缶と黒の缶があった。

「新型カンドロイドか……。後で開けてみる「誰かいるのか？」……っ！！」

竜馬は突然、奥の方から声が聞こえて驚いていると扉が開いた。

「あぁ、同室になった者か。これから1年、よろしく頼むぞ」

出てきたのは、体をバスタオル1枚を巻いてタオルで長い髪を拭いていた、今日再会を果たした親友だった。

「こんな格好ですまないな。シャワーを使っていた。私は篠ノ「ほっ、箒！？」之……えっ？」

自己紹介をしようとした箒は、聞き覚えのある声を聞いてきょとんとした。

「り、りょう……ま……？」

「あっ、あぁ……」

2人は顔を真っ赤になった次の瞬間……

「い、いやあああぁぁぁぁぁ！！！！」

―ドゴオォン！―

「あべしっ！」

真っ赤な顔をした箒の強烈なアッパーカットが、竜馬の顎にクリーンヒットし、そして……

―バタリ―

「りっ、竜馬！？しっかりしろ、竜馬！」

そのまま竜馬は気絶をしてしまい、箒は慌ててしまった。

～十数分後～

「ごめん！本っ当にごめん！」

「いや、私の方こそすまない。もう頭をあげてくれ」

目を覚ました竜馬は理由を箒に話し、ひたすら謝罪をしていた。尚、箒は竜馬の気絶中に寝間着浴衣に着替えていた。

「と、とりあえず、同室になるのだから色々と決めておかなければならないな……」

「そ、そうだね……」

二人は顔を合わせるが、頬が赤かった。あの場面を思い出すので無理もない。

「ま、まずシャワー室の使用時間だが……」

「ああ、箒が先でいいよ。剣道部に入ってるし、終わったあとさっぱりしたいしね」

「そ、そうか…」

「……」

「な、何見ている…」

「ん？やっぱり箒って、浴衣とか似合ってるなーと思ってね」

「にあっ……！」

不意に言った竜馬の言葉に、箒は顔を真っ赤にして立ち上がった。

「箒？どうし……「あ、ああそうだ！そこのジュースを貰うぞ！」

……え？」

竜馬の言葉を遮った箒は、竜馬の机に置いてあったオレンジ色の缶を手に取った。

「あぁ、それは！」

「ん…？」

止めようとした竜馬だが、箒は缶のプルタブを開けてしまった。すると……

【ＫＵＪＡＫＵ-ＫＡＮ】

『クジャクー』

「きゃっ！」

突然の出来事に、箒は後ろに下がった。目の前にいるのは、後ろでカッターを回転させて飛んでいるカンドロイド……クジャク・カンドロイドである。

「箒、大丈夫か？」

「あ、あぁ……何なんだコレは？」

「ソレは影宮さんの発明品だよ。使用者のサポートをする為に開発したみたい」

【ＧＯＲＩＲＡ-ＫＡＮ】

『ウホッ！ウホッ！ウホッ！』

そう言いながら、竜馬は黒い缶……ゴリラ・カンドロイドを起動させた。

「そうか。……なぁ、竜馬。来週の試合だが…「箒、頼みがあるんだ」…な、なんだ？」

話の途中、竜馬は真剣な顔で箒を顔を見ながら告げた。

「付き合ってほしい」

「――――え？」

この時、箒は世界が止まる音を聞いた。

～翌日～

◆放課後　道場◆

「ごめん、遅くなった……よ？」

「……」

授業を終えた2人は、胴着姿で道場にいた。尚、竜馬の胴着は影宮に届けて貰った。

「どうしたの、箒？」

「……何でもない」

「？」

箒は頬を膨らませて不機嫌だが、竜馬は首を傾げるしかなかった。

（何が「付き合ってほしい」だ！特訓の相手ではないか！私はてっきり、その……）

箒は不機嫌の理由を心の声で叫んでいたが、後になるにつれて心の声は小さくなっていた。

「――き……箒！」

「はっ！」

箒は我に返ると、竜馬は心配そうに見ていた。

「体調が悪いの？やっぱり、止めた方が…」

「だだだ、大丈夫だ！！ほら、さっさと防具を着けろ！」

「あ、あぁ……」

箒の態度を気にしたが、竜馬は自分の黒い防具を着けた。
箒も赤い防具を着け、２人は向き合った。

「箒と打ち合うのは、本当に久しぶりだな」

竜馬は親友と一緒に、剣道をした頃を懐かしく思い目を閉じ……。

「そうだな。私はもう、昔の私とは違うぞ」

箒は片思いの人と、また打ち合う事が出来て小さく微笑んだ。

「それじゃ……」

竜馬は目を開いたが、いつもと違い、真剣な眼差しをしていた。そして……

「お願いするよ、全国大会優勝者さん！」

「よし、こい！」

特訓が開始された。

◆1年1組◆

「……」

同時刻、セシリアは教室の窓から空を見上げていた。

（あの男も専用機を持っているなんて……）

男……竜馬の発言した専用機の所持を聞いて、セシリアは考えていた。

「……！（フルフル）」

だがセシリアはその考えを消して、自分の勝利した事を考えだした。

（まぁ……例え専用機でも、わたくしの勝利は見えてますわ。このわたくし、セシリア・オルコットと《ブルー・ティアーズ》が…）

そう思いながら、セシリアは左耳のイヤーカフスを優しく撫でた。

「ねぇねぇ、道場で篠ノ之さんと竜馬君が剣道で打ち合ってるみたいよ！」

すると、廊下から話し声が聞こえてきた。

「ホント！篠ノ之さんって、去年の剣道全国大会で優勝したんでしょ。竜馬君、勝ち目ないんじゃないの？」

「そりゃそうだけど、面白そうじゃない。はやく行きましょ！」

話していた女子達は道場へと向かった。

（篠ノ之さんがねぇ……。面白そうですわね。あの男がボロボロで泣いているのが目に浮かびますわ）

その話を聞いたセシリアは意地悪な笑みをして、教室を出ていった。竜馬と箒が特訓している道場へと……。

◆道場◆

セシリアは道場に来ると中を見た。すると、剣道は終盤に差し掛かっていた。

「はあああっ！」

箒は竹刀を上段に構えて走り込み、竜馬に迫る。だが竜馬は一歩も動かずにいた。そして…

―バシィィィン！―

竹刀の音が、勢いよく響いた。

「なっ…！」

セシリアは一瞬の出来事に驚いた。
箒が竜馬の面を打ち出そうとした瞬間、竜馬が急に箒の懐に飛び込み胴を打ち込んだ。

「「「「おおおー！」」」」

ギャラリーは2人に拍手を送ると、2人は面を外した。互いの顔にはうっすらと汗をかいていた。

「ふぅ……。コレで8勝2敗。腕を上げたね、箒」

「むぅ……。これでは竜馬の特訓と言うより、私の特訓ではないか」

「そうかな？僕も最初取られた時は焦ったけど……」

「だが、そこから5連勝したではないか…」

そう言うと、箒はシュンッと小さく落ち込んだ。

「まぁまぁ、落ち込まないの……ん？」

ふと、竜馬はギャラリーの中にいたセシリアを見つけると、声を掛けた。

「オルコットさん。来週、良い試合をしよう」

「……ふんっ」

竜馬は微笑みながら言ったが、セシリアはそっぽを向いて道場を後にした。

「…まだ怒ってるのか――「竜馬、何を見ている！」――え？」

箒は不機嫌そうな顔をして竜馬を呼んだ。

「どうしたの箒？」

「休憩は終わりだ。続きをするぞ」

「分かった。そうしようか」

そして、試合が再会された。

その約１時間後、訓練は終了した。ちなみに、竜馬の結果は総合で２４勝６敗だった。

◆夕方　食堂◆

「「いただきます」」

訓練後、竜馬と箒は一度部屋に戻って用事を済ませ、食堂へ行って夕食を取っていた。ちなみに、箒は焼き魚定食を取っており、竜馬は……

「まさかＩＳ学園でコレが食べれるなんて……」

竜馬の前にあるのは、うどんの上にライス、さらにカレーが掛けられておりトンカツがトッピングされていた。コレが、巷で人気急上昇の定食……カツカレーうどん定食である。

「美味いなぁ。特に衣の湿った感が凄く好みだ…」

「よく食べれるな、その量を……」

「いっぱい動いたからね。よく食べれるよ♪」

竜馬は笑みを浮かべたが、箸を置いて箒を見た。

「箒、また時間があったら剣道に付き合ってくれるかい？」

「ああ、いいぞ」

「ありがと。頼りにしてるよ」

竜馬は微笑みながら箒に話した。

「ああ……。（竜馬が頼ってくれている竜馬が頼ってくれている竜馬が頼ってくれている……）」

平然と答えたが、頭の中では幸福に満ちていた。

～翌週　月曜～

◆放課後　第３アリーナ・Ａピット◆

代表決定戦当日、竜馬はＩＳスーツを着てＡピットで待機していた。

「もうすぐか…」

「龍東、準備はいいか？」

竜馬は後ろを振り返ると、そこには千冬、真耶、箒がいた。

「織斑先生、どうして此処に？」

竜馬は質問すると、真耶が答えた。

「龍東くんのＩＳのデータがまだありませんので、実物を見させてもらいますね」

「そうなんですか。箒は何で来たの？」

「わ、私は竜馬に激励をだな……」

箒は顔を赤くしながら言った。

「そっか。ありがとう」

「龍東、ＩＳを展開しろ」

「はい。（……行くよ、オーバーズ）」

千冬の言葉に、竜馬は目を閉じて心の中で相棒を呼んだ。すると、メダルが輝いて竜馬を包み込んだ。

光が消えるとそこには、両肩と背中に浮かんでいる甲冑のようなスラスターと、ベルトの正面と上に何かを入れる溝がある黒いＩＳを装着した竜馬がいた。

「コレが龍東くんの…「《オーバーズ》」…え？」

ふと、真耶は後ろを振り向いた。そこにいたのは、白衣を羽織った男だった。

「……影宮」

「あの時ぶりだな千冬さん。いや、ここでは先生かな？」

「どうして此処にきた」

「俺が開発したＩＳのお披露目だしさ、映像よりも生で見たいんだよねー。はいコレ」

そう言いながら、影宮は真耶にオーバーズの資料を渡した。

「竜馬、頑張って勝てよ」

「はい！」

影宮の言葉に答え、竜馬はピット・ゲートに進もうとすると、箒に話し掛けた。

「箒」

「な、なんだ？」

「行ってくる」

「あ……ああ。勝ってこい」

竜馬はその言葉に笑顔で応え、ゲートを出た。

◆アリーナ・ステージ◆

「あら、逃げずに来ましたのね」

ステージには、セシリアが腰に手を当てて待っていた。

彼女は専用機…ブルー・ティアーズに身を包み、手には２ｍを超す長大なレーザーライフル《スターライトｍｋ？》が握られていた。

試合は既に始まっているので、いつ撃ってきてもおかしくない状態だった。

「最後のチャンスをあげますわ」

すると、セシリアは腰に当てた手を竜馬の方に、びっと人差し指を突き出した状態で向けた。

「チャンス？」

「わたくしが一方的な勝利を得るのは自明の理。ですから、ボロボロの惨めな姿を晒したくなければ、今ここで謝るというのなら、許してあげないこともなくってよ」

そう言ったセシリアは目を笑みに細めた。すると、オーバーズの情報から、セシリアが射撃モードに移行し、セーフティのロック解除を確認した。

「……親友と約束したんだ。この勝負、負けるわけにはいかないよ」

竜馬が言い終わると、右手に展開されたエネルギー刀（ラズライト）を構えた。

「そう？残念ですわ。それなら……お別れですわね！」

―キュインッ！―

言い終わる直後、セシリアはスターライトｍｋ？を竜馬を撃ち抜こうとした。

「よっと」

だが竜馬は弾丸を回避すると、スラスターの出力を上げてセシリアに近づいた。

「甘いですわ！」

そう言うと、ブルー・ティアーズのフィン・アーマーから自立起動兵器《ブルー・ティアーズ（別名ビット）》を展開した。

「ちっ！」

竜馬は近づくのを止め、ビットの回避に集中した。

「さあ、踊りなさい。わたくし、セシリア・オルコットとブルー・ティアーズの奏でる円舞曲（ワルツ）で！」

そして、ライフルとビットによる射撃の嵐が、竜馬に襲い掛かる。

「だったら…！」

竜馬はラズライトでビームを弾きながら、左手にマシンガン《カービンＭ５Ｓ》を展開。そして、１つのビットに弾丸を放った。

「本体よりも先に叩く！」

だがビットはカービンＭ５Ｓを回避し、撃ち落とせなかった。

「そこだ！」

「なっ！」

だが、竜馬はビットの回避予測軌道にラズライトを投擲し１つ破壊すると、セシリアは驚いた。

「なかなかやりますわね！」

「そりゃどうも……っと！」

セシリアは更に残りのビットを全て展開すると、竜馬は回避に専念した。

◆アリーナ・Ａピット◆

「はぁぁ……。すごいですねぇ、龍東くん」

Ａピットでは、リアルタイムモニターを見ていた真耶がため息混じりにつぶやいていた。

「武装の展開が速いな。だいたい５００時間の稼働で身についたみたいだな」

「正確には、５０３時間１９分だけどな」

千冬の言葉に答えた影宮は、どこか楽しんでいた。

「……」

箒はモニターにうつる竜馬を見つめていた。

（私はまだ、お前と並ぶことが出来ないのか……竜馬…）

◆アリーナ・ステージ◆

「2機目貰い！」

一方、竜馬は2機目のビットの破壊に成功していた。

「そんな…！」

セシリアは驚いてるなか竜馬はラズライトを構え、セシリアの懐に飛び込もうとしてスピードを上げた。

「これで、終わりだ…「かかりましたわ！」…何？」

セシリアはニヤリと笑うと、腰部から広がるスカート状のアーマー

が展開した。

「おあいにく様、ブルー・ティアーズは6機あってよ！」

しかも、先程のレーザー射撃を行うビットではなく、弾道型（ミサイル）を放った。

「くそっ！」

竜馬は咄嗟に両手の武器をミサイルに投げて直撃を免れたが、爆風により引きはがされた。

「初見でこうまで耐えたのは、貴方が初めてですわね」

煙が晴れると、セシリアはビットを自分の周りに浮かべさせていた。

「ですが、貴方は武器も無く丸腰同然。わたくしに勝つ事は不可能ですわ」

「……フッ」

セシリアの言葉に、竜馬は笑っていた。その瞳は、まだ勝負を諦めていなかった。

「何が可笑しいですの？」

「いや、凄いなと思ってね。それに、本気を出さないと失礼だと思って…ね」

すると、竜馬の左手に1枚のセルメダルを出していた。

「だから、ちょっと本気をだすよ！」
そしてセルメダルをベルトの上にある投入口に入れ、右手をベルトの前にスライドさせた。すると……
―カポーン！―
ベルトから音が鳴り響き、白と緑が混ざった光の球体に身を包まれた。そして光が収まると、そこにいた。
黒いヘッドギアはU字型カメラアイとカプセル状のヘルメットが合体したバイザーに変化。
両手、両足、背中、胸と、合計１０個のオーブが付いた装甲。そう、オーバーズは姿を変えていた。

◆アリーナ・Aピット◆
Aピットでは、影宮以外が竜馬の変化に驚いていた。
「こ、これは！」
真耶はディスプレイを見て驚いた。そこにはオーバーズの情報が載

ってあると同時に、“《バース・モード》起動”と載っていた。

◆アリーナ・ステージ◆

「な、ＩＳの姿が変わった！？」

セシリアは目の前の事実に驚愕していた。ＩＳの姿が変わるのは１次移行（ファースト・シフト）しか知らなかった。だが、竜馬のオーバーズはそれを済んでいる。

「さて…。行こうか、バース！！」

竜馬は相棒…オーバーズ・バースモード（別名バース）の右手に展開した携行型火器（バースバスター）を撃ちながらセシリアに突っ込んだ。

「くっ、ブルー・ティアーズ！」

セシリアはミサイルを発射するが、バースバスターによって全て撃ち落とされた。そこにすかさず、ビットを２機多角的な直線起動で竜馬に接近させた。

「この距離なら、コレがいいかな！」

竜馬はバースバスターを収納すると、またメダルをベルトに挿入した。すると……

【ＣＲＡＮＥ　ＡＲＭ】

音声と共に、右腕にはクレーン状の武器（クレーンアーム）が展開された。

「あらよっと！」

竜馬はクレーンアームを降ると、先端のワイヤークレーンが発射され、２機のビットのスラスターを破壊した。

「なんですって！！」

セシリアが驚くなか、竜馬はクレーンアームをセシリアに向けて放った。

「イ、インターセプター！」

だがそこは代表候補生。クレーンが当たる直前、ショートブレード《インターセプター》で受け流した。

「きゃっ！」

だが竜馬のパワーが高く、セシリアはインターセプターを落としてしまった。

「よしっ！」

竜馬は攻撃を当てたことに、ガッツポーズを取った。

「迂闊でしたわ……。わたくし、貴方を侮っていましたわ」

「そりゃどうも」

すると、竜馬はクレーンアームを収納してバースバスターを展開させた。

「僕には、もう失いたくないものがいる。守りたい友がいる。いまはまだ自分の手が届く程しか守れないけど、それでも…命に変えて守ってみせる！」

そう言いながら、竜馬はバースバスターのバレルポッドを銃口に接続した

「……そうですか」

セシリアは目を閉じた。自分よりも大きな負けられない理由を聞き、彼の勝負に賭けた覚悟を聞き、セシリアは思った。

強くなりたい……竜馬のように。

「……なれますか？」

「ん？」

「わたくしも、貴方のように強くなれますか？」

すると、竜馬は笑顔で答えた。

「あぁ、強くなれるさ。だけど、今はこの勝負が終わってからだね！」

「！？……そうでしたね。なら、わたくしの全力を、貴方にぶつけます！」

そう言ったセシリアはシールドエネルギーを僅かに残し、全てをスターライトmk？に注いだ。

「そうか。だったら僕も、応えないとね！」

【ＣＥＬＬ　ＢＵＲＳＴ】

竜馬はバースバスターのトリガーを引くと、強力なエネルギー弾が発射された。

「コレが、わたくしの全力ですわ！」

同じく、セシリアも最大出力のレーザーを発射した。

―ドカアアァァァン！―

２つの弾丸は巨大な爆発をして２人を巻き込んだ。

―ビィィィイイ！―

そして終了のブザーが鳴り響くと、煙は晴れて２人は浮かんでいた。
そして……

『勝者、龍東　竜馬！』

勝負が決まった。

◆アリーナ・Ａピット◆

「ふぅ。なんとか勝てた…」

竜馬がピットに着くと、影宮は竜馬に近づいた。

「よっしゃ！よくやったぞ竜馬！」

「影宮さん。どうでしたか？」

「初陣としては上々かな。バースＣＬＡＷｓの単一仕様能力（ワンオフ・アビリティー）も出来てたみたいだし。まぁ強いて言うなら、他のＣＬＡＷｓも披露してほしかったなー」

「ははは…、頑張ってみます」

竜馬は苦笑いをすると、オーバーズを待機状態のメダルにした。
ちなみに、バースのワンオフ・アビリティーは『エネルギー・ドレイン・アタック』（略してＥ・Ｄ・Ａ）と言い、ＣＬＡＷｓの攻撃に当たったＩＳや武器のエネルギーを、バースのシールドエネルギーに変換する能力である。

「竜馬…」

「あ、箒！」

竜馬は箒に気付くと、ゆっくり近づいた。

「箒、勝ったよ♪」

「あぁ、よく頑張ったな」

２人は拳と拳を突き出すと、笑いあった。

「いいお友達ですね」

「……そうですね」

真耶の返事に千冬は応えたが、別の事を考えていた。
（２次移行（セカンド・シフト）無しで姿を変えるＩＳなんて聞いた事が無い。それに、バース・モードになる前の姿。あれではまるで……）
千冬はオーバーズが初めて展開された姿を、あるＩＳと重ねていた。細部は若干違うが、それは自分が初めて纏ったＩＳに酷似していた。
（まさかあれは…）
「織斑先生……、どうかしましたか？」
「ん？いや、何でもないですよ山田先生。私は先に戻りますので、これで…」
そう言うと、千冬はピットから出ていった。

～夜～

◆寮　セシリアの部屋◆

その夜、あのクラス代表決定戦が終わったセシリアは、シャワーを

浴びながら物思いに耽っていた。

（負けて……しまいましたね……）

負けてしまった……。だが不思議と後悔はしなかった。

（……）

セシリアは竜馬のことを思い出す。誰にでも向ける優しい笑顔と、強い意志の宿った瞳を。

他者に媚びることのない眼差し。それは、不意に自分の父親を逆連想させた。

（父は、母の顔色ばかり伺う人だった……）

幼少の頃からそんな父親を見て、セシリアは『将来は情けない男とは結婚しない』と決めていた。

しかし……

（……龍東……竜馬……）

彼は自分に勝った。セシリアは竜馬の強い瞳に、その言葉に呑まれていった。

『命に変えて守ってみせる！』

『あぁ、強くなれるさ』

父とは正反対のように強く勇ましい瞳が、あの優しい笑顔を忘れられなかった。

「龍東、竜馬……」

セシリアは竜馬の名前を口にしてみると、胸が熱くなるのを感じていた。

どうしようもなくドキドキとして、そっと自分の唇を撫でてみると、形のいい唇は触れられることを望んでいたかのように不思議な興奮を生み出した。

（わたくしは知りたい……もっと貴方のことを……竜馬さん……）

浴室には、ただただ水の流れる音だけが響いていた。

～翌日～

◆休み時間　教室◆

ＳＨＲでクラス代表が発表され、休み時間にはクラスメートが竜馬の前に来て話をしていた。

「コレでクラス対抗戦が面白くなるね」
「そうだよねー。せっかく世界で唯一の男子がいるんだから、同じクラスになった以上、持ち上げないとねー」
「私たちは貴重な経験を積める。他のクラスの子に情報が売れる。1粒で2度おいしいね、龍東くんは」
クラスメートの話しに、竜馬は苦笑いをするしかなかった。
「あの、竜馬さん……」
すると、竜馬の下にセシリアがやってきた。
「やぁ。先日はお疲れ様、オルコットさん」
（…竜馬…さん？）
箒はセシリアの言葉に違和感を感じた。
「は、はい。……そのことなのですが……申し訳ありませんでした！」
セシリアは急に、深々と頭を下げた。
「わたくしが少々、冷静さが欠けていたために、あのような失礼なことを……」
「あぁ、気にしてないよ。あの時、僕も酷いこと言っちゃったし…

…こっちこそゴメン」

「……お優しいのですね」

竜馬の謝罪に、セシリアは頬を赤くして小さく言った。

「ん？」

「な、なんでもありませんわ。それで、宜しければもう1度、自己紹介をさせていただけませんでしょうか」

「ああ、構わないよ。改めまして、龍東　竜馬だ。よろしく」

「わたくし、イギリス代表候補生のセシリア・オルコットです。セシリアと呼んでください」

2人は握手をすると、竜馬は利き腕の拳握った。

「ん」

「え？」

竜馬はセシリアにも同じように拳を作らせると、竜馬はセシリアの拳を自分の拳に突き当てた。

「これで今日から親友だね。よろしく、セシリア」

親友の証をした竜馬は、セシリアに笑顔を向けた。すると、セシリアは竜馬の利き手を両手でしっかり握った。

「はい！あの……そ、それでですわね、本日の放課後……ふ、ふたりっきりで特訓を――」

―バンッ！―

いきなりの音に驚いた竜馬は、音の方に目を向けた。そこには、異様に殺気立った瞳をした箒だった。

「あいにくだが、竜馬の相手は足りている。“私が”、直接頼まれたからな」

“私が”を特別強調した箒はセシリアを睨んだが、セシリアは正面から受け止めて視線を返していた。

「あら篠ノ之さん。貴女が竜馬さんに教えるより、わたくしのように優秀かつエレガント、華麗にしてパーフェクトな人間が特訓に付き添えば、それはもうみるみるうちに成長を遂げますわ」

「なんだとっ！」

「なんですの！」

竜馬は箒とセシリアの様子を見て、ヤレヤレと心で思った。

「ねぇ、りゅーくん。止めなくていいの？」

「まぁ親友と親友のじゃれあいみたいだし、大丈夫だよ。いやー、仲良しは良いことだねー」

「「私(わたくし)はこいつ（この人）と仲良しじゃない！（ありませんわ！）」
」
竜馬の言葉に、箒とセシリアは同時に言った。

◆メルダ・ファウンデーション　地下技術開発室◆

同時刻、メルダ・ファウンデーションの地下にあるＩＳの技術開発室で、ある開発をしていた。

「影宮局長。全セルメダル１５００枚の準備が完了しました」

１人の研究員は影宮に近づき報告した。

「そうか。では、起動だ」

「はい！」

研究員は走り去ると、影宮はアクリルケースに入れられた物を見た。
それはセルメダルとは違い、１５枚全てに色があるメダルだった。

「起動開始！」

影宮の発言により、研究員はレバーを引いた。

すると、別室で用意された１５００枚のセルメダルは光の粒子となり、ホースを辿って１５枚のメダルに吸収されて激しく輝いた。

「……」

光が収まると、影宮はアクリルケースにある赤いメダルを手に取った。

「これでコアメダルの完成だ。あとは竜馬に届ければ……フハハハッ」

そう言うと、影宮は子供のような笑みを浮かべていた。

オリジナルＩＳ設定（１２／１９日　更新）（前書き）

◎追加項目

・サゴーゾコンボ
・ガタキリバコンボ

オリジナルＩＳ設定（１２／１９日　更新）

▼機体名：オーバーズ

▼操縦者：龍東　竜馬

▼開発者：黒木　影宮

▼待機状態：メダル

▼特殊機能：メダルチェンジ

▼基本装備

エネルギー刀（ラズライト）

狙撃ライフル《ドミニオン》

双槍（アヴェンジャー）

▼後付武装

ショートアックス《バーンブレイズ》

薙刀《真機鉄》

マシンガン《カービンＭ５Ｓ》

ショットガン《ライオットＳ３》

ビームガン《マグナムブラスター》

ビームマシンガン《アサルトＡＲ４Ｃ》

ハンドガン《スカウト》

ハンドガン《レッドホーク》

ライフル《シューターＳＲ３５Ｓ》

レーザーライフル《プリズム》

ビームショットキャノン《メテオ》

実弾機関銃（ハイパーマシンガン）
レーザー機関銃（ハイパワーガトリング）
ショットキャノン《アース》
４連ランチャー《フォークラスターＬ》
広範囲爆撃ランチャー《メガデス》
高電圧弾ランチャー《ブリッツ》
大斧（ガイア）
ブースター内蔵型斧（ソニックアックス）
高電圧ハンマー《タケミカヅチ》
苦無（アカツキ）
エネルギーナイフ《カレッカ・エッジ》
打突強化鉄甲（ブレイブ）
各種グレネード
各種カンドロイド

両肩と背中に甲冑のような非固定浮遊部位型（アンロック・ユニット）の推進機（スラスター）が合計３機、腰部にメダルチェンジツール《オーバーズ・ドライバー》を装着しているのが特徴の万能型ＩＳ。

拡張領域（バススロット）が第２世代（ラファール・リヴァイヴ）ＩＳの４．６倍だが、高いコストを持つメルダ製の武器のみを量子変換（インストール）しているので、それほど空いてない。

特殊機能は、ドライバー上にあるセルメダル投入口と、ドライバー正面にある３つのメダルをはめ込む溝にコアメダルを入れることで、オーバーズの姿と性能が一気に変化させる。

●オーバーズ・バースモード

▼基本装備
携行型火器（バースバスター）…セルメダルをエネルギー弾に変換して攻撃する

▼後付武装
バースＣＬＡＷｓ
グレネード各種
カンドロイド各種

▼ワンオフ・アビリティー
《エネルギー・ドレイン・アタック（Ｅ・Ｄ・Ａ）》

オーバーズがドライバーにセルメダルを投入して変化した姿。
背中のスラスターが無くなりスピードは落ちたが、全身に装甲が付加されて防御力が上昇している。
バースモード状態ではプリセットはバースバスターのみになり、イコライザが専用武器《バースＣＬＡＷｓ》に変化され、グレネードとカンドロイド以外のイコライザが仕様不可能になる。

ワンオフ・アビリティー《Ｅ・Ｄ・Ａ》は名前通り、一部のバースＣＬＡＷｓを相手ＩＳか武装に当てる事でエネルギーを自身のシールドエネルギーに変換する。

▼バースＣＬＡＷｓ

両腕と両足、胸と背中、合計６個で構成されているバースモード専用武装。
威力が高く、一部の武装でワンオフ・アビリティーを発動させる。

・クレーンアーム
右腕に装着される武装。ワイヤーフックを伸ばして離れているモノに当てたり、引き寄せる事が出来る。

・カッターウイング
背中に装着される武装。ブースターが付いているのでバースのスピードを補える他、取り外してブーメランのように投げる事も可能。

・キャタピラレッグ
両足に装着される武装。悪路でも難無く走行出来る他、無限軌道の連続ヒットにより高い威力を持つ。

・ショベルアーム
左腕に装着される武装。バースＣＬＡＷｓの中で１番の出力を持つ。ショベルはモノを掴む事も可能で、重いモノでも軽々持ち上げる。

・ドリルアーム

右手に装着される武装。高速回転によって相手を継続的に攻撃出来るので、ワンオフ・アビリティーとの組み合わせでは最適である。クレーンアームと接続可能。

・ブレストキャノン
胸部に装着される武装。バースＣＬＡＷｓ唯一の遠距離武装で、セルメダルを数枚ドライバーに投入してエネルギーを送り込むことで威力が上がる。

●オーバーズ・オーズモード

▼基本装備
大剣（メダジャリバー）…セルメダルを投入してスキャンすると威力が上がる。最大３枚まで投入可能。

▼後付武装
可変型自販機（ライドベンダー）
グレネード各種
カンドロイド各種

▼ワンオフ・アビリティー
各コンボによって変化する

オーバーズが3枚のコアメダルをドライバーにはめ込んで変化した姿。

全身の装甲が、胸部の円形プレートの装甲に描かれている3種類の生物をモチーフにした装甲になっている。

オーラングサークル

オーラングサークルからISスーツに引かれている、頭部・四股に伸びてあるエネルギー流動路からエネルギーを送る事によって、各部の特徴能力が発動する。

ラインドライブ

125の形態変化の中で1色のコアメダル3枚を使用した姿を《純正コンボ》、基本コンボを除いた姿を《亜種コンボ》と言われる。

◎コアメダル

オーバーズ・オーズモードに変身する為に使用する5種類3枚組のメダル。

▼頭部：ハイパーセンサーの性能を上昇させる他、スラスター等のユニットを形成しているのが特徴。

○タカ
小さな赤い羽をモチーフにしたヘッドギア《タカヘッド》と、背中の装甲に赤い翼状の固定型スラスター二対を形成するコアメダル。
タカヘッドとスラスターにエネルギーを送り込むと、赤い空中投影ディスプレイ《ホークアイ》を起動して、風の流れや光学迷彩をしているモノを見つけだす事が可能。

○クワガタ
クワガタの顎をモチーフにしたアンテナ《クワガタヘッド》と、両肩の後ろに垂れ下がった緑の巨大なツノのアンロック・ユニットを各1本ずつ形成するコアメダル。
クワガタヘッドにエネルギーを送り込むと、自分を中心に視野を全方位３６０度見る事が出来る《スタッグ・アイ》が発動する。
ツノにエネルギーを送り込むと、ツノが上を向いてクワガタの顎のような形になり電撃を中距離に放つ事が出来る。そのまま挟む事も可能。

○ライオン
黄色いヘッドホンに水色のサングラスが付いた《ライオンヘッド》と、両肩横に浮かんでいる左右非対称のアンロック・ユニット（右は外側がギザギザなリング型ユニット、左は獣の顔型ユニット）を形成するコアメダル。
リングにエネルギーを送り込むと、広範囲に放出される強烈な光熱（ライオネルフラッシャー）が発動可能で、相手の目をくらませる。

○サイ
白銀のヘルメットにサイのような巨大な角を1本付いている《サイヘッド》を形成するコアメダル。
角の《グラビドホーン》はゾウレッグと組み合わせることで、ソナ

ーのように相手を感知する事が出来る。

○シャチ
背鰭のような突起と2個のライトが付いたヘッドライト《シャチヘッド》と、背中に2本のボンベとホースを形成するコアメダル。
ボンベにエネルギーを送り込むと《カムイ》と呼ばれるナノマシン入りの水を放出可能で、浴びせたＩＳや武装に異常をもたらす。
ヘッドライトにエネルギーを送り込むと《オルカエコー》を発動して、相手の熱源を探知する事が可能。

▼腕部・全装甲に専用武器が装備されているのが特徴。

○トラ
黄色の腕部装甲（トラアーム）を形成するコアメダル。
両前腕部に装備された折り畳み式鉤爪（トラクロー）状武器は、エネルギーを送ることによって真空波を発生させる。

○カマキリ
緑の腕部装甲（カマキリアーム）を形成するコアメダル。
両前腕部に装着されているブレード《カマキリソード》は逆手に持って使用される。

○ゴリラ
銀の腕部装甲（ゴリラアーム）を形成するコアメダル。
両前腕部に装着されているガントレット状の武器（ゴリバゴーン）は、ロケットパンチのように射出する《バゴーンプレッシャー》が可能。

○ウナギ

青い腕部装甲（ウナギアーム）を形成するコアメダル。
両肩には電気を生み出しており、武器や腕を強化出来る。
両肩に備わっている着脱可能の鞭状の武器《電気ウナギウィップ》は、高圧電流を帯びた鞭（ボルタームウィップ）を放つ事が出来る。

○クジャク
赤い腕部装甲（クジャクアーム）を形成するコアメダル。
左腕に装備されている手甲型エネルギー解放器（タジャスピナー）でのエネルギー弾を放出出来る。
又、タジャスピナーは開閉可能。最大7枚のメダルをはめ込める事が可能で、それを右手でスキャンする事で《ギガスキャン》を発動できる。

▼脚部：推進力上昇の他に、キック力等も上昇しているのが特徴。

○バッタ
緑の脚部装甲（バッタレッグ）を形成するコアメダル。
足裏にはバーニアが内蔵されており、圧縮空気を噴射する《ショートバーニア・ブースト》が使用できる。
緊急回避や、踏み付けた瞬間に使って相手を弾き飛ばす事も可能。

○チーター
黄色い脚部装甲（チーターレッグ）を形成するコアメダル。
エネルギーを送り込むと太腿に取り付けられたマフラーからスチームが吹き出し、超高速で移動出来る。

○ゾウ
黒い脚部装甲（ゾウレッグ）を形成するコアメダル。

エネルギーを送り込むと強力な踏み付け《ズオーストンプ》を発動して、でかい振動を与える。

○タコ
水色の脚部装甲（タコレッグ）を形成するコアメダル。
エネルギーを送り込むとその場に留まる事が出来る《オクトスパイク》を発動出来る。

○コンドル
赤い脚部装甲（コンドルレッグ）を形成するコアメダル。
爪先に《ストライカーネイル》と踵に《ラプタードエッジ》が付いており、ラプタードエッジからは真空波を出して切り付ける事が可能。

●オーズ・タトバコンボ

▼使用メダル
タカ・トラ・バッタ

▼ワンオフ・アビリティー
無し

▼必殺技
タトバキック…赤・黄・緑のリングを潜ってから放つ跳び蹴り。

オーバーズ・オーズモードの基本となるコンボ。
能力のバランスが良いので、相手を選ばずに戦える。
そこから他のコアメダルに変えて戦うのが、このコンボの基本戦法。

●オーズ・サゴーゾコンボ

▼使用メダル
サイ・ゴリラ・ゾウ

▼ワンオフ・アビリティー
Ｓｕｎ　ｇｏｅｓ　ｕｐ…重力操作が可能になる。

▼必殺技
サゴーゾインパクト…跳躍して着地すると銀色の波紋状のリングが発生し、触れた対象物を地面に減り込ませながら引き寄せる。
そしてグラビドホーンにエネルギーを送り込んでエネルギー状の角を形成し、前に突き出してそれを両拳で叩きつけると強力な衝撃波を発生させる。

オーバーズ・オーズモードの純正コンボ。
純正コンボの中で防御力が最も高く、白兵戦に強い。
自分の周辺に発生する重力結界によって、全ての射撃武装が効かない。

●オーズ・ガタキリバコンボ

▼使用メダル

クワガタ・カマキリ・バッタ

▼ワンオフ・アビリティー
Ｇｏｔ　ｔｏ　ｋｅｅｐ　ｉｔ　ｒｅａｌ…最大２０体のヒューマン・ドロイド、《ブレンチシェイド》を呼び出す事が可能。

▼必殺技
ガタキリバキック…呼び出したブレンチシェイドと共に、３つの緑のリングを潜ってから放つ跳び蹴り。

オーバーズ・オーズモードの純正コンボ。
純正コンボの中で最も軽量で、リーチを活かした連続攻撃が得意。
ブレンチシェイドを呼び出して、状況に応じる攻撃を指示できる。
ブレンチシェイドが多い程個々の威力は小さく、少ない程威力は大きくなる。（５体まで呼び出せば同じ威力になる）

03話【オカマとパーティーとコアメダル】（前書き）

第3話ができました。

タイトル通り、苗字は変えてますが、あのキャラが出ます。

それと、メダル関連のネタや兵器も出していってますので、分かってくれたらうれしいかも。

それではどうぞ！

03話【オカマとパーティーとコアメダル】

◆6時間目　第1アリーナ・ステージ◆

4月の下旬、竜馬達は第1アリーナにて授業を受けていた。

「ではこれよりISの基本的な飛行操縦を実践してもらう。龍東、オルコット。試しに飛んでみせろ」

千冬の言葉に竜馬達はすかさず反応し、ISを展開させた。尚、竜馬との対戦で損傷したセシリアのブルー・ティアーズに装備されているビットは、完全に修復が終わっていた。

「龍東、お前はバースモードに変更しろ。その状態のスピードは見たが、バースの状態はそんなに見てないからな」

「分かりました。では……」

竜馬はセルメダルを出すとベルトに投入して、右手をベルトの前にスライドさせた。

―カポーン！―

光の球体に包まれると、オーバーズは姿を変えてバースになった。

「よし、飛べ」

千冬は確認すると、竜馬達に指示をした。２人は急上昇するが、若干竜馬は遅れていた。

『どうした。データ上の出力ではオーバーズの方が上だぞ』

千冬は通信回線から竜馬に言った。

「モードが変更して出力が減ってるんですよ。ＣＬＡＷｓを展開すればデータと同じぐらいになりますが……」

『そうか。よし、いいだろう。展開後は最高速度で飛んでみろ。いいな』

竜馬は「はい」と答えると、竜馬はセルメダルをベルトに入れた。

【ＣＵＴＴＥＲ　ＷＩＮＧ】

音声と共に、背中には鋭い刃がある翼状の武器（カッターウイング）が展開され、ブースターを起動させた。

『お速いですわね』

飛行中、セシリアは個人間秘匿通信（プライベート・チャンネル）を開いた。

「まぁ、ウイング自体は微調整すれば今よりも速くなるけど、僕の腕じゃあ、まだコレが精一杯かな」

言いながら竜馬は旋回飛行をしていると、セシリアに近づいて話し

掛けた。

「セシリアは放課後、予定あるかな？狙撃の訓練をするから指導してほし…「本当ですか！」……う、うん」

竜馬の言葉を遮る様に、セシリアは驚きと嬉しさの顔をして言った。あの試合以降、何かと理由を付けては竜馬と練習をしており仲が縮まっていた。しかし竜馬に対して態度が柔らかくなった分、箒に対しては硬くなっていた。

「分かりましたわ。それでは放課後、第３アリーナでしましょ――」

『竜馬っ！いつまでそんなところにいる！早く降りてこい！』

いきなり通信回線から怒鳴り声が聞こえたので、竜馬は驚いた。すると地上では、真耶がインカムを箒に奪われてオタオタしていた。

『２人共、急降下と完全停止をやって見せろ。目標は地表から１０ｃｍだ』

「了解です。では竜馬さん、お先に」

そう言うとセシリアは直ぐさま地上に向かい、完全停止を難無くクリアーした。

「流石だね。んじゃ、僕も……」

それを確認した竜馬も急降下するために速度を上げた。

（よし、ここで停止準備）

だが、地表５０ｃｍに来たところでトラブルが起こった。

―ガンッ！―

「痛っ！」

―ドスッ！―

竜馬は急に後頭部を痛みに襲われた。そのせいで、地上に俯せで墜ちてしまった。

「らしくないぞ、竜馬」

「痛～っ。何だ何だ？」

腕を組み目尻をつり上げている箒をよそに、竜馬は後ろを見た。

『キュイー！』

そこに飛んでいたのはタカ・カンドロイドだったが、色は赤ではなく黄色になっていた。

（黄色のタカ！まさか……）

竜馬は黄色いタカ・カンドロイドを見て、ある人物を思い出した。

「竜馬、聞いてるのか！」

箒の言葉に竜馬は我に返ると、箒は続けざまに言った。

「どうしたんだ竜馬。らしくないしっぽ……「大丈夫ですか、竜馬さん？お怪我はなくて？」……ムッ……」

箒の言葉を遮るように竜馬の前にセシリアが立ち、竜馬に手を差し出した。

竜馬はその手を取ると、姿勢制御をして上昇した。

「あぁ、あの高さぐらい大丈夫だよ……」

「そう。それは何よりですわ」

セシリアは「うふふ」と楽しそうに微笑むと、それを見た箒は不機嫌そうに言った。

「……ＩＳを装備していて怪我などするわけがないだろう……」

「あら、篠ノ之さん。他人を気遣うのは当然のこと。それがＩＳを装備していても、ですわ。常識でしてよ？」

「お前が言うか。この猫かぶりめ」

「鬼の皮を被っているよりマシですわ」

―バチバチバチッ―

2人の視線が激しくぶつかり、火花を散らす様だった。
クラスの大半の女子はその様子を見て“、男子を取り合うような場面”として見ていたが……。

（うーん。ハイパーセンサーにこんな機能あったっけ？）

しかし、その男は全く別の事を考えていた。

「あのタカは……もういないか……」

竜馬は辺りを見ると、黄色いタカ・カンドロイドはいなくなっていた。

「おい、馬鹿者共。邪魔だ。端っこでやっていろ」

すると、千冬は箒とセシリアの頭をぐいいっと押しのけて、竜馬の前に立った。

「龍東、その状態で武装を展開しろ」

「はい」

「よし。では始めろ」

そう言われ、竜馬は辺りに人がいない事を確認すると、相手に銃火器を向けるイメージをした。そして一瞬爆発的に光ると、その手にはバースバスターが握られていた。

「いいだろう。次は近接武装を展開しろ。確かＣＬＡＷｓにしか無かったな」

「分かりました。では…」

竜馬はバースバスターを収納すると、セルメダル２枚を取り出して、ベルトに投入した。

【ＣＡＴＥＲＰＩＬＬＡＲ　ＬＥＧ】

【ＳＨＯＶＥＬ　ＡＲＭ】

音声と共に、左腕には巨大なショベル状の武器（ショベルアーム）と、両足には無限軌道型移動補助武器（キャタピラレッグ）が展開された。

展開が完了すると、竜馬はキャタピラレッグで移動しながらショベルアームを豪快に振って、更にキャタピラレッグによる蹴り技を披露した。

「ふむ……。基本武器の展開は悪くないがＣＬＡＷｓはその倍か……。時間短縮が出来ないのは厄介だな」

「通常の展開とセルメダルによる展開ではシステムが違い過ぎますので……。すみません」

「まあいい。セシリア、武装を展開しろ」

「はい」

セシリアは左手を肩の高さまで上げ、真横に腕を突き出した。一瞬爆発的に光ると、その手にはスターライトｍｋ？が握られていた。

「流石だな、代表候補生。……ただし、そのポーズはやめろ。横に向かって銃身を展開させて誰を撃つ気だ。正面に展開できるようにしろ」

「で、ですがコレはわたくしのイメージをまとめるために必要な……「直せ。いいな」……っ！……はい」

セシリアは反論の余地は大いにあるような顔をしていたが、千冬の一睨みによって話が終わった。

「次は近接用の武装を展開しろ」

「は、はい……」

（…ん？）

竜馬はセシリアの顔色が変わったことに気付き、試合の時にインターセプターを展開する際、時間が掛かっていたことを思い出した。

（時間が掛かるということは、今まで射撃戦闘しかしてないのかな。こりゃあ、狙撃訓練のお礼に近接訓練をしてあげようかな……）

そう思うと、ヤケクソ気味にインターセプターを叫んだセシリアに気付いた。

「……何秒掛かっている。お前は、実戦でも相手に待ってもらう

のか？」

「じ、実戦では近接の間合いに入らせません！ですから、問題ありませんわ！」

「ほう…。龍東との対戦では懐に入り込まれそうな場面がいくつか見られたが？」

「あ、あれは……その……」

セシリアの言葉は歯切れの悪くなり、ゴニョゴニョとまごついていた。

竜馬はその様子を見ていると、セシリアにキッ！と睨まれ、プライベート・チャンネルが送られた。

『貴方のせいですわよ！あ、貴方が……わたくしに飛び込もうとするから……せ、責任を取っていただきますわ！』

「？」

セシリアの言葉に、竜馬は頭を傾げた。

「……時間だな」

千冬は腕時計を見ると、授業の終了間近だった。

「今日の授業はここまでだ。すぐに着替えて教室に戻るように」

千冬はそう言うと、女子全員は更衣室に行った。尚、竜馬は反対方向の更衣室へ行っていた。

◆放課後　ゲート前◆

「おかえり～タカちゃん♪」

授業終了の1時間後、ゲート前には背中に三日月のエンブレムが付いている黒いジャケットを着た、ガタイの良い男がいた。その男の手には、黄色のタカ・カンドロイドが置かれていた。

「竜馬ちゃんの授業は終わったみたいねっ♪んじゃ、会いに行きましょー！」

男はゲートを潜り、クネクネと歩いて行った。

◆第3アリーナ・ステージ◆

「……」

竜馬は現在、地表約１００ｍにあるバルーンを狙撃ライフル《ドミニオン》で狙っていた。

周りには、バルーンの破片がいくつもあり、元の数が多いのが分かる。

―バンッ！―

すると、ライフル特有の音が鳴り響き、少し遅れて最後のバルーンが割れた。

「ふぅ……」

「素晴らしいですわ、竜馬さん」

「いや、ここまで出来たのはセシリアのおかげだよ。ありがとう」

「い、いえ……それほどでも……」

竜馬の言葉に、セシリアの顔は赤くなった。

「それじゃあ、次は近接訓練をしようか」

「あの……、わたくしは余り近接戦闘は…」

「大丈夫だよ。僕も近接武装を展開するから同じさ」

そう言うと、両手にはエネルギーナイフ《カレッカ・エッジ》が握られていた。

「……分かりましたわ。では、お手柔らかにお願いしますわ」

セシリアもインターセプターを展開させた。

「それじゃ、行く…「龍東くーん！」…ん？」

竜馬は声の方に振り向くと、真耶がこちらに近づいていた。

「山田先生。どうしたのですか？」

「あのー……龍東くんにお客様が来ているのですが……」

「お客さん？」

「でも……あまりにも怪しい動きをしていたので、警備員の方たちと一緒に応接室に待たせているんです」

（……まさか）

竜馬は確信してしまった。1時間前に見た黄色いタカ・カンドロイド、怪しい動きの男、それらのキーワードが完全に一致する人物を知っていた。

「分かりました。今から向かいますね」

「はい。それじゃ、先生は会議があるから」

真耶の姿を見届けると、セシリアが近づいていた。

「どうかしましたか？」

「あぁ…。僕にお客さんが来てるって言われたから、ちょっと行ってくるね」

「でしたら、わたくしも一緒に行きますわ」

「あー……まぁ、いいけど……」

「……？」

竜馬の態度に、セシリアは不思議そうに思った。

「んじゃ、ピットに戻ったら通路の自販機で待ち合わせようか」

「えぇ、分かりましたわ」

そして、２人はそれぞれのピットに戻った。

◆通路◆

「あれ？箒」

着替え終えた竜馬は待ち合わせ場所に着くと、箒と鉢合わせた。箒は部活後なのか、胴着姿だった。

「訓練は終わったのか？」

「終わったというか、なんかお客さんが来たから中断したんだ」

「客？影宮さんか？」

箒がそう言うと、竜馬は憂鬱そうな表情をした。

「いや、違うと思う。多分、予測が正しかったらお客さんは……「竜馬さーん」…」

竜馬の言葉を遮り、セシリアがやってきた。

「あら、篠ノ之さん。何かわたくし達にご用ですか？」

「……竜馬、どういうことだ？」

箒は竜馬に話し掛けると、不機嫌オーラが垂れ流していた。

「ん？ああ、セシリアも一緒に行くんだって。そういえば、箒は何処に行くんだ？」

「私は職員室に用がある。それだけ……」

言いかけるが、箒は手を口に当てて考えていた。

「……箒？」

「よし、私も一緒に行こう」

「なっ！」

箒の言葉にセシリアは驚いた。

「箒も？まぁ応接室は職員室に近いか……。セシリアも良いよね？」

「え、えぇ……いいですわ」

まごついたセシリアだが、心の中では少し余裕だった。

（まさか篠ノ之さんに出会うとは、予想外でしたわ。でも、竜馬さんとの実戦訓練はわたくしとしか一緒にできませんですし、まだまだ余裕ですわ！）

対して、箒は少し焦っていた。

（セシリアも一緒だったとは……。早く訓練機の使用許可を貰わないと、竜馬ともっと一緒にいられなくなる！）

一方、竜馬はある人物の事を考えていた。

（ここって女子しかいないからなー。あの人、大人しくしてくれるかなぁ……）

3人はそれぞれ思いながら、応接室に向かった。

◆応接室◆

3人は応接室の前に来ると、竜馬はドアをノックした。ドアが開くと、そこには千冬が立っていた。

「来たか。ん？篠ノ之とオルコットも一緒か…」

「織斑先生。どうしてここに？警備員がいるって山田先生が……」

「あぁ……。アイツが担任を出せとうるさいから、私が呼ばれたんだ。そのあとで戻って行った」

「竜馬ちゃ～ん！久しぶりねぇ～♪」

すると、千冬の背後から声が聞こえた。そこにいたのは、ゲート前にいた男だった。

「ひ、久しぶりです、京水さん」

竜馬は男……京水の名前を呼ぶと、京水はクネクネ動きながらこち

らに来た。その動きを見た3人は若干引いていたが、セシリアは竜馬に話し掛けた。

「あ、あの……竜馬さん。こちらの方は…」

「あ、あぁ……。この人はメルダでＩＳ武器開発局の主任で……」

「須藤　京水（すどうきょうすい）よ～。よろしく♪あんた達は……竜馬ちゃんのお友達？」

「は、はい。わたくしはイギリス代表候補生のセシリア・オルコットと申します」

「……ジー…」

すると、京水はセシリアをジーっと見つめた。

「あ、あの……「いい身体してるじゃな～い…」…えっ！？」

京水の言葉にセシリアは数歩下がったが、京水は同じ歩数で近づいた。

「でも……私の方が……おっぱい大きいわ……」

「あ、あ、貴方！！初対面で失礼じゃありま――「私の方が、おっぱい大きいわ！！」――ひぃっ！？」

京水の叫びにより、セシリアは竜馬の背中に隠れた。

「りょ、竜馬……大丈夫なのか、あの変なオッサン――「変なオッ

サン！」――うわっ！！」

箒の言葉により、京水は血相を変えて箒に近づいていき言った。

「言ったわねっ！！あんたレディーに対して最大の侮辱をっ！！ムッキィィィィィィィ！！」

「し、失礼しました！？」

京水の豹変ぶりに、箒は謝罪をしながら竜馬の背中に隠れた。

「あーヨシヨシ。……京水さん。僕に何か用事ですか？」

竜馬は箒とセシリアの頭を撫でながら、京水が学園を訪問した理由を聞いた。

「あらいけない、私ったら熱くなっちゃったわ……。はいコレ」

すると京水はリュックの中から黒いホルダーと資料を取り出すと、竜馬に渡した。

「コレって……まさか！」

竜馬はホルダーの中を確認した。そこにはカラフルなメダルが15枚と、セルメダルが9枚はめ込まれていた。

「そう！コアメダルが完成したから持ってきたわ♪」

「そうだったんだ。でも、完成したら影宮さんが持ってきそうだけどなぁ…」

「影宮ちゃんに頼まれたのよ。実際はそうしたかったみたいだけど、急な仕事が入っちゃったからね～」

京水はクネクネと動きながら言った。

「あと、明日は土曜日よね。昼頃に影宮ちゃんが来てコアメダルの性能テストするみたいだから、予定空けといてね」

「そうですか。分かりました」

「それじゃあ私は帰るわね。早く帰って新しい武器の最終調整しないといけないから……じゃあね、竜馬ちゃん！」

京水はヌルヌルと動きながら応接室を出た。

「……大丈夫？2人とも」

竜馬は箒とセシリアの心配をした。

「す、凄い剣幕だった……」

「こ、怖かったですわ……」

2人を見て、竜馬は苦笑いをするしかなかった。

◆夕方　寮　竜馬・箒の部屋◆

京水と別れた後、竜馬とセシリアは寮に戻ってきて部屋にいた。箒はというと、職員室に用があるので今はいない。

「コレが、コアメダル……」

竜馬はメダルホルダーにある赤いコアメダルを手に取ると、じっくりと見た。

「……」

「竜馬さん。どうしましたか？」

「ん？あぁゴメン。やっとオーバーズのコアメダルが届いたからじっくり見てた」

「……1つ聞いても、いいですか？」

「何？」

「このメダルって、一体何ですの？試合の時や、今日の授業にも使っていましたし」

セシリアはメダルホルダーのメダルを指差した。

「そうだなぁ……」

竜馬はそう言うと、セルメダルを手に取った。

「これはセルメダル。バースモードに展開する時に使う他に、ＣＬＡＷｓの展開、バースバスターの弾丸にも使うメダルだよ。あと他に……」

良いながら、竜馬は机に置いてある水色の缶を手に取った。

「コレを買うのにも使うかな」

【ＴＡＫＯ-ＫＡＮ】

『タコー！』

プルタブを開けると、脚を回転しながら飛んでいるカンドロイド……タコ・カンドロイドを起動した。

「まあ！かわいらしいですわ」

「よかったらあげようか？あ、でも新しい方がいいか――「ほ、本当ですの！？」――な……ん？」

竜馬はセシリアを見ると、眼をキラキラさせて竜馬を見ていた。

「こ、こちらの物を貰ってもいいんですの！？」

「え？新しい方がいいとおも――「いえいえいえ、それが良いのですわ！？」――……そ、そう？」

「はい！」

「まぁ……良いか。はい」

竜馬はタコ・カンドロイドを元に戻してセシリアに渡した。

「ありがとうございます！！一生大事にしますわ！！」

セシリアはタコ・カンドロイドを大事そうに持った。

―ガチャ―

「……何をしている」

部屋の扉が開く音がすると、少々ご機嫌な箒が制服姿でいた。

「おかえり箒。用事は終わったの？」

「ああ。訓練機の使用許可を貰ったぞ！今度の訓練は、剣道からＩＳに変更だ」

箒は許可書を竜馬に見せていると、セシリアは心の中で焦っていた。

（くっ……！まさか、こんなにあっさりと訓練機の使用許可が下りるだなんて……。コレでは、竜馬さんとふたりっきりの時間が大幅

に減ってしまいますわ！）

「…セシリア、どうかした？」

「い、いえ！なんでもありませんわ！」

「そう？んじゃ、コアメダルについては食堂で話すよ」

そう言うと、竜馬は立ち上がって部屋を出た。

「おい竜馬！私は帰ってきたばかりだぞ。少し待て……っておい！」

「り、竜馬さん！お待ちになって！」

竜馬を追うように、箒とセシリアも部屋を出た。

◆食堂◆

竜馬達は食堂に着くと、それぞれ夕食を持って同じテーブルに座った。ちなみに箒は焼き魚定食、セシリアはパスタ、そして竜馬は和風おろしハンバーグ定食だ。

「…成る程な。つまりコアメダルはオーバーズの装甲を完全に変化するメダルなのか」

「うん。資料には確か、セルメダル１００枚分の力があるコアメダルを3枚使って、オーバーズを変化させるんだ。この場合は変身って言うのかな…」

「１００枚ですか……。随分お高いですわね……」

セシリアは食堂に着く前に、セルメダルの値段について質問していた。

セルメダル1枚の価値は、日本円で約1万円と言っていた。その１００枚分で作られたコアメダル１５枚で１５００万円……。１体のＩＳにそれほどの資金を注ぎ込むとは、セシリアはとても驚きを越えて呆れたように言った。

「そういえば、２人は明日どうするの？僕は性能テストをするから特訓が出来ないけど…」

すると、箒は頬を赤くして言った。

「け、見学しても良いか？」

「ん？別に良いけど……」

「そうか！よし……部活の用事が終わったらすぐ行くぞ」

「ああ、分かった…「でしたら、わたくしも見学しますわ！」…ん、セシリアも？」

竜馬の言葉を遮るように、セシリアも若干頬を赤らめて言った。

「あぁ、いいよ」

「ありがとうございます（篠ノ之さん……。竜馬さんとふたりっきりにはさせませんわ！）」

3人は約束を交わすと、夕食を食べ終えて部屋に戻った。

◆竜馬・箒の部屋◆

「そうだ。箒、コレを持ってて」

2人は部屋に戻ってくると、竜馬は緑色のカンドロイドを箒に渡した。

「ん？このカンドロイドは何だ？」

「用事で遅くなったりしたら、それで連絡して」

「ほぅ。連絡手段に使うカンドロイドか…」

【ＢＡＴＴＡ-ＫＡＮ】

箒はカンドロイド……バッタ・カンドロイドを起動すると床でピョンピョンと跳ねた。
竜馬はバッタ・カンドロイドを手に取ると、オーバーズのメダルをバッタ・カンドロイドに当てた。

「これで僕のプライベート・チャンネルとリンクしたから、いつでも連絡ができるよ。はい」

「そうか。その……ありがとう…」

「ふふっ。どういたしまして」

―コンコン、コンコン―

「ん？誰だろ…」

竜馬はノックの音に気付くと扉を開けた。

「ヤッホー、龍東くん」

「相川さん。どうしたの？」

扉を開けると、そこには清香がいた。

「実はね……1組全員は食堂に集合って言われてるから、準備が終わったら来てね。それじゃ、私は先に行くね♪」

清香は手を振りながら去っていった。

「どうしたんだ？」

「なんか1組は食堂に集合だって」

「そうなのか。では、行くとするか」

「ああ。行こうか」

2人は部屋を出て、食堂に向かった。

◆夜　食堂◆

「というわけでっ！龍東くんクラス代表決定おめでとう！」

「「「おめでと～！」」」

―パン、パンパーン！―

「……えっ？」

食堂にやってきた竜馬は、突然のクラッカー乱射に唖然とした。食堂には確かに1組のメンバーが揃っており、壁にはデカデカと《龍東　竜馬クラス代表就任パーティー》と書いた紙がかけていた。

「さあさあ！主役はこっちに座ってね。あとコレね」

クラスの1人が竜馬を上座に座らすと飲み物を渡した。竜馬の両隣には箒とセシリアが座っていた。

「いやー、これでクラス対抗戦も盛り上がるねぇ」

「ほんとほんと。ラッキーだったよねー。同じクラスになれて」

各自飲み物を手にやいのやいのと盛り上がっている中、竜馬は辺りを見渡した。

（明らかにクラスの人数が多過ぎるなぁ……。あっちにいるのって2組の人だし……）

「人気者だな、竜馬」

竜馬の隣にいた箒が話し掛けたが、少し不機嫌そうにしていた。

「ん？どうだろうなぁ…。男がクラス代表になったから珍しがってるだけじゃないかな？」

そう言って竜馬はジュースを飲んだ。すると、竜馬に近づく女子がいた。制服には黄色のリボンをしていたので、２年生だと分かった。

「はいはーい、新聞部でーす。話題のイケメン新入生、龍東　竜馬君に特別インタビューをしに来ました～！」

新聞部が来た事にクラス一同は盛り上がった。

「あ、私は２年の黛　薫子。新聞部副部長やってまーす！はいこれ名刺」

「あ、これはどうも…」

「ではではズバリ龍東君！クラス代表になった感想を、どうぞ！」

薫子はボイスレコーダーをずずいっと竜馬に向けて、無邪気な子供のように瞳を輝かせた。

「えーと……な、なったからには、優勝目指して頑張ります！」

「お！いいね～。捏造のしがいがあるよ」

（本人の前でスゴイこと言うなぁ……）

そう思うなか、次に薫子はセシリアにボイスレコーダーを向けた。

「それじゃあセシリアちゃん。龍東君と試合した時のコメントちょうだい」

「わたくし、こういったコメントはあまり好きではありませんが…

…仕方ないですわね」

と言いつつ、セシリアは満更でもなかった。

「コホン。ではまず、わたくしが――「あぁ、長そうだからいいや。写真だけちょうだい」――って！さ、最後まで聞きなさい！」

「いいよ、適当に捏造しておくから。よし！龍東君の強さに惚れたからってことにしよう」

「なっ、な、ななっ……！？」

薫子の一言に、セシリアは顔をボッと赤くなった。薫子は気にすることなく、懐からデジカメを取り出した。

「はいはい、とりあえずふたりならんでねー。写真撮るから」

「ん？」

「えっ？」

2人は薫子の言葉に反応した。しかし、セシリアはどこか喜色を含んで弾んでいるようにも聞こえた。

「注目の専用機持ちだからねー。ツーショットもらうよ。あ！握手とかしてるといいかもね！」

そう言いながら薫子は竜馬とセシリアの手を引いて、そのまま握手まで持って行った。

「あ……」

握手をすると、セシリアは頬を赤くして竜馬をジロジロと見た。

「？どうしたの？」

「べ、別に、何でもありませんわ」

「……むぅ」

それを見ている箒は、不機嫌オーラ垂れ流しだった。

「……箒？」

「何でもない」

そう言って、箒はそっぽを向いた。

「それじゃあ撮るよー。４０×１３÷１０００は～？」

「えっと……０．――「ぶー、時間切れ。０．５２でしたー」――そんな…」

――パシャッ――

デジカメのシャッターが切られると、竜馬は周りを見た。

「……みんな凄いなぁ」

なんと！１組の全メンバーが撮影の瞬間に、竜馬とセシリアの周りに集結していた。ちなみに、竜馬のすぐ隣には箒が立っていた。

「あ、あなた達ねえっ！」

「まーまーまー」

「セシリアだけ抜け駆けはないでしょー！」

「クラスの思い出になっていいじゃん。ねー」

「「「ねー」」」

「う、ぐ……」

クラスメートはニヤニヤとした顔で口々にセシリアを丸め込むように言うと、セシリアは苦虫をかみつぶしたような顔をしていた。

「……？」

竜馬はその様子を見て首を傾げた。

かくして、就任パーティーは夜１０時過ぎまで続くのだった。

～翌日～

◆昼　食堂◆

「「「いただきます」」」

土曜日、午前中の授業が終わって竜馬達は昼食を取っていた。ちなみに、箸はうどん、セシリアはサンドイッチ。そして竜馬は、洋食器に入っているラーメンだった。

「竜馬さん。何故ラーメンをフォークで食べるのですか？」

「セシリア、コレはラーメンじゃないよ。ラ・メーンだよ」

「ラ、ラ・メーン…ですか？」

「うん。そもそもラ・メーンは――「おっ！見つけたぞ」――…ん？」

食堂にいた生徒は、全員その声の方を見た。そこにいたのは、影宮だった。

「影宮さん。もう来たんですか？」

「まあな。早くオーバーズを改修したくて、早めに来た」

「そうだったんだ……」

「あぁそれと、コイツ達もな」

影宮は懐から2個カンドロイドを取り出したが、通常とは異なっていた。

1つは、上下が赤と黒のカンドロイド。もう1つは、上下が黒と金のカンドロイドだった。

「起きなイマージュ、シベラー」

【【AI-KAN】】

影宮はプルタブを開けた。すると起動したカンドロイドは側面に小さな画面が出てくると、両横に小さな腕、底面には小さな足が出てきた。

『（〜д〜）ふぁ〜…。よく寝たぜー』

すると、赤と黒のカンドロイドから声がすると、上には2本の小さな赤いツノが生えて、画面には顔文字が映っていた。

『[ー　ー] おはようございます、マスター』

さらに、黒と金のカンドロイドからは後ろに小さな金色の羽が生えて、画面には某爆弾男のような顔が映っていた。

コレが、カンドロイドの中で唯一人間に近い感情を持った高性能AI搭載型カンドロイド……《AI・カンドロイド》の《イマージュ》と《シベラー》である。

「イマージュにシベラーまで……」

「んじゃ、俺は先に第1整備室に行くからな。食べたら直ぐに来てくれよ」

そう告げると、影宮は食堂を出た。

「第1整備室ね……。そんじゃまあ、すぐ食べ終わらせるか！」

そう言って、ものの3分でラ・メーンを平らげた。

◆第1整備室◆

「……」

竜馬が食堂に出て1時間が経つ。

現在整備室では、影宮とメルダ・ファウンデーションの研究員数名によるオーバーズの改修作業が終盤に差し掛かっていた。

作業の理由は、15枚のコアメダルをオーバーズに取り込む為にバススロットの改良、及び拡大をしている。

「……よっし！作業完了」

影宮はそう言うと、オーバーズに取り付けられていた無数のコードが取り外された。作業が終わると、竜馬はオーバーズの空中投影ディスプレイを見て驚いていた。

「凄い……武装展開時間が更に短縮されてる。おぉ！バースCLAWsの同時展開が3個から6個全部出来るようになってる！」

「よし、早速テストだ。第4アリーナに向かおうか」

「はい！」

すると、整備室のドアが開かれた。

「やっと終わりましたか」

「あ、セシリア。待たせてゴメンね」

整備室に入ってきたのはセシリアだった。整備室には立入禁止とされていたため、セシリアは待つ事しか出来なかった。

「今から第4アリーナに行くからセシリアも――『PRRRR！』――…あっ、箒からだ」

竜馬はプライベート・チャンネルを開いた。

『竜馬か。用事が済んだから今からそちらに行く。何処に行けばよい』

「今から第4アリーナに向かうところだよ。改修作業が終わったか

ら、そこで性能テストさ」

『分かった。私もすぐに行くからな』

そう告げると、竜馬は箒のバッタ・カンドロイドの電源を切った事を確認して、プライベート・チャンネルを閉じた。

「んじゃ、行くか」

影宮はそう言うと、第４アリーナへと向かった。

◆第４アリーナ・ステージ◆

ステージにはオーバーズを展開した竜馬、影宮、ＩＳスーツ姿の箒とセシリアがいた。尚、ピットには千冬と真耶、メルダの研究員達がモニターを見てデータを記録していた。

「それじゃあ竜馬、ドライバーにコアメダルをセットしてくれ」

「分かりました。……」

竜馬は集中すると、ベルトの溝が輝きだした。

「オーズモードの基本となるメダルは、タカ、トラ、バッタだぞ」

「……」

竜馬はベルトに集中すると、正面にある3つの溝に赤のコアメダル…タカメダル・黄のコアメダル…トラメダル・緑のコアメダル…バッタメダルがはめ込まれた。

「バースモードと同じ様に、右手をベルトにスライドすればOKだ」

「……！」

竜馬は右手をベルトにスライドすると、竜馬の周囲に3枚のコアメダルが回った。そして……

【タカ！トラ！バッタ！　タ・ト・バ！　タトバ　タ・ト・バ！！】

不思議な歌と共に、竜馬は金色の光に包まれた。光が収まると、竜馬はオーバーズとは形状が異なる装甲を纏っていた。

身体の胸部には円形プレートの装甲（オーラングサークル）と、頭には小さな赤い羽をモチーフにしたヘッドギア《タカヘッド》が装着され、背中の装甲には赤い翼状の固定型スラスターが二対あった。更に腕部の黄色い装甲（トラアーム）、脚部の緑の装甲（バッタレッグ）が纏っていた。

コレが、オーバーズ・オーズモード（別名オーズ）の基本形態……オーズ・タトバコンボである。

「な、なんだ？さっきの歌は……」

箒は先程の不思議な歌に疑問を持つが、影宮は気にせずに言った。
「あぁ歌は気にしないでくれ、箒ちゃん。そんじゃ、早速テスト開始だ。……ポチッとな」
影宮はポケットから取り出したスイッチを押すと、竜馬の周りに球体のターゲット・ユニットが5体出現した。
「今からユニットを動かすから全て破壊するんだ。ただし、2体は光学迷彩を機能させるからな。……スタート！」
影宮の合図に全ユニットは動き出し、そのうちの2体は上昇したのちに光学迷彩によって姿を消した。
「……速いですわね」
セシリアはユニットを冷静に見ていた。ユニットは不規則な起動で素早く動いていた。
「行くよ、オーズ！」
そう言うと、竜馬はスラスターを起動して飛び立った。そのスピードはオーバーズに比べると、段違いの速さだった。
『腕に意識を集中すれば、装甲に取り付けられてる武器が使えるぞ！』
「はい！……っ！」

通信回線から聞こえる影宮の言葉通りに竜馬はトラアームに意識を集中させた。
するとサークルに描かれたトラが光りだして、そこからＩＳスーツに引かれている頭部・四股に伸びているエネルギー流動路（ラインドライブ）がトラアームに注ぎ込まれた。そして両前腕部にある折り畳み式鉤爪（トラクロー）状武器が展開された。

「ハッ！」

竜馬はトラクローをユニットに切り付けると、ユニットは爆発を起こした。

『次は脚部だ。脚部はどれも特殊だから、使いこなせば試合でも有利になるぞ』

「了解！……」

竜馬はバッタレッグに意識を集中した。すると、サークルに描かれたバッタが光りだし、ラインドライブがバッタレッグに注ぎ込まれた。

「うおっと！」

すると、バッタレッグの足裏に内蔵されたバーニアが起動して、一気にユニットに近づいた。

「あれは瞬時加速（イグニッション・ブースト）！」

箒はその行動を見て驚いた。すると、影宮は動作の説明を言った。

「いや、正確にはショートバーニア・ブーストと言うんだ。足裏のバーニアから発生した圧縮空気が噴出されて、最大3回は使用出来る。緊急回避の他に、相手を踏み付けた時に使えば……」

「成る程！その瞬間に使えば、相手を遠くに弾き飛ばせる！」

箒はそう答えると、影宮は箒を見て微笑んだ。

「せいか～い！箒ちゃんには1ポイントあげよう。おっ、言ったそばから……」

再び竜馬を見ると、箒が言ったようにユニットがバッタレッグに踏み付けられ、遠くに飛ばされたあと爆発した。

『それじゃ次。各ヘッドはハイパーセンサーの性能を格段に上げるぞ。今から隠れているユニットを探して破壊するんだ』

「分かりました。……」

竜馬は集中するとサークルのタカが光りだし、ラインドライブがヘッドギアとスラスターに注ぎ込まれた。すると目の前に赤い空中投影ディスプレイ《ホークアイ》を出現させた。見るとそこには光学迷彩を起動しているユニットが見えていた。

「あそこか！」

竜馬はトラクローに集中すると爪が輝きだした。

「ハアアアッ！」

そして叫びと共に腕を大きく振ると、トラクローから真空波が発生してユニットを真っ二つにして爆発させた。

「よっし！あと2体……」

竜馬は残りのユニットを確認した。1体は光学迷彩を起動していて、もう1体は今までのユニットより装甲がデカかった。

『次は必殺技だ。ドライバーに集中して右手をスライドさせるんだ』

「必殺技？だったらあのデカイ奴に……っ！」

竜馬は意識をベルトに集中して、右手をスライドさせた。次の瞬間……

【ＳＣＡＮＮＩＮＧ　ＣＨＡＲＧＥ！】

ベルトから発生された音声と共に、竜馬とユニットの間を赤・黄・緑のリングが出現した。

「ハアアアァァァァ！」

竜馬は赤・黄・緑のリングを潜り抜けると、ユニットに強力な蹴り技（タトバキック）を繰り出した。

―ドッカアアアアァァァン！！！！！―

タトバキックを喰らったユニットは巨大な爆発を起こした。

◆第４アリーナ・ピット◆

「凄まじい威力ですね。コレだったらシールドエネルギーを一気に削り取られますねぇ……」

先程のタトバキックを見ていた真耶は驚いているが、千冬は冷静だった。

（確かに威力は良いが、相手の攻撃で途中中断されたりしたら意味がないな……。まぁ、相手の動きを止めたら別か……）

「あ、織斑先生！次は基本武器を使用するみたいですよ」

真耶はモニターを見て言った。すると、竜馬の右手には大剣が握られていた。

◆第４アリーナ・ステージ◆

竜馬は大剣をまじまじと見ていると、鞘付近にはセルメダル投入口が備わっていた。

『そいつは《メダジャリバー》と言って、京水が昨日完成させたオーズの基本武器だ。威力は近接ブレード並だがセルメダルを入れてから右手をスライドさせると威力が急上昇するぞ』

「了解！」

竜馬はホークアイに映っているユニットを追い掛けながら、メダジャリバーにセルメダルを２枚セットした。そしてメダジャリバーを右手でスライドさせると……

【ＤＯＵＢＬＥ！　ＳＣＡＮＮＩＮＧ　ＣＨＡＲＧＥ！】

メダジャリバーから発生した音声と共に、刀身は青白い光りを発生させた。

「ハアアアッ！」

竜馬はスラスターを最大にしてユニットに近づくと、メダジャリバーを豪快に切り付けてユニットを撃破した。

『よし。これでターゲット全て破壊完了だな。竜馬、いったん降りてこい』

「分かりました」

そう言って、竜馬は影宮達のところに戻った。

「竜馬さん。お疲れ様です」

竜馬が戻ってくるとセシリアと箒が近づいていた。

「やはり凄いな……。違う性能を持ったオーバーズを短時間で自分のモノにしてしまうとは……」

「いや。これも影宮さんや京水さん、ＩＳ開発局の皆さんが改良したからだよ。ありがとうございます、影宮さん」

竜馬は笑顔を見せて、影宮に感謝を述べた。

「いいってことよ。……次は２対２の実戦テストをしてもらう。箒ちゃん、竜馬と組んで貰えるかい？」

「わ、私でいい――「ちょっとお待ちください！――ムッ」

セシリアに話しを遮断されて、箒は頬を小さく膨らました。

「何故わたくしではダメなのですか！イギリス代表候補生のセシリア――「あぁ……箒ちゃんは1ポイント持っているから選んだんだよ。ただそれだけ」――え？」

セシリアは思い出した。確かに、箒にはポイントを持っていた。

「で、では……相手には誰を？」

「それは……コイツ達さっ！」

【【AI-KAN】】

そう言いながら、影宮はイマージュとシベラーを起動させた。

「2人共、実戦テストを行うから手伝ってくれ」

『（＾∀＾ゞ了解だぜ！』

『［＾　＾］かしこまりました、マスター』

「そんじゃまあ、お前達のユニットを出すか…」

―パチンッ！―

影宮は指を鳴らすと両隣に2体のユニットが出現したが、ターゲット・ユニットとは全く違った。
1体は紅い装甲をしていて、頭部は白いラインの入ったカブトのような角が特徴で、両腕にはセシリアのスターライトmk?並の長大な砲身が右に2本、左に1本装備された射撃型のユニット。
もう1体は蒼い装甲をしていて、頭部はクワガタの顎のようなバイザーが特徴で、右腕にはソード、左腕にはハンマーが装備された格闘型のユニットだった。
そして影宮はイマージュを紅いユニット、シベラーを蒼いユニットの背中にセットした。

「2人にはコイツ達……KBT-NF：カイゼルと、KWG-NF：ルミナスの2体と戦ってもらうぜ！」

「分かりました。箒、がんばろうか！」

「ああ！」

竜馬と箒はカイゼルとルミナスを見て、闘志を沸かせていた。

０４話【ドロイドとテストと亜種連発】

◆第４アリーナ・Ｂピット◆

現在、竜馬と箒はＢピットにて待機していた。尚、セシリアはルームメイトと約束していたのを思い出して寮に戻っている。

「…まさか、竜馬が学園に来るまでに訓練していた相手が《ハーフ・ドロイド》だったとはな…」

「まぁ、元々メルダは《ドロイド》を発明した会社だからね。訓練相手にはよかったよ」

そう聞いた箒は、ステージで出会ったカイゼルとルミナスを思い浮かんだ。

ドロイド……メルダ・ファウンデーション会長、白黒が開発した無人ＡＩロボットの事であり、医療機関・工場産業・軍事企業等に提供されている。

特に人間と生物を掛け合わした姿をしているハーフ・ドロイドは軍事企業で訓練機として採用されており、最近ではＩＳとの訓練において最適なユニットである。

「しかしステージに仕掛けを施すと言っていたが、まだなのか？」

「んー…。まだ連絡が来てないから――『おーい！』――…あっ、来た」

するとピットのモニターが起動して、影宮から連絡が入った。

『準備完了だ。そっちはどうだ』

「はい、こっちも準備ＯＫです」

竜馬は箒を見てみると、箒は既に打鉄を装着していた。それを確認した竜馬も、オーバーズを展開した。

「行こうか、箒！」

「ああ！」

２人はピット・ゲートに進み、ステージに出撃した。

◆第４アリーナ・ステージ◆

ピットから飛び出した竜馬達の前に紅と蒼のユニット……カイゼルとルミナスを動かしているイマージュとシベラーが浮かんでいた。

『お久しぶりですね、竜馬殿……』

「ああ。今日も特訓、よろしくたのむよ」

『御意』

竜馬の言葉にシベラーはコクリと頷いた。

『久々だからって遠慮はしねぇぜ！オレは最初っから全開だ！』

一方、イマージュは戦う事で興奮していた。

「箒、作戦の確認だよ。箒にはカイゼルを任せるよ。あのロングライフルは威力は高いけど……」

「分かっている。懐に飛び込めばライフルは使えないしな……」

箒はカイゼルの両腕に装備された長大な砲身を見た。２ｍを超す銃火器は、懐に入ればその威力を発揮されない…。故に、竜馬は剣術が得意な箒にカイゼルを当てさせたのだ。

『んっ？何みてんだ侍オンナ！』

イマージュは箒の視線に気付くと、左腕のロングライフルを向けた。

「相変わらず好戦的だ……」

イマージュの様子を見ていると、通信回線から竜馬の声が聞こえた。

『今回のルールだ。“タトバコンボと純正コンボ以外を使って闘ってみろ”。さぁ、ドライバーにコアメダルをはめ込むんだ…』

「（亜種コンボのみか……）了解しました」

竜馬はベルトに集中すると、タカメダル・バッタメダル・そして緑のコアメダル…カマキリメダルをセットして、右手をベルトにスライドした。

「いくぞ！」

【タカ！カマキリ！バッタ！】

音声と共に光りに包まれると、竜馬はオーズの姿になった。
だが、先程とは決定に違う箇所があった。タカヘッド、バッタレッグは同じだが、両腕部が緑の装甲（カマキリアーム）になっていた。

「今度は歌が流れないな…」

箒はタトバコンボに発声していた不思議な歌を聞いていたが、今回は流れていないのを不思議と思った。

「タトバと純正のコンボ以外は、あの歌は流れないんだ」

「そうなのか…」

「さぁ、もうすぐ開始だよ」

2人は話し終えると、イマージュとシベラーに再び向き合った。

『では……始めっ！』

影宮が宣言するとシベラーは前進し、イマージュは上昇した。

『シベラー・ルミナス……参ります！』

『イマージュ・カイゼル……撃ちまくるぜ！』

イマージュは右腕のツインロングライフルを竜馬に撃ったが、竜馬はショートバーニアで加速してシベラーに迫った。

「まずは……カマキリだ！」

両腕のラインドライブが輝き、竜馬はそれを注ぎ込んだ。すると、両前腕部に装備されているブレード《カマキリソード》を展開して逆手持ちでシベラーに切り掛かった。

『なんのっ！』

シベラーも右腕のソードでカマキリソードを受け流すと、左腕のハンマーで殴り掛かった。

「よっと！」

だが竜馬は右足でハンマーを蹴り飛ばすと、左足でシベラーを踏み付けた。

『ぐあっ！』

踏み付けた瞬間バーニアを発動させて、シベラーを弾き飛ばした。

『何やってんだシベラー！』

イマージュは再び竜馬を狙おうとした。

「させるかぁっ！」

『なっ！いつのまにっ！』

しかし箒がそれを阻止しようと、刀型近接ブレードで切り掛かった。

「（懐に入った！）これで……っ！！」

懐に入ろうとした瞬間、箒は左から来た衝撃によって真横に飛ばされた。

『残念だったな侍オンナ！長大な銃火器が懐に弱いのは、大昔のことだ！』

そう……イマージュは懐に入られそうになった瞬間、左腕のロングキャノンの砲身を横に振って箒を飛ばしたのだ。

「これでは迂闊に入り込めないか…」

『では、ワタクシがお相手しましょう…』

「ッ！」

飛ばされたシベラーは箒に目標を変えると、イグニッション・ブーストを起動して一気に距離を詰めた。

「逃がすか！」

竜馬はバッタメダルとカマキリメダルを、青いコアメダル…ウナギメダル・黄色のコアメダル…チーターメダルに変更して右手をスライドした。

【タカ！ウナギ！チーター！】

すると、カマキリアームとバッタレッグが変化した。
両腕部は青い装甲（ウナギアーム）、脚部は黄色の装甲（チーターレッグ）に変更された。
竜馬は脚部にエネルギーを送り込むと、太腿部分に付けられているマフラーからスチームが吹出し、ものすごいスピードでシベラーに追い付いた。

「待てっ！」

『なんという推進力！これがコアメダルの力ですか……』

シベラーが関心するなか、竜馬は両肩に装着された武器《電気ウナギウィップ》を取り出してシベラーに巻き付けた。

『なんとっ！』

「捕まえた！ウォォォッ！」

竜馬は力いっぱいに電気ウナギウィップを振り回すと、シベラーをイマージュに向けて投げ飛ばした。

『ちょちょちょ、こっちくんぐはっ！』

２体はぶつかって下降していくが、地表スレスレのところで姿勢制御をして地面に着地した。

「よし、いまなら！」

箒はシベラー達を追撃しようと地表に降り立った。

―ドッカアアァァァン！―

「なっ……うわっ！」

地表に降り立った瞬間、爆発が起こった。

「箒！」

竜馬は箒と同じ場所に降り立つと、イマージュ達に目を向けた。

『掛かりましたね。このステージ一帯には、ＩＳしか反応しない《ランドマイン》を仕掛けていますよ！』

『オレ達はドロイドだからランドマインは反応しねぇ仕掛けよぉ！』

イマージュはそう言うと、両腕による乱射を行った。

「くっ！箒、一度離れよう」

「あ、ああ…」

2人はその場から急上昇して、弾丸の雨を避けた。

「厄介な仕掛けだなぁ…」

竜馬はホークアイでステージを見渡すが、ランドマインは探知出来なかった。

「どうする？地表に降りると、また爆発を喰らうぞ…」

「……おっ！この組み合わせなら…」

竜馬はコアメダルの情報をディスプレイで見ていると、銀のコアメダル…サイメダルとゾウメダルの情報に目を向けた。

『おいシベラー。追い掛けなくていいのか？』

『追い掛けたところで2対1になるのがオチです。ここは、相手が接近したら仕掛けましょう…』

『分～ったよ。お、噂をすればだ…』

イマージュは見ると、竜馬達が再度接近していた。
『では、ワタクシは篠ノ之殿を……。イマージュは竜馬殿を頼みます』
シベラーは箒に向かって飛び立った。

「それじゃあ箒、足止めの方を頼むね」
「ああ！……しかしそれで爆弾を把握出来るのか？」
「ああ、僕を信じて！」
竜馬はタカメダルとチーターメダルを変更すると、サイメダルとゾウメダルに変更して右手をベルトにスライドした。

【サイ！ウナギ！ゾウ！】

竜馬は頭部と脚部を変更した。
頭部は白銀のヘルメットにサイのような巨大な角が1本付いている《サイヘッド》に、脚部は黒い装甲（ゾウレッグ）に変わっていた。
「ハアアアアッ！！」

竜馬はサイヘッドとゾウレッグにエネルギーを送り込みながら、そのまま地表に急降下した。

―ズドオオォォォン！！―

その瞬間、ゾウレッグによって巨大な地響きがステージに起こった。

『わっ！とっ！とっ！』

ステージに立っていたイマージュは大きな揺れによって体制を崩した。

「……見つけた、ランドマインの位置！」

竜馬はオーズから送られた地形情報を見ると、十数個の光り……ランドマインがあった。

ゾウレッグによる踏み付け技（ズオーストンプ）によって振動波を起こし、サイヘッドの角（グラビドホーン）が跳ね返った振動波をソナーのように感知して、ランドマインの場所を見つけだしたのだ。

「危ないモノは先に潰す！」

竜馬はサイメダルとウナギメダルを、緑のコアメダル…クワガタメダル・赤いコアメダル…クジャクメダルに変えてスライドした。

【クワガタ！クジャク！ゾウ！】

すると、サイヘッドとウナギアームは変化した。
頭部には、クワガタの顎をモチーフにしたアンテナ《クワガタヘッド》と両肩の後ろに垂れ下がった緑の巨大なツノのアンロック・ユニットを各1本ずつ形成しており、両腕の装甲は赤く左腕に手甲型エネルギー解放器（タジャスピナー）が装備された《クジャクアーム》に変更された。

「ハァッ！」

竜馬はタジャスピナーをランドマインが埋まってある方に向けると、タジャスピナーはエネルギー弾を発射してランドマインを爆発させた。

『喰らいやがれっ！』

イマージュは銃口を向けて撃ってきたが、竜馬は急上昇しつつ巨大なツノにエネルギーを送り込んだ。するとツノは展開して、ツノの先が上を向いた事によってクワガタの顎のようになった。

「お返しだっ！」

竜馬はツノの先っぽから電撃を発生させて、イマージュに放った。

『アババババババッ！！』

イマージュは電撃をもろに喰らってしまい、一時的に行動が停止してしまった。

「また動くようだけど……」

竜馬は上を見上げると、箒とシベラーが激しい戦いをしていた。

「でぇぇぇい！」

『ハアアアアッ！』

箒の刀とシベラーのソードが互いにぶつかり合い、火花を散らしていた。

『流石は篠ノ之流……なかなかの腕ですね』

シベラーは一度間合いを取ると、箒は息を整えて再び構えた。

「いや、私はまだまだ修行が足りない。もっと強くなって……」

すると箒は、ちらっと竜馬の方に目を向けた。その時、若干頬は赤く染めているのをシベラーは見ていた。

『……成る程。しかし、竜馬殿は鈍感ですよ……。それも超のつく程の方です』

「っ！そ……それは…」

箒は一瞬驚くが一度目を閉じて直ぐ開くと、その瞳には決意が宿っていた。

「それでも、竜馬の隣に立ちたい！これからも……その先も！」

言い終わると、箒はシベラーに突っ込んで行った。

『フフッ…。応援しますよ、篠ノ之殿！』

同じく、箒を迎える為シベラーも突っ込んで行く……その時だった。

「はあっ！」

―ビュンッ！―

「何っ！消えた！」

箒は確かにシベラーを切り付けた。だがその感触は無く、シベラーは消えていた。

「いったい何処に……っ！」

その時、箒は後ろに気配を感じると刀を横に薙ぎ払った。

―ガギンッ！―

「…光学迷彩か」

ぶつけた音が響くと、箒の目の前にシベラーが徐々に姿を現した。

『ほぅ……ルミナスのオールオーバーを見破るとは……』

「オール…オーバー？」

『御意』

シベラーはまた離れると姿を消した。

「ちっ……また消えた」

箒が言い終わると、何処からかシベラーの声が聞こえた。

『このルミナスが持つ機能です。ハイパーセンサーに反応しない完全隠蔽機能……』

箒はハイパーセンサーを最大にするが、シベラーを見つけられなかった。

『参りますっ！』

「っ！」

その言葉を開始に、箒はいくつもの攻撃を加えられた。

『これで……最後です！』

オールオーバーを起動しているシベラーは、箒の後ろに回り込み突っ込んできた。

「させないっ！」

『何……うおっ！まぶしい！』

シベラーは声の方を見ると強烈な閃光が目に入ってしまい、オールオーバーが解除してしまった。

「今だ……箒！」

「竜馬……！うおおおおっ！」

箒は姿を現しているシベラーに刀で切り付けると、シベラーの推進部に当たって徐々に下降していった。

「ナイス、箒！」

「竜馬……。その装甲はなんだ？」

箒は竜馬を見ると、頭部の装甲とユニットが変化していた。頭部には黄色いヘッドホンに水色のサングラスが付いている《ライオンヘッド》に、両肩横に浮かんでいる左右非対称のアンロック・ユニットが形成されていた。ちなみに、右は外側がギザギザな形のリング型ユニット、左は獣の顔型のユニットになっている。

「あぁ……オールオーバーは確かに強力なステルスだけど、強烈なエネルギーを浴びせると機能を止めるんだ。だから、このコアメダルならいけると思って……」

竜馬は黄色いコアメダル…ライオンメダルを指差した。

「…これでテストは終了だな。２体は戦闘の続行が――「いや、まだだよ」――…え？」

竜馬は箒の言葉を遮ると、下に目線をやった。箒は竜馬が見ている方を見ると、シベラーがイマージュに近寄っていた。

『大丈夫ですか、イマージュ…』

シベラーは若干電気を帯びているイマージュに近づくと、イマージュはゆっくりと言った。

『…まだ…痺れるけど……何とかな……』

『ワタクシは推進部をやられました…』

『…んじゃ、いっちょ“アレ”でもすっか？』

『“アレ”…ですか……。良いでしょう』

シベラーの言葉にイマージュはカイゼルの背中から出て、ＡＩ・カンドロイドに変形した。

『（，・＜・、）もっと暴れたかったけど、仕方ねぇ……。オレは一足先に戻るぜ…』

そう言いながら、イマージュはその場から転送されて戻った。

『……来ましたか』

シベラーが振り向くと、竜馬と箒がすぐ近くに停滞していた。

「シベラー……、次はどうするの？」

竜馬は次に来る事を知っていたが、あえてシベラーに向かって聞いた。

『今のワタクシは速く飛べません。しかし…』

シベラーは指を弾くと、カイゼルから音声が聞こえた。

【認証信号確認。カイゼル、変形展開を開始】

「来る！」

「なっ！竜馬！」

竜馬は箒の前に回ると、箒の腕を掴んで抱き寄せた。そして、そのままゾウメダルを青いコアメダル…タコメダルに変えてスライドした。

【ライオン！クジャク！タコ！】

すると、ゾウレッグは青い装甲の脚部（タコレッグ）に変わり、エネルギーを注ぎ込んだ。その時だった……

「飛ばされないで！」

「あ、ああ！」

シベラーはカイゼルと共に光りに包まれると、強烈な暴風が発生して竜馬達を襲った。
しかし竜馬がタコレッグにエネルギーを注ぎ込んだ事で、地表でも空中でもその場所に留まる事が出来る《オクトスパイク》が発動していた。

「……おさまったようだね」

竜馬は暴風がおさまった事を確認すると、箒に話し掛けた。

「……箒？」

竜馬は返事をしない箒を見ると、箒は顔を真っ赤にしていた。

（り、竜馬……せ、積極的過ぎるぞ！まま…ま、まだこここ心の準備ががが…！）

「…大丈夫？」

「っ！あ、ああ…。助かったぞ、竜馬」

「これくらい…ね。でも、もうすぐ終盤だ…」

竜馬はシベラーの方に目をやると、シベラー……もといルミナスはカイゼルの装甲を身に纏い空中に停滞していた。

『ルミナス、カイゼル・アームズとの合体を確認しました。……お待たせ致しましたね、竜馬殿』

「いや、何となくそれをすると思ったよ。それに、僕が使ってないコアメダルも残り3枚だしね…」

そう言うと、竜馬はベルトのコアメダルを全て変更した。ライオンメダルを青いコアメダル…シャチメダルに、クジャクメダルを白銀のコアメダル…ゴリラメダルに、タコメダルを赤いコアメダル…コンドルメダルに変更してスライドした。

【シャチ！ゴリラ！コンドル！】

ベルトから音声が鳴り終わると、全ての装甲が変更された。頭部は背鰭のような突起と2個のライトが付いているヘッドライト《シャチヘッド》と背中に2本のボンベとホースが形成していた。更に両腕は巨大なガントレット状の武器（ゴリバゴーン）が装着された銀色の装甲（ゴリラアーム）に、脚部の装甲には爪先と踵に金色の爪（ストライカーネイル）と《ラプタードエッジ》が備わっている《コンドルレッグ》に変更されていた。

『おーい竜馬！』

「影宮さん？」

すると、プライベート・チャンネルから影宮が話し掛けてきた。

『今、使ってるコアメダルが最後だな。さっき京水から送られた武器をオーバーズにインストールしたから、使ってみな…』

言い終わると、竜馬の目の前に送られた武器情報が送られた。だがそれを見て、竜馬は知っていた。

「《ライドベンダー》！」

そう…可変型自販機ライドベンダーだった。

『自動操縦可能だってよ。まぁ使ってみてくれ』

「分かりました」

影宮は通信を切ると、次に箒に通信回線を開いた。

『箒ちゃん。もうすぐ終わるとこで申し訳ないけど……、箒ちゃんはその場で待機しててくれ』

「何故ですか？まだ私は戦えます…」

『今から高速戦闘に入るからな。その打鉄じゃあ無理だろうねー』

「そ、そうですか…」

そう言われて、箒はしょんぼりとした。

『……お話は済みましたか？』

一方、シベラーは竜馬達が影宮との通信を終わらせるのを待っていた。

「あぁ。待たせたね」

竜馬はすぐ横にベンダーを呼び出すと、セルメダルを投入してバイク形態にした。

『では……行きます！』

シベラーはカイゼルの大型ブースターを起動すると、ものすごい速さで飛び立った。

「こっちも……行くかな！」

竜馬もライドベンダーに乗ると自動操縦にしてシベラーを追い掛けた。

（竜馬……）

箒はその様子を見て、空を見上げていた。

◆第４アリーナ・Ａピット◆

「いい具合だな…」

一方、Ａピットにいる影宮はオーバーズのデータを取っていた。

「……」

しかし、千冬はモニターに映る竜馬を見て考えていた。

（あれほどの装甲を変えるＩＳ……聞いた事がないな。さらにメダルの組み合わせで戦況を有利に進める技術と戦い方……。竜馬、お前は……）

すると、千冬は2年前を思い出していた。…竜馬と数年ぶりに会った懐かしさと、竜馬に起こった暗い過去を……。

「…織斑先生？」

「……！あぁ、どうしましたか？山田先生…」

千冬は真耶の言葉に気付くと、真耶は話し続けた。

「大丈夫ですか？何か考え事をしていたみたいですけど…」

「大丈夫だ。それより、何か動きがあるようだ」

千冬は再びモニターを見ると、シベラーが高速で竜馬に突進をしていた。だが竜馬は回避すると、後ろに回り込んだ。

「あのスピードを何とかしないと、竜馬は勝てんな」
千冬はコーヒーを飲みながら、モニターの竜馬を見た。

◆第４アリーナ・ステージ◆

「くっ……やっぱり速いな……」
現在竜馬はシベラーの後ろにいたが、シベラーのスピードに付いてくのがやっとだった。
「何かないか…」
竜馬は装着しているコアメダルの情報を調べていると、シベラーのスピードが上がって竜馬を引き離した。
『この距離なら……』
シベラーは直ぐさま反転し、両腕の銃口を竜馬に向けて撃ってきた。
「うぉっ！」

だが竜馬は回避すると、一旦距離を取った。

「ふぅ……危なかったなぁ……ん？」

すると、竜馬はディスプレイに映っている情報を見た。

「シャチメダル……。成る程、やってみる価値はあるか…！」

情報を読み終えた瞬間、竜馬は反転してシベラーに突っ込んで行った。

『何か仕掛けますか……だったら、返り討ちにするまでです！』

それを見たシベラーも、竜馬を迎え撃つため突っ込んだ。

『ハアアアアアッ！』

ぶつかる間際、竜馬はシベラーのすぐ横を通り過ぎるその時だった。

「……今だ！」

直ぐさま竜馬はボンベにエネルギーを送り込むと、ホースから水が噴出してシベラーに浴びせた。

『水？そのような攻撃でワタクシがやられるとでも…』

「……フッ」

『…？なにを……。ッ！』

竜馬は笑みを見せた瞬間、シベラーは異変を感じた。

『何っ！全システムが機能低下！ブースター、オールオーバー、更にライフルが使用不可！……あの水か！』

シベラーは急な事態に慌てたが、異常の原因をすぐに見つけた。

「凄い効き目だな、この《カムイ》って…」

竜馬はホースを握りながら、シャチメダルに載っていた情報を思い出す。

カムイ……ボンベに入っているナノマシン入りの水で、相手に浴びせるとシステム障害を起こしたり、武器や特殊武装等を使用不可能にする特殊機能である。

「今がチャンス！」

竜馬はライドベンダーから飛び降りると、シベラーの懐に向かって行った。

『ッ！甘いですよッ！』

シベラーは懐に入られそうなところで、右腕の砲身を横に降って竜馬にぶつけようとした。

「それは効かないよ！」

だが竜馬はコンドルレッグにエネルギーを送り込むと、左足を蹴り上げて爪先にあるストライカーネイルで砲身を真っ二つに切り落とした。

『くっ…！』

「まだまだぁ！」

更に、右足を踵落としの要領でラプタードエッジから真空波を放ち、シベラーの左腕の砲身を根元から切り落とした。

『ぐあっ！』

「これで最後！」

竜馬はシベラーを踏み付けて落下させると、ベルトに集中してからスライドした。

【ＳＣＡＮＮＩＮＧ　ＣＨＡＲＧＥ】

音声の後、竜馬は輝きを放っている両腕をシベラーに向けて前にだすと、装着されていたゴリバゴーンはロケットパンチのように射出する《バゴーンプレッシャー》を繰り出した。

『ぐあああっ！』

シベラーはバゴーンプレッシャーに直撃すると、ルミナスの背中からシベラーは出てきた。

「よっと…」

竜馬はシベラーをキャッチすると、ルミナスは機能を停止して地表に落ちる瞬間転送された。

『［T　T］参りました…』

「……ふぅ。影宮さん、終了しました」

『ご苦労さん。ピットに戻って来てくれ』

竜馬は指示を受けると、箒のもとに向かった。

◆夕方　寮◆

第４アリーナでの性能テストを終えて、竜馬と箒は部屋に向かっていた。

「ふぅ……やっと終わったぁー」

竜馬は背伸びをしていると、結果を思い出していた。

性能テストの結果……。

「コアメダルの機能をある程度使い熟してたな。もっと戦って、デ

ータをたくさん取ってくれ！」

……と、影宮が言っていた。

「箒、今日は一緒に戦えて楽しかったよ」

「そ、そうか。それはなによりだ」

「…箒、顔が赤いけど大丈夫？」

「だ、大丈夫だ！ほら、部屋に入るぞ…」

真っ赤な顔をした箒は、自分達の部屋に入った。すると……

『［一　一］お帰りなさいませ、竜馬殿、篠ノ之殿』

竜馬の机の上に、シベラーがいた。

「シベラー！どうしてここに？」

『［一　一］今日から竜馬殿と共にいろと、マスターから任務を与えられました。ですので…』

『［∪　∪］今日から、よろしくお願いします』

シベラーは竜馬達に頭を下げると、竜馬は近づいていった。

「そうだったんだ。こちらこそ、今日からよろしく」

『［∩　∩］はい！』

竜馬はシベラーと握手すると、親友の証をした。

「私も、今日からよろしくだな」

『［⊂　⊂］はい！篠ノ之殿もよろしくお願いします』

『［｜　＜］竜馬殿の事、頑張って下さいね』

「なっ！」

シベラーはウインクをしてから言うと、箒は顔を赤くした。

「ななな、何を言うんだ！」

―バシッ！―

『［○　○］ひでぶっ！』

―ドゴォン！―

「……あ」

箒は恥ずかしさのあまり、シベラーにビンタをして壁に減り込ませてしまった。

「シ、シベラー！」

そして、竜馬の叫びが寮内に響いた。

０４話【ドロイドとテストと亜種連発】（後書き）

とりあえずコアメダル１５枚を一気にだしました。

コアメダルの詳しい性能は、〈ＩＳ設定〉で記載しておきます。

０５話【日曜とデパートと竜馬の過去】（前書き）

出来ました！けどぐたぐたです……

05話【日曜とデパートと竜馬の過去】

◇夕方　竜馬・箒の部屋◇

「それでさぁ…その時影宮さんが……」

「ふふふっ…。それは面白いなぁ…」

夕日が差し込む部屋で、竜馬と箒は互いの身体を寄せ合って談笑していた。

「しかし良かったのか？今日は影宮さんと約束をしていたのだろう？」

「いいんだよ、それはまた今度で……。今日は箒と一緒に過ごしたいんだ…。これからも……いつまでも……」

そう言った竜馬の頬は、わずかに赤く染まっていた。それは……夕日の色だけではないように見えている。

「竜馬……」

「箒……」

2人しかいない部屋で、お互いに相手だけを映した瞳……。そこに言葉はいらなかった。

「ん……」

箒は目を閉じると、やや唇を上向きに突き出した。竜馬もそれを確認すると、ゆっくりと顔を近づけた。
オレンジ色の光景の中、２人の影が徐々に重なって……

◆早朝　竜馬・箒の部屋◆

「……むっ……？」

箒は目を覚ますと、天井を見ていた。
現在日曜の早朝６時４０分。普段は朝練をしている箒だが、昨日のオーバーズの性能テストに参加したので今日は休んだ。

「……」

箒はまだ半分寝ているが、数回瞬きをしたところで意識が戻ってきた。

「夢……か……」

夢だと分かってがくりと頭を下げると、箒は隣のベッドを見た。

「……竜馬？」

しかし、竜馬の姿は無かった。

「…何処に行ったんだ？」

箒はベッドに起き上がると、竜馬の机にシベラーが缶モードで置かれていた。

「……」

【ＡＩ－ＫＡＮ】

少し考えた後、箒はシベラーを起動した。

『［一　一］おはようございます、竜……』

『［？　？］……篠ノ之殿。何故、篠ノ之殿がワタクシを起動したのですか？』

「……起きたら竜馬がいなかったのだが、何処にいるか知ってるか？」

『［－　－］あ～…。おそらく早朝トレーニングに行かれてますね』

「そうなのか？」

意外な言葉に、箒は少し驚いた。

『［∪　∪］まぁ、日曜早朝の日課になってますね。陰ながら努力してるのですよ……』

うんうんとシベラーは納得しているが、箒はこの情報を聞いて閃いていた。

（なるほど。竜馬も頑張っているん……はっ！これは好機ではないか！私も起きれば、竜馬とふたりきりで朝トレが出来る！）

『［∩　∩］……』

シベラーはニコニコで箒を見ていると、箒はそれに気付いた。

「……はっ！な、何だその目は…」

『［∩　∩］いえいえ、何もありませんよ♪』

シベラーは窓から空を見ると、徐々に朝日は輝きだしていた。

◆学園内◆

「はぁ…はぁ…はぁ…」

一方、竜馬は学園内をランニングしていた。

「…あと少し！」

竜馬はスピードを上げ、寮の裏に到着した。

「ふぅ……。これで…終わり……」

竜馬は首に掛けていたタオルで汗を拭うと、水道が目に入った。

「あー…冷たくていいねぇー…」

タオルを水で濡らすと、シャツを脱いで身体を拭いていた。

「朝から自主トレか…」

「えっ？」

突然声を掛けられ竜馬は後ろに振り向くと、そこには千冬がいた。

「おはようございます、織斑先生」

「おはよう。日曜なのに早いな」

「まぁ日課ですから。それにオーバーズも強くなったから、僕ももっと強くならないと…」

そう言うと、竜馬はグッと背筋を伸ばした。

「そうか。……」

すると、千冬は竜馬をまじまじと見ていた。
15歳の男子よりも身体は鍛えられているが筋肉質ではなく、程よく筋肉が付いていた。

「…先生？」

「ん？あぁ、すまない…。それより、もうそろそろ戻れよ」

そう言うと、千冬はその場から離れていった。

「……変な千冬さん。……ああっ！」

竜馬は腕時計を見ると、7時まであと6分だった。

「早く戻らないと！」

竜馬はシャツを着ると、急いで寮に戻って行った。

◆竜馬・箒の部屋◆

「ただいまー」

『［ー　ー］竜馬殿、お帰りなさい』

竜馬は部屋に戻ると、シベラーが迎えてくれた。

「あれ、箒は？」

『［ー　ー］篠ノ之殿はシャワーですよ』

「そっか。そうだ！もうすぐ始まるんだった！」

竜馬は机のｉＰａｄを起動すると、テレビを開いた。

～１０数分後～

「ふぅ…。竜馬、帰っていたのか」

「あぁ、ただいま…」

シャワールームから箒が出てきたが、竜馬はｉＰａｄで何か見ていた。

「…何を見ているんだ？」

箒も画面を覗くと、特撮ヒーロー番組を放送していた。

『みんな、行くぞ！……変身！』

『『『『変身！』』』』

５人の俳優が敵に囲まれると、カードデッキのような物を手に取って言うと、５人はヒーローになった。

『レッドリュウキ！』

『ブルータイガ！』

『グリーンゾルダ！』

『ブラックナイト！』

『ホワイトファム！』

『鏡界戦隊！』

『『『『ミラーレンジャー！』』』』

『親衛隊長シザース！お前達、時界帝国の好きにさせない！』

赤い仮面のヒーロー…レッドリュウキは黄色い敵…親衛隊長シザースに指を差して宣言すると、５人はそれぞれカードを出して機械に入れた。ちなみに、レッドリュウキ、ブラックナイト、ホワイトファムは剣のカード、グリーンゾルダは銃のカード、ブルータイガは巨大な爪のカードだった。

【【【ソードベント】】】

【シュートベント】

【ストライクベント】

５人の機械から音声が流れると、それぞれカードに描かれた武器を持っていた。

『はあああああ！』

そして、５人は敵をどんどん薙ぎ倒していった。

「…何だコレは」

「何って、“鏡界戦隊ミラーレンジャー”だよ…」
鏡界戦隊ミラーレンジャーとは、スーパー戦隊シリーズ２３隊目の作品。鏡の世界ミラーワールドから来たミラーレンジャー達が、地球侵略をたくらむ時界帝国の大帝オーディン達と戦う、子供や女性に大人気の特撮ヒーロー番組である。
「……まだそんな物を見ていたのか」
「見始めたのは最近だよ。前のシリーズはＩＳの訓練とかで見てないよ……。お、リュウキの十八番だ！」
「そうか。……」
箒はテレビを見てはしゃいでいる竜馬を見て頬が若干赤かった。明るく笑う竜馬を見て、胸がキュンとなっていた。
（か、かわいい…！普段の竜馬も良いが、コレはなかなか……）
「……箒、どうしたの？」
「い、いや……何でもない！……それより、食堂に行くぞ」
箒は竜馬の手を掴むと、そのまま扉まで引っ張った。
「ちょ、箒！もう少しで終わるから待っ――「駄目だ」――てって、えぇっ！シ、シベラー！録画は？」
『［⊂　⊂］大丈夫、出来てますよ。いってらっしゃいませ竜馬殿、

篠ノ之殿』

「ああ！」

箒は竜馬を連れて食堂に向かった。

『［一　一］さて…ワタクシは続きを見ますか…』

◆食堂◆

「はぁ～…、もうエンディングかな…」

竜馬は番組を気にしながら朝食を取っていた。ちなみに、2人共和食セットである。

「録画をしているのだろう。それを見れば良いだろう」

「それはそうだけど――「おはようございます、竜馬さん、篠ノ之さん」――…ん？」

竜馬は挨拶された方に向くと、セシリアが朝食のトレーを持って立っていた。

「おはようセシリア」

「おはよう…」

「隣り、よろしいですか？」

「あぁ、いいよ」

竜馬は了承すると、セシリアは竜馬の隣に座った。ちなみに、セシリアの朝食は洋食セットである。

「竜馬さん。今日はお暇ですか？」

「まぁ午前中は勉強をするけど……午後は今の所、暇だね」

竜馬はそう言うと、焼鮭を頬張った。

尚、竜馬が言った勉強とは、一般教科の事である。ＩＳ学園生とはいえ高校生なので、勉強は必須だ。

「でしたら午後は、わたくしと一緒に出掛けませんか？」

「ぶっ！」

「…箒？」

セシリアの言葉に箒は飲んでいた緑茶を吹いてしまい、食堂にいた女子が一斉に振り向いた。

「…で、何処に行くの？」

竜馬は濡らしてしまったテーブルを拭きながらセシリアに言った。

「実は、駅前のデパートでショッピングをしたいのですけど、他の人達は用事がありまして一緒に行けなかったですわ」

言い終わると、セシリアは小さくため息をついた。

「わかった、いいよ」

「本当ですの！？」

「僕も寄りたいところがあるしね……って、セシリア？」

竜馬はセシリアを見ると、セシリアは嬉しくて頬を真っ赤にしていた。

（ま、まさか夢と同じ事が起こってしまうなんて……！今日はいい日になりそうですわ！）

セシリアは今日見た夢を思い出した。それは、竜馬とふたりっきりで出掛けて、最後に竜馬が告白してキスをしようとした夢だった。

「…セシリア、顔が赤いよ？熱があるんじゃ…」

「…っ！い、いえ！大丈夫ですわ！で、では……何時に待ち合わせをしま――「んっんん！」――…篠ノ之さん？」

セシリアの話しを遮るように、箒はわざとらしく咳込んだ。

「箒、どうしたの？」

「い、いや……。おおそうだ！私も買いたい物があったのだった。だから、私も行っても良いか？」

「なっ！！」

その言葉を聞き、セシリアは驚いた。

「そうなんだ？それじゃあ皆で行こうか、セシリア」

「え、えぇ……。良いですわよ…（し、篠ノ之さん……。わたくしと竜馬さんのデートを邪魔するなんて！）」

「あ！いたいた」

セシリアが心の中で不満を言っていると、1人のロングヘアーの女子が近づいて来た。

「え、部長！」

「ん？知ってる人？」

「あぁ。剣道部部長の白鳥先輩だ」

「白鳥　真也（しらとりまや）よ。よろしくね♪」

真也は竜馬とセシリアに挨拶すると、箒に言った。

「そうだ篠ノ之くん。今日の昼は、ちょっと遅いけど新入部員の歓迎会をするからね。何処にも行っちゃダメよ」

「え！あ、あの部長――「い・い・わ・ね・！」――…はい……」

「よしっ♪それじゃ、私は戻るわね」

真也の笑顔によって箒は渋々了承すると、真也は食堂を出た。

「……」

「箒？」

竜馬は箒に声を掛けたが返事はなく、真っ白になっていた……。

◆竜馬・箒の部屋◆

朝食後、竜馬と箒は部屋に戻るとそれぞれの机で勉強をしていた。

（…さ…最悪だ…）

だが箒は勉強に手付かずで、先程の出来事に嘆いていた。

（私もまだ竜馬とふたりっきりで買い物も行った事がないのだぞ！くっ、セシリアめ……！それに竜馬もだ！何故こんな日に限って暇

なんだ！）

箒は心の中で叫ぶが、肝心の竜馬は……。

「シベラー、これってどうするの？」

『［ー　ー］そうですね。この文に鍵がありますね』

「あっ、そうか！ありがとうシベラー」

『［∩　∩］いえいえ』

……真面目に勉強していた。すると、竜馬は立ち上がった。

「シベラー。ちょっとトイレに行ってくるよ」

『［ー　ー］分かりました』

そして、竜馬は部屋を出た。

『［ー　ー］……篠ノ之殿、どうかしましたか？』

「……」

『［？　？］篠ノ之殿？』

「……」

シベラーは何度も箒に話し掛けるが、返事はなかった。

『［―”―］……』

『［＞”＜］篠ノ之殿！！』

「っ！わ、私はいったい…」

『［ー　ー］どうしました？勉強も手付かずなんて…』

「……実は」

箒は食堂で起こった事を話した。

『［ー　ー］成る程、オルコット殿が……』

「あぁ……。竜馬としては友人の付き合い程度に思っているが、相手はあのセシリアだ。恐らく積極的に竜馬を誘惑するに違いない！」

箒は机を叩くと、シベラーを持ち上げた。

『［○　○］し、篠ノ之殿！』

「頼むシベラー！2人の様子を偵察してくれ！」

『［；ー　ー］て、偵察ですか…』

「邪魔をするんじゃないんだ。ただ、このままだったら私が落ち着かんのだ…。だから頼む！」

箒はそう言いながら、シベラーを強く揺すった。

『［×　×］わわ、分かりましたから、そんなに揺らさないで下さい篠ノ之殿～！』

シベラーは了承するが、竜馬が戻って来るまで揺さ振られるのだった。

～数時間後～

◆昼　ゲート前◆

「…まだ来てないか」

あれから数時間後、食堂で昼食を取った竜馬は私服に着替えてゲート前にやって来た。

「お待たせ致しましたわ、竜馬さん」

すると、すぐにセシリアがやって来た。勿論、彼女も私服だ。

「いや、僕も今来たところだよ」

「そうでしたか。それでは、行きましょうか♪」

すると、セシリアは竜馬の腕をするっと取り、そのまま歩き出した。

「……なぁセシリア」

「何ですの？」

「……いや」

セシリアの喜んでいる顔を見て、竜馬は何も言えなかった。

（ふふっ♪竜馬さん、わたくしの積極的なアピールに恥ずかしがってますわね。ここで篠ノ之さんとの差を一気に引き離しますわ！）

セシリアは心の中で燃えていると、竜馬は……

（う～ん……。この姿勢じゃあ歩き難いなぁ…。でもセシリアは喜んでるみたいだし……）

……いつもの事だった。

『［］　［］竜馬殿、オルコット殿と腕を組んで出発いたしました』

『う、腕だと！』

『［〇　o］ッ！！』

同時刻、上空７５ｍにてシベラーはタカ・カンドロイドに乗っていた。数時間前、箒に頼まれて竜馬達の様子を見て箒に報告していたのだ。

『［ー　ー；］し、篠ノ之殿。声を抑えて下さい…』

『うっ……すまん…』

『［ー　ー］ふむ……。どうやらバスに乗る見たいですね』

『そうか……。では、引き続き様子を探ってくれ』

『［ー　ー］御意…』

すると、箒は通信を切った。

『［∪”∪；］まったく……。竜馬殿の鈍感には参りますねぇ……』

シベラーは不満を言いながら、竜馬達の後を追った。

◆竜馬・箒の部屋◆

同じ頃、箒はバッタ・カンドロイドの電源を切ると溜め息をついていた。

（……私は何をやっているんだ…。こそこそするのは私には似合わん！）

すると、箒は部屋を出た。

「こうなったら、白鳥部長に話を――「おーい、篠ノ之くーん！」――って、部長！？」

部屋を出た瞬間、真也が箒に向かって来た。

「どうしたのですか？」

「いやー。食堂を使う為の申請が下りなくて、歓迎会の場所が変更したんだよ。場所は駅前デパート近くのカラオケボックスになったから、一緒に行こうと思ってね♪」

真也はウインクすると、箒は心の中で喜んでいた。

（その場所って、竜馬達の近くだな。これで竜馬に近づく事が出来る！それで、帰りには買い物に付き合ってもらうとしようか！）

「……おーい、篠ノ之くーん」

「はっ、はい！」

「ボーっとしてたけど、大丈夫？」

「だ、大丈夫です！それでは、すぐ着替えますので先に行ってて下さい！」

そう言うと、箒は部屋に戻って服を着替えに行った。

「……んじゃ、先に行きま――「お待たせしました！」――って、早っ！」

◆バス停　駅前デパート前◆

その頃、竜馬達はバスを降りたところだった。

「そういえば、竜馬さんは何処に寄りますの？」

「あぁ、僕は――「イーじゃん、遊びに行こうよ」――…ん？」

竜馬は声のする方を向くと、セシリアもそこを見た。すると、モニュメントの前で2人の遊び人といった風体の男が、1人の女の子に声を掛けていた。

「まぁ、なんて品の無い方たちなんでしょう…」

「……セシリア、ちょっと待ってて」

「えっ、竜馬さん！」

そう言うと、竜馬はモニュメントの前まで歩いて行った。

「俺、向こうに車あるからさぁ。どっかパーッと遠くに行こうよ！」

「……（はぁ……）」

眼鏡を掛けたセミロングの女の子は無言だったが、心の中で溜め息をついた。

（新作のＤＶＤを買いに来ただけなのに……なんでこんなめに……）

「なぁ、行こ――「おぉ、ここにいたんだ！」――…え？」

チャラ男Ａは声の方に振り向くと、竜馬が女の子の前までやってきた。

「いやぁ、ちょっと用事が長引いてね。ゴメン！」

「え……」

竜馬は手を合わせて謝ると、小声で言った。

「（僕に合わせて）」

「あ……。っ！」

女の子は竜馬の言葉を聞いた瞬間、右手を竜馬に掴まれた。

「行こうか、向こうで友達が待ってるよ」

竜馬は女の子に笑顔で言い、セシリアの方を指差した。

「は、はい……」

女の子は頬を赤く染めるなか、竜馬はチャラ男達に青い缶を渡した。

「いやーゴメンね。連れが退屈しないように話し相手になってくれて。コレは御礼だから、それじゃ！」

「え……」

「ど、どうも……」

そして、竜馬は女の子を連れてセシリアのところに戻った。

「……もういいかな」

竜馬は戻ってくると、女の子の手を離した。

「大丈夫でしたか？」

「あの……えっと……はい…。あ、ありがとう……」

セシリアは声を掛けると、女の子は戸惑いながらも竜馬に御礼を言った。

「いや、当然の事をしたまでだよ」

そう言うと、竜馬は先程のチャラ男達を見ていた。すると、チャラ男達は竜馬に渡された缶を開けようとしていた。

「竜馬さん、あの方達に何を渡したのですか？」

「あぁ、あれは――「「ギャアアアアアア！！」」――おっと」

竜馬の言葉を遮るように、チャラ男達は叫んでいた。よく見ると、チャラ男達の腕に何かが巻き付いていた。

「な、なんですの？」

「あいつらにあげたのは……コレだよ」

竜馬はセシリアに、先程チャラ男達に渡した青い缶を見せてプルタブを開けた。

【ＵＮＡＧＩ－ＫＡＮ】

『ウナギー！』

すると、青い缶…ウナギ・カンドロイドが竜馬の手の平に乗った。

「捕縛用のカンドロイドで、相手に巻き付いて電撃をおみまいするんだ」

「そうなんですの…。まぁ、あの方達には当然の報いですわね」

「……ふふっ」

２人の会話を聞いて、女の子は小さく笑った。

「それじゃあ、僕達は行くね」

「ごきげんよう♪」

竜馬達は女の子と別れると、デパートの中に入って行った。

「……かっこいい」

しばらく女の子は、頬を赤く染めながら竜馬の背中を見ていた。

◆デパート　５階◆

「あの、竜馬さん……どうですか？」

現在、５階のレディースでセシリアが持っている服を、竜馬に見せていた。

「うーん……。僕的にはこっちかな」

「そ、そうなんですか。では、こちらにしましょう♪」

セシリアは竜馬に選んでもらった服をレジに持って行った。

（楽しそうでなによりだな。さて……）

竜馬は考えながら携帯をいじっていると、あるサイトを見ていた。

（今月発売の《Ｇ３マイルド》…。コレは買わないとねぇ……）

竜馬は今月発売の模型……ロボットアニメの《機動警察Ｇ３》に出て来る量産機、Ｇ３マイルドの情報を見て小さく微笑んだ。

「お待たせしましたわ」

セシリアは紙袋を持って戻って来た。

「それじゃあ、行こうか」

2人は店を出ると、下に降りていった。

『［ー　ー］ふむ……。オルコット殿も中々やりますねぇ……』

一方シベラーは物影に隠れて様子を見てると、箒から通信が入った。

『私だ。今はどうなっているんだ？』

『［？　？］おや？篠ノ之殿、前より電波が強いのですが……』

『あぁ。それがだな…』

箒は歓迎会の事をシベラーに言った。

『［♪　♪］カラオケボックスって、デパートの隣にある場所ですよね？』

『あぁ。今はトイレで通信しているが、もう戻らなくては』

『［ー　ー］分かりました。引き続き様子を伺います』

言い終わると通信は切れて、シベラーは再び2人を見張っていた。

◆2階◆

「なっ！今日は臨時休業……だと…！」

2階にやってきた2人は模型店の前にいたが、生憎臨時休業だった。

「……竜馬さんが寄りたい所って、ここですの？」

「……まぁ、ね。でも今日は諦めるかぁ……。セシリア、次はどこ行く？」

「でしたら、生活雑貨を見に行きましょうか」

「ああ、いい――「おい、あれって！」――ん？」

近くにいた人が窓の外を見て驚いていた。竜馬達も外の騒ぎを見てみると、デパート近くにあるアニメショップから火が見えていた。

「どうやら火事の様ですわね……」

「……」

「……竜馬さん？」

セシリアは竜馬を見ると、竜馬は目を細めて火事現場を見ていた。

「……人だ」

「え！」

「いま、２階の窓から人影を見たんだ！」

そう言いながら竜馬はオーバーズのドライバーを部分展開し、シャチメダル・トラメダル・バッタメダルをはめ込んで右手をスライドした。

【シャチ！トラ！バッタ！】

音声と共に竜馬はシャチヘッドのみ部分展開をすると、ヘッドライトにエネルギーを送り込んだ。すると、目の前に青い空中投影ディスプレイが浮かんでいた。

「…やっぱり、逃げ遅れた人がいる！」

ディスプレイに映っているのは、建物を透かして反響定位（オルカエコー）の様に熱源体が映っていた。これがシャチヘッドのもう１つの能力である。

「セシリア、ここで待ってて……」

「えっ、竜馬さん！」

竜馬は直ぐさま火事現場に向かった。

◆火事現場前◆

一方、現場の前には人集りがあった。その中には、騒ぎを聞き付けてＩＳ学園剣道部の姿もあった。

「火事の原因って何だろう？」

「話によると、１階にある古い配線から発火したみたいよ…」

「……竜馬」

人集りの話を聞いて、箒はシベラーに連絡をした。

『篠ノ之殿！現在どちらに』

「今は火事現場の前にいるのだが……どうしたんだ？」

『先程、竜馬殿が火事の中に人が取り残されていると言って、そち

らに向かってます。見かけ次第、止めて下さい！』

「何っ！」

それを聞き、箒は2階を見た。1階は完全に火が回り、入る事さえ難しかった。

「まだ人がいるなん――「おい、あれ！」――…っ！竜馬っ！」

箒はギャラリーの1人が指差す方を見てみると、そこにはバケツに水を入れた竜馬が走ってきた。そして竜馬は水を被ると燃えている店内に入っていった。

「竜馬！！」

『［一　一］篠ノ之殿！！』

「篠ノ之さん！？どうして貴女が…」

「セシリア、シベラー！竜馬が、あの中に！」

「何ですって！」

『［〇　o］ええっ！』

◆アニメショップ◆

竜馬は入ってすぐヘッドライトとボンベを部分展開すると、カムイを放水して炎を鎮火していた。

（ある程度消さないと2階に行けない！）

すると2階の階段の火が鎮火されるのを確認して、竜馬は上がって行った。

「誰かいないか！」

2階に上がると、竜馬は大きく叫んだ。

「…ゴホッ、ゴホッ……」

「っ！」

竜馬は音がした方をオルカエコーで見た。すると、そこに人がいた。

「大丈夫か……って、君はさっきの！」

竜馬が見たのは、少し前に助けた女の子だった。女の子は煙を吸っていたので、大分弱っていた。

「……あな…たは…」

「助けに来た。今からここを……っ！」

竜馬は階段を見ると、火が上がってきた。

「ちっ……。だったら…」

竜馬は近くの窓を開けると手に1本、回りに数十本のタコ・カンドロイドを転送した。

「…そらっ！」

【ＴＡＫＯ‐ＫＡＮ】

『タコー！』

竜馬は変形したタコ・カンドロイドを窓に投げると、残りのタコ・カンドロイド達も変形して外に飛び出た。

「しっかり捕まっててよ…っ！」

竜馬は女の子を抱えると、窓から跳び出た。

◆火事現場前◆

「何か来たぞ！」

ギャラリーの1人が、窓から放り出された物を指差した。

「あれは！」

『［O　○］タコ・カンドロイド！』

すると、タコ・カンドロイド達が集まってなだらかな坂になった。
そして、窓から竜馬が跳び出て来た。

「「「キャアアアア！」」」

ギャラリーが叫ぶなか、竜馬はタコ・カンドロイド達に着地してゆっくり滑った。

「……ふぅ」

「「竜馬（さん）っ！」」

箒とセシリアは竜馬に駆け寄ると同時に、消防車と救急車が到着した。

～数十分後～

◆火事現場跡◆

あれから数十分後、炎は無事鎮火されたが、竜馬と女の子は念のため病院に搬送された。

「セシリア、何故止めなかったんだ！」

現場跡では箒がセシリアに、何故竜馬を止めなかったのかを問い質していた。

「止めていたら、竜馬はあんな無茶をしなかったんだぞ！」

「ですから！わたくしも最初は戸惑って…」

『［；｜　｜］2人共、少し落ち着いて下さい…』

シベラーは2人に割って入った。

『［；｜　｜］竜馬殿が無茶するのも無理がありません。あの事件が原因で……』

「あの事件？」

箒はシベラーの言葉を聞くと、シベラーは話し続けた。

『［ー　ー］あれは3年前……竜馬殿がマスターと白黒会長の仕事に付いて行った時です。小さな村で数ヶ月住んで、その時にも親友と呼べる人ができました……』

『［ー　ー］しかし、偶然にもその村でテロに巻き込まれたんです……』

「テロ…」

『［ー　ー］はい。……お世話になってた村の人達と協力して何週間かもちました。でも、テロは激しくなり、食料もなくなり、竜馬殿達はボロボロになりました……』

「「……」」

2人はシベラーの言葉を聞き、いつも優しい笑顔をする想い人の壮絶な過去に驚愕していた。

『［ー　ー］そして起こりました。その村で最初の親友が、竜馬殿の目の前で亡くなってしまいました……』

「「……！」」

『［ー　ー］その後のテロを収めたのがドイツ軍と、当時決勝戦（モンド・グロッソ）まで進んでいた千冬殿でした…』

「織斑先生が…」

『［一　一］千冬殿は白黒会長やマスターと知り合いですからね。しかも、弟のように仲が良かった竜馬殿もいたとしたら、真っ先に来る理由になりますね……』

箒は驚くと、セシリアはある事を思い出した。

「では、あの決勝戦棄権の理由は！」

『［一　一］……はい』

シベラーは小さく頷いた。

当時、第1回ＩＳ世界大会優勝者の千冬は大会2連覇も夢じゃないと誰もが思っていた。しかし決勝戦棄権という誰も思えなかった行為が、大きな騒ぎになっていた。

『［一　一］その時から、竜馬殿は自分の無力差に悔やんでいました。自分のせいで織斑千冬殿の経歴に傷を付けてしまった……あの時ああしていれば、こんな事にならなかったのではないかと……、束殿に出会うまではいつもそんな風でした…』

あれから1年後、竜馬は束と出会いＩＳを扱う事が出来ると言われ、メルダに置いてあったＩＳを動かした。

「……そうだったのか…」

「竜馬さん……」

すると、シベラーは空を見上げた。

『［一　一］ＩＳを手にしてからも、目の前で危険にさらされてい

るモノがいれば、竜馬殿は命を危険にさらしてまでその手で護るでしょう……。それは、決して戻る事は無い過去の悔しさを償うように……』

◆寮　竜馬・箒の部屋◆

「……」

箒達は寮に戻ると、部屋のベッドには竜馬が寝ていた。とくに外傷は無かったようで、早く病院に戻れたようだ。

「よく寝てますね…」

「そうだな…」

2人はそれぞれ、竜馬の隣に腰掛けると寝顔を見ていた。

「……ねぇ、篠ノ之さん」

「……なんだ」

「今からする事は、他言無用でよろしくて」

「そうか。なら、私のする事も他言無用だぞ」

「えぇ…」

セシリアがそう言うと、2人は竜馬の左右の頬にキスをした。

「「……」」

しばらく2人は顔を赤く染めて沈黙すると、箒が口を開いて竜馬の頭を優しく撫でた。

「竜馬……。お前が危険な目に会ったら、私が力を貸すぞ……」

「ふふっ……。篠ノ之さん……それを言うなら、わたくし達が……でしょ」

「……あぁ。そうだな」

2人は顔を合わせると小さく微笑んだ。新たな決意……無茶をする竜馬を守るために……。

◆夕方　病院前◆

「……」

夕方、女の子は病院を出て診察カードをカバンに直していると、見知った顔を見つけた。

「かーんちゃーん～」

「……っ」

女の子は声を掛けられて診察カードを落とした。カードには、更識簪と書かれていた。

「本音……」

「学園から連絡が来たからー、お迎えに来たよー」

「……ありがとう」

2人は一緒に歩いていると、本音は声を掛けた。

「かんちゃん、何かいい事でもあったのー？」

「……（コクッ）」

簪は小さく頷くと、助けてくれた人物を思い出した。

「そーなんだー！良かったねー」

「……うん」

表情は変わらないが、簪の頬は赤くなっていた。

（……ありがとう、龍東さん）

◆夜　ＩＳ学園　ゲート前◆

「ふぅん、ここがそうなんだ……」

その夜、ゲート前にはツインテールの少女が立っていた。

「ここに竜馬が……ふふっ♪」

そして少女は小さく微笑むと、ゲートをくぐった。

０５話【日曜とデパートと竜馬の過去】（後書き）

今回でてきた剣道部部長の名前は、オーズ１７話の剣道少女とその役者さんから取りました。

こう原作に無い話を書くと時間がかかります……

まぁ、ぼちぼちと頑張っていきますので…よろしくお願いします。

０６話【中国と挑戦状と動き出す者】（前書き）

原作を見ながら書くのって、やっぱ早いですねぇ……。

あ、６話できました！

０６話【中国と挑戦状と動き出す者】

◆朝　１年１組◆

「龍東くん、おはよー！ねぇ、転校生の噂聞いた？」

デパートから翌日の朝、竜馬は席で箒と話しているとクラスメイトに話し掛けられた。

「転校生？今の時期に珍しいなぁ…」

竜馬は少し珍しく思った。今はまだ４月、しかもＩＳ学園の転入はかなり条件が厳しかった。試験は勿論、国の推薦がないと出来ない仕組みなので、つまり……

「そう、なんでも中国の代表候補生なんだってさ」

「へぇ……（中国かぁ…。懐かしいなぁ…）」

「あら、わたくしの存在を今更ながらに危ぶんでの転入かしら」

竜馬は中国と聞いて懐かしむと、セシリアが腰に手を当てながら近づいていた。

「このクラスに転入してくるわけではないのだろう？騒ぐ程の事でもあるまい」

「ふっ…、そうですわね。箒さんの言う通りですね」

箒の言葉にセシリアは小さく微笑みながら言った。先日のアレをしてから、2人は少し仲良くなっていた。

「だが、どんな奴だろうか……竜馬？」

「ん？」

箒は話し掛けると、竜馬は考え込んでいた。

「どうしたんだ。もしかして……その奴が気になるのか？」

「まぁ、少しは…」

「……ふん」

竜馬は箒の話に答えたが、箒はむくれてしまった。

「でも、中国は懐かしいかなぁ。1年前に3ヶ月程滞在してたからね」

「へー。龍東くん中国に住んでたんだぁ」

「うん。その時、小学校の時に仲良くなった親友とも久しぶりに会ってね……。もしかして、その子が代表候補生かも」

「し、親友だと！」

「そ、それはどう言う事ですの！」

クラスメイトと話していると、箒とセシリアが話し掛けた。

「転校した小学校の5年の時に知り合ったんだ。短かかったけど、直ぐに仲良くなってね……」

「そうか…。だが、来月にはクラス対抗戦があるのだぞ。その親友を気にしている余裕があるのか？」

「そう！そうですわ竜馬さん。クラス対抗戦に向けて、より実戦的な訓練をしましょう。あぁ、相手ならこのわたくし、セシリア・オルコットが務めさせ――「待て、私が竜馬の訓練を務める。訓練機なら私も使えるからな」――…むっ」

セシリアの言葉を遮るように、箒も竜馬の訓練に付き合える事を主張した。

ちなみに、クラス対抗戦とはクラス代表同士によるリーグマッチであり、本格的なＩＳ学習が始まる前のスタート時点での実力指標を作るためにやるイベントである。これにより、クラス単位での交流及び団結が取れる。

「ハハッ…、２人共ありがとう。頼りにしてるよ」

「ああ！」

「ええ！」

竜馬の言葉に、２人は笑顔で答えた。

「龍東くん、頑張ってねー」

「フリーパスの為にもね！」

「今のところ専用機を持ってるクラス代表って、1組と4組だけだから余裕だよ」

「ああ。任せて！」

竜馬は親指を立てながら返事をした。ちなみにフリーパスとは、1位クラスの優勝賞品で学食デザートの半年フリーパスが配られるのだ。

「――その情報、古いよ」

「ん？（この声は…）」

教室の入口からふと声が聞こえると、竜馬はその声を知っていた。すると腕を組み、片膝を立ててドアにもたれているツインテールの女子がいた。

「2組も専用機持ちがクラス代表になったの。そう簡単には優勝できないから」

すると、竜馬は席を立ち上がるとその女子に近づいた。

「鈴……？もしかして、鈴なの？」

「そうよ。中国代表候補生、凰　鈴音（ファン・リンイン）。今日は宣戦布告に来たってわけ！」

その女子……鈴音はふっと小さく笑みを漏らすと、竜馬は嬉しく思い良い笑顔をして言った。

「鈴！本当に久しぶりだね。まさかと思ってたけど、やっぱり鈴だったんだ！」

竜馬は拳を出すと、鈴音も拳を出してコツンとぶつけた。どうやら、先程言っていた親友とは鈴音の事だった。
ちなみに名前は鈴音だが、竜馬は略して鈴と呼んでいる。

「でも鈴。さっきの気取った喋り方は無いと思うよ」

「んなっ……！？なんてこと言うのよ、アンタは！」

「……うんうん。やっぱり鈴には、その方が合ってるよ」

そう言った竜馬は、鈴の頭を撫でだした。そしてそれを見たクラス全員は驚いていた。

「ちょ、ちょっと……。もう、子供扱いしないでよ！」

鈴はそう言うが、頬を赤くして目を閉じ、気持ち良さそうにしていた。

「おっと、ゴメン」

「ぁ……」

竜馬は謝ると鈴の頭から手を離すと、鈴は名残惜しそうにした。

（も～！竜馬、まさか分かっててしてるわけ！もっと撫でなさいよ！）

鈴はそう思っていると、後ろから声を掛けられた。

「おい」

「なによ！？」

―バシンッ！―

鈴は返事を聞き返した瞬間、頭に痛烈な打撃が入った。

「っ～～！いったいだれ…よ…」

鈴は振り向くと、そこには鬼教官……もとい、千冬が立っていた。

「もうＳＨＲの時間だ。教室に戻れ」

「ち、千冬さん……」

「織斑先生と呼べ。さっさと戻れ、そして入り口を塞ぐな。邪魔だ」

「す、すみません……」

鈴はすごすごとドアからどくが、その態度は完全に千冬にビビっていた。すると、鈴は竜馬を指差して言った。

「また後で来るからね！逃げないでよ、竜馬！」

「さっさと戻れ」

「は、はいっ！」

そう言って、鈴は2組に向かって猛ダッシュで戻って行った。すると、竜馬は千冬に話し掛けた。

「えっと…、織斑先生は鈴を知ってるんですか？」

「……少し前、中国に行った時出会ってな……、軽くしごいてやった」

「……」

それを聞いて竜馬は納得した。誰にでも厳しい千冬の特訓は、それはそれは軽いトラウマになるだろう…。

「……竜馬、今のが先程言っていた友か？しかも、頭を撫でるなど羨ましすぎ……ゴホンッ！」

「り、竜馬さん！？あの子とは本当に親友というだけなのですか！どのような関係で、頭を撫でていらっしゃるので――」

竜馬は箒達を筆頭に、クラスメイト達からの質問が集中砲火で襲ってきた……その時！

―バシンバシンバシンバシン！―

「席に着け、馬鹿共…」

千冬の出席簿が火を噴き、それぞれ席に戻った。

（うーん……。しかし何でまたこう親友と再会するんだろうか……意外と世界って狭いなぁ……）

竜馬は心の中で考えるなか、今日も授業が始まった。だが2人の親友は授業中、様々な事を思っていた……。

◆2時間目　教室◆

箒　Ｓｉｄｅ

（何なのだ、あの女子は……）

私は先程の一件が気になって、なかなか授業に集中出来なかった。

（竜馬も竜馬だ……。何故、あの女子には頭を撫でるんだ！私には撫でてくれないではないか……！）

私は込み上げてくる怒りをどうにか抑えながら、ちらりと後ろにい

る竜馬を窺った。

「……」

流石は竜馬、真面目に授業内容をノートに取っているな……って！

（違う違う！私は授業に集中できないというのに、お前はっ……！）

……ますます腹が立った。少しくらい、私を気にしたらどうだ！私だけを……

「……」

しかし……まぁ、冷静に考えてみればたいした事ではないな。何せ、私は竜馬と同じ部屋だ。ふたりきりの時間は何時でも作れるからな。

（……ふふっ♪しょうがない奴だ。また一緒に特訓をするか♪）

そうだ。私のアドバンテージは揺るがない。さっきの凰と言う女子にしてもそうだし、セシリアやクラスメイトにしてもだ！

「――のの、答えは？」

（そうだ！何も焦る必要は無い。私の方が1歩……いや10歩はリードしているんだ！もっと竜馬と特訓して……ん？今、私を呼んだこの声は……）

「篠ノ之、答えは？」

「は、はいっ！？」

し、しまった！今は授業中で、しかも織斑先生の時間だ！

「……もう一度言う。答えは？」

「……き、聞いていませんでした……」

―バシーン！―

……い、痛い……。竜馬、お前のせいだぞ……

箒　Ｓｉｄｅ　Ｅｎｄ

◆３時間目　教室◆

セシリア　Ｓｉｄｅ

（なんなんですの、さっきの方は！）

あの方……凰さんは竜馬さんとどのようなご関係なのかしら。あんな親密に振る舞うなんて……あぁ！気になって集中出来ませんわ！

ただえさえ、箒さんという最大のライバルがおりますのに……これ以上競争相手が増えたら、わたくしはピンチですわ！

しかも…、竜馬さんはあの方とお友達と言っていましたわ。それも、箒さんのように長い付き合い……

（これじゃあ……一生懸命にマラソンをしていたら、いきなり中間地点から走り出したランナーですわ…。それはズル！ズルですわ！正々堂々と勝負なさい！）

もしそれがマラソンなら、わたくしは負ける気がしません。ですが、これは愛しの殿方を取り合う競争……、なにせ初めてですから思うように状況が進みませんわ……。

（しかも、代表候補生の専用機持ち――）

確か学園に在籍している代表候補生は２０数名……。１年では４名で、専用機は竜馬さんを抜かせば……わたくしを入れて２人。

（…最悪ですわ。これでは、わたくしのリードポイントが全て無効になってしまいますわ！いい、インチキですわ！）

わたくしは内心焦っています。なんとかして主導権を取らなくては！しかも、箒さんと凰さんを大きく突き放す程のモノを……！

（模擬戦だけでは箒さんと大差無いですわ。もっとこう……決定打になるような――）

「オルコット」

（例えばデートに！……いえ、もっと効果的な……ハッ！そうですわ！竜馬さんとの既成事実を……）

「……」

―バシーン！―

「あうっ！」

「馬鹿者。きちんと授業に集中しろ」

うぅ……。まさか織斑先生が近づいていたなんて……。竜馬さん、貴方のせいですわよ！

セシリア　Ｓｉｄｅ　Ｅｎｄ

◆昼休み　教室◆

「お前のせいだ！」

「貴方のせいですわ！」

昼休み、開口一番箒とセシリアが竜馬に文句を言っていた。

「えっ？」

だが、竜馬は訳が分からず首を傾げた。ちなみに2人共、午前中だけで真耶に注意5回、千冬に3回叩かれている。

「うーん……。まぁ話なら昼食を取りながら聞くから、とりあえず学食に行こうよ」

「む……。ま、まぁお前がそう言うのなら、良いだろう」

「そ、そうですわね。行って差し上げないこともなくってよ」

竜馬の言葉に、2人は若干頬を赤くして言った。

「それじゃ、行こうか」

竜馬は教室から出ると、そのほかクラスメイトも数名付いてきて、ぞろぞろと学食に移動した。

◆学食◆

学食に到着した竜馬は券売機で日替わりランチを買った。ちなみに箒はきつねうどん、セシリアは洋食ランチを買っていた。

「待っていたわよ、竜馬！」

すると、竜馬達の前に鈴が立ち塞がった。その手にはお盆を持っており、ラーメンが鎮座している。

「やあ鈴。とりあえず、そこどいてくれるかな？食券出せないし、通行の邪魔だよ」

「う、うるさいわね！分かってるわよ！」

鈴はその場を少しどくと、竜馬は食券を学食のおばちゃんに渡した。

「それにしても、９ヶ月ぶりになるかな。元気にしてた？」

「元気にしてたわよ。アンタこそ、たまには怪我病気しなさいよ」

「ハハッ。どういう希望、それ…」

竜馬は鈴との会話に笑った。

「あー、ゴホンゴホン！」

「ンンンッ！竜馬さん？注文の品、出来てましてよ？」

すると、大袈裟に咳き込んだ箒とセシリアによって会話が中断された。

「あぁゴメン。それじゃあ向こうのテーブルが空いてるから、行こう」

そして竜馬は3人に言うと、鈴と一緒に空いてるテーブルについた。しばらくして、箒とセシリアもテーブルについた。

「鈴、いつ日本に帰ってきたの？おばさん達は元気？麗々さんとはどうなの？」

「質問ばっかしないでよ。アンタこそ、もう専用機を持ってるの？」

「あぁ、これがオーバーズだよ」

竜馬は待機状態のメダルを鈴に見せた。

「竜馬、そろそろどういう関係か説明してほしいのだが」

「そうですわ！……ま、まさか竜馬さん、こちらの方と付き合ってらっしゃるの！？」

ざわ……

ざわ……

セシリアの言葉に、他のクラスメイトも興味津々とばかりにざわついていた。

「べ、べべ、別に私は付き合ってる訳じゃ……」

「だから……朝に言った通り、転校した小学校で5年の時に仲良くなった親友だよ。それに、僕みたいな男がモテる訳がないよ」

「「「……ハァ～…」」」

「…？どうしたの？」

竜馬の言葉に3人は深い溜め息をしたが、竜馬は理解出来なくて首を傾げた。

「まあとりあえず。鈴、紹介するよ。こっちが箒。前に話した転校する前にいた学校の親友で、僕の通ってた剣術道場の娘だよ」

「ふぅん…、そうなんだ…」

鈴はじろじろと箒を見ると、箒も負けじと鈴を見返していた。

「初めまして。これからよろしくね」

「ああ。こちらこそ」

鈴と箒は挨拶を交わすが、2人の間では火花が散っていた。

「ンンンッ！わたくしの存在を忘れてもらっては困りますわ。中国代表候補生、凰　鈴音さん？」

「……誰？」

「なっ！？」

セシリアは驚くと、言葉を続けた。

「わ、わたくしはイギリス代表候補生、セシリア・オルコットでしてよ！？まさか御存じないの？」

「うん。あたし他の国とか興味ないし」

「な、な、なっ……！？」

セシリアは言葉に詰まりながらも、怒りで顔を赤くしていった。

「い、い、言っておきますけど、わたくし貴女のような方には負けませんわ！」

「そ。でも戦ったらあたしが勝つよ。悪いけど強いもん」

（相変わらずの自信だなぁ……）

竜馬は心の中で懐かしく思った。

（前もそうだったなぁ…。妙に確信じみてるし、しかも嫌味じゃない言い方をする。一緒に訓練した時もそうだったし…）

竜馬は中国に滞在してた頃、鈴と一緒に訓練機の打鉄で戦う時にも同じように言われた。

「い、言ってくれますわね……」

「……」

鈴の言葉に、セシリアはわなわなと震えながら拳を握りしめ、箸は無言で箸を止めていた。それに対して鈴は、何食わぬ顔でラーメンをすすっていた。

「竜馬。アンタ、クラス代表なんだって？」

「ん？そうだけど…」

「ふーん……」

そう言いながら、鈴はどんぶりを持ってゴクゴクとスープを飲んだ。そしてどんぶりを置くと、顔を竜馬から逸らして視線だけを向けて言った。

「あ、あのさぁ……」

「…なに？」

「久しぶりに、あたしとＩＳの訓練しない？」

「おぉ！いいｎ――」

―ダンッ！ダンッ！―

「っ！……箒？セシリア？」

竜馬は音のした方に目を向けると、箒とセシリアがテーブルを叩いて、その勢いのまま立ち上がっていた。

「竜馬と訓練するのは私の役目だ。頼まれたのは、私だ」

「貴女は2組でしょう！？敵の施しは受けませんわ」

2人は怖い顔で鈴を見た。

「あたしは竜馬に言ってんの。関係ない人は引っ込んでてよ」

鈴の言葉に直ぐさまセシリアは言った。

「1組の代表ですから、1組の人間が教えるのは当然ですわ。貴女こそ、後から出てきて何を図々し――「後からじゃないけどね。あたしの方が付き合いは長いんだし」――…むっ！」

セシリアは話しを遮られるが、続けて箒が言った。

「そ、それを言うなら私の方が早いぞ！それに、竜馬は何度もうちで食事をしている間柄だ。付き合いはそれなりに深い」

「うちで食事？それならあたしもそうだけど？」

「「なっ！？」」

鈴の言葉に2人は言葉を失い、鈴は余裕の表情を見せた。
「まあね。鈴の家は中華料理屋でね、よく影宮さん達と行ってたんだ」
だが竜馬の発言により、余裕だった表情が途端にむすっとふて腐れた。そして対照的に、箒とセシリアはホッとした表情をしていた。
「な、何？店なのか？」
「お店なら、別に不自然な事は何一つありませんわね…」
2人同様、クラスメイト達も同じように緊張と緩和を繰り返している。すると、鈴が話し掛けてきた。
「そ、それよりさ、今日の放課後って時間ある？あるよね。久しぶりだし、どこか――「生憎だが、竜馬は私とＩＳの特訓をするのだ。放課後は埋まっている」――…」
鈴の言葉を遮るように箒が言うと、続けてセシリアも言った。
「そうですわ。クラス対抗戦に向けて、特訓が必要ですもの」
「じゃあそれが終わったら行くから、空けといてね。じゃあね、竜馬！」
鈴はラーメンのスープを飲み干すと、竜馬の答えを待たずに片付けに行ってしまい、そのまま学食を出て行った。

「……こりゃあ、待ってないとなぁ…」

竜馬は鈴が出て行った方に目を向けて、鯖の塩焼きを頬張った。

◆放課後　第3アリーナ・ステージ◆

放課後、竜馬は箒と共に特訓するためにオーバーズを展開していたが……

「はあああああっ！」

「甘いですわ！」

何故か箒はセシリアと戦っていた。

「…どうしてこうなったんだろ……」

竜馬は数分前の事を思った。

〜数分前〜

「では竜馬、始めようとしよう」

「あぁ」

箒は打鉄を展開しており、刀型近接ブレードを装備して竜馬と対峙していた。同じく竜馬も、双槍（アヴェンジャー）を装備していた。

「では……参「お待ちなさい！」――…っ！」

「ん？」

2人はつんざく声に気付くと、竜馬の前にセシリアがＩＳを展開した状態で割って入って来た。

「竜馬さんのお相手をするのはこのわたくし、セシリア・オルコットでしてよ！？」

「えぇい、邪魔な！ならば斬る！」

そう言うと箒はセシリアに向かって行った。

「訓練機ごときに後れを取る程、優しくはなくってよ！」

そして戦闘が開始された。

〜現在〜

「……ファ〜…」

竜馬は2人の戦いを見ていたが、暇で軽く欠伸をしていた。

（僕の特訓はどうするんだろう？）

そう思っていると、箒とセシリアが話し掛けてきた。

「竜馬！」

「何を黙って見ていますの！？」

「ウェッ！？」

竜馬は突然の言葉に驚いた。

「何を黙ってって……どっちかに味方したら怒るで――「「当然だ！（ですわ！）」」――…」

竜馬は2人の息ぴったりの言葉に少し沈黙したが、それがいけなかった。

「ええいっ！」

「はっきりしなさいっ！」

箒とセシリアはしびれを切らして、竜馬に向かって攻撃を仕掛けてきた。

「おっと！」

竜馬はセシリアのスターライトｍｋ？による弾丸を避けて、箒の袈裟斬りをアヴェンジャーで受け流した。

「2対1は卑怯でしょ！」

すると竜馬はアヴェンジャーを収納すると、セルメダルをベルトに投入して右手をスライドさせた。

―カポーン！―

オーバーズはバースになると、バースバスターを箒に向けて放った。

「くっ！」

箒はバースバスターの弾丸を避けながら竜馬に近づくが、竜馬はす

かさずセルメダルをベルトに投入した。

【ＤＲＩＬＬ　ＡＲＭ】

右手にはドリル状の武器（ドリルアーム）が展開されて、箒の刀を受け止めた。

「はあああっ！」

「うぉぉっ！」

ドリルと刀の鍔ぜり合いが続くが、箒に異常が生じた。

「なっ、エネルギーが！」

そう……。バースのＥ・Ｄ・Ａが発動して、箒の打鉄のシールドエネルギーが吸収されていたのだ。

「まずは１人…」

竜馬は言い終わると、箒はその場で停止した。

「くそっ…」

「次はセシリアか…」

竜馬は、またセルメダルをベルトに投入した。

【ＢＲＥＡＳＴ　ＣＡＮＮＯＮ】

すると、胸部にはエネルギー砲（ブレストキャノン）が展開された。

「ブルー・ティアーズ！」

「だったら！」

【ＴＡＫＯ-ＫＡＮ】

『『『『『タコー！』』』』』

セシリアはビットを展開するが、竜馬はタコ・カンドロイドを６体展開させてセシリアに放った。

「ああもうっ！これでは集中出来ませんわ！」

タコ・カンドロイド達はセシリアの周りを飛んで、セシリアの集中を掻き乱していた。それにより、ビットは浮かんだままで攻撃をしてこなかった。

「これでえっ！」

竜馬はベルトにセルメダルを３枚投入すると、エネルギーをブレストキャノンに送り込んだ。

【ＣＥＬＬ　ＢＵＲＳＴ】

「ブレストキャノンシュート、発射！」

「キャアアアッ！」

竜馬はブレストキャノンのトリガーを引くと、強力なエネルギー弾が発射されてセシリアに直撃した。

「ふぅ…これで終わり――「「まだだっ！（ですわっ！）」」――…えっ！？」

竜馬の言葉を遮るように、箒とセシリアが立ち上がった。

「まだ勝負は…！」

「終わっていませんわっ！」

そして２人は再度竜馬に挑んで行った。

◆メルダ・ファウンデーション　ドロイド開発室◆

その頃、メルダ・ファウンデーションではある事が起こっていた。

「……おかしい」

前に映し出しているディスプレイを見ながらコーヒーを飲んでいる銀髪の男がいた。

だが男の両腕は肩から指先まで異形であり、まるで機械のような腕だった。

「どうした、金剛　黄金（こんごうこがね）ＡＩ開発部主任…」

「あっ、影宮局長…」

男……黄金は影宮に気付いたが、影宮はディスプレイを見ていた。

「何かあったのか？」

「はい。何者かが開発中のヒューマン・ドロイドを1体、持ち出しているんです」

「ほう…」

「しかもきちんと開発費用分の金を口座に振り込んでいまして、さらに置き手紙まで…」

「置き手紙？」

黄金は頷くと、その手紙を影宮に見せた。

［影っちゃんのドロイド買ったよーん。ちゃんとお金は払っておいたからね～。それじゃ、バイビ～♪］

「……ハァ～」

影宮は手紙の見終わると、深い溜め息を吐いた。

「影宮局長？」

「大丈夫だ。この件については問題ないから、引き続きＡＩの開発を頼む」

「分かりました。では……」

黄金は小さく頷くとドロイド開発室を出た。

「……全く。相変わらずだな、束は…」

影宮は手紙を見ながら、書いた人物の名前を言いながらコーヒーを飲んだ。

◆夕方　寮　竜馬・箒の部屋◆

「ふぅ…」

竜馬は現在部屋に戻っていた。あれから2対1の模擬戦をしていたが、何とかこなしていた。尚、箒とセシリアは更衣室でシャワーを浴びている。

『［［一　一］］そうですか。凰殿が転入を…』

「あぁ。久しぶりに会ったよ。それに、あの事にも大分乗り越えてる様子だし……」

―コンコン！―

竜馬は鈴に関するあの事を思い出そうとすると、ノックの音に気がついた。

「はーい！」

「遊びに来たよ、竜馬！」

竜馬は扉を開けるとそこには鈴がいて、ずかずかと部屋に入ってきた。

「鈴！まだ部屋の番号教えて無いのに、どうして分かったの？」

「あたしはコレを使ったのよ。だから竜馬の居場所が分かったの」

鈴の手にはゴリラ・カンドロイドが握られていた。なお、ゴリラ・カンドロイドの能力は探しモノを探知すると反応する仕組みになっているので、竜馬は納得した。

「じゃあ、何か飲む？」

「それじゃあ、烏龍茶ある？」

「ちょっと待ってて、確認してみる」

竜馬は冷蔵庫の中身を確認するなか、鈴は竜馬のベッドに腰掛けた。すると鈴は、机にいたシベラーに気がついた。

「久しぶりね、シベラー」

『［∩　∩］お久しぶりです、凰殿』

「アンタ、相変わらず堅いわねぇ…」

鈴はシベラーと話していると、竜馬が烏龍茶を持ってやってきた。

「お待たせ。はい」

「ありがと♪」

鈴は渡された烏龍茶を飲むと、竜馬は椅子に掛けた。

「……鈴、親父さんはどうなの？」

「あ……。うん、たまに連絡はしてるよ」

「…そっか」

竜馬は烏龍茶を飲むと、鈴のあの事……鈴の両親が離婚した事を思い浮かべた。

聞いたのは中国で再会して少し経った頃だった。その頃の鈴は暗い陰を落としていたが、竜馬が積極的に鈴と一緒にいて大分明るくなった。

「そういえば、この部屋って竜馬だけなの？」

「いや、もう1人い――「ただいま」――…あ、おかえり箒」

鈴の答えを返そうとすると、箒が帰ってきた。

「ふ、凰！貴様、何故ここにいるんだ！？」

「それはこっちのセリフよ！……って、竜馬。まさかそのルームメイトって…」

鈴は箒を指差すと、竜馬は頷いた。

「うん。箒だよ」

「なな、何でよ！何でアンタが女子とルームシェアしてんのよ！」

「いや、急な事で部屋割りになったんだ。まぁ箒が同じ部屋で良かったよ」

「えっ、それって……」

竜馬の言葉を聞いて、箒は何かを期待して頬を赤くした。

「知らない子より、親友の方が断然いうしね」

「……はぁ…」

だが期待虚しく、箒は溜め息をついた。

「…箒？どうしたの」

「ふーん……親友だったら良い訳ね……」

「え？」

竜馬は鈴の方を見ると、鈴は立ち上がって箒に近づいた。

「という訳だから、部屋代わって」

「なっ！？」

「ぶっ！」

鈴の突然の発言に、箒は驚き、竜馬は烏龍茶を軽く吹いた。

「さっき言ったわよね。親友ならいいって…」

「ふざけるなっ！」

「何よ！」

箒と鈴は睨み合い、今にも取っ組み合いが始まりそうだった。

「シベラー、どうしようか……」

『［∪　∪］無理ですね。第一、竜馬殿の発言が原因ですからね』

「…まぁ、確かに……」

しばらく竜馬は傍観していると、急に鈴が竜馬を指差した。

「だったら竜馬！今度のクラス対抗戦で、あたしが勝ったら同じ部屋になりなさい！」

「はい！？」

「なっ！？」

『［；〇　o］エエッ！？』

鈴の一言で2人と1体は驚くと、箒が突っ掛かってきた。

「待て！何故そうなるんだ！？大体そんな事、私は認めないぞ！」

「なによ、アンタは竜馬が勝つと思わないの？まぁ、あたしが負ける訳ないけどね」

ふふんっと鈴は余裕をこくと、箒はその態度が気にくわなかった。

「ふん！お前のような奴に、竜馬が負ける筈がない！」

「そっ。なら文句はないわね。竜馬！対抗戦、楽しみにしてるわね！」

「あ、あぁ…」

鈴は竜馬が頷くのを確認すると、そのまま部屋を出て行った。

「……僕の意志は？」

竜馬は小さく呟くと、箒が振り向いた。

「竜馬！」

「ん？」

「絶っっっ対に勝つんだぞ！！」

「う、うん…」

箒の剣幕に、竜馬はただただ頷くしか出来なかった。

◆？？？◆

「むーん……」

同じ頃、奇妙な部屋には誰かがいた。
淀んだツリ目と、童話に出て来るような服装を着ている女性……篠ノ之　束が何やら作業をしていた。

「流石は影っちゃんだねぇ。こんなに興味を持ったのは久しぶりだねぇ…」

束は目の前に仰向けになっている人……いや、人の形をしたロボット、ヒューマン・ドロイドに手を加えており、束は楽しそうにしていた。
こんなに楽しく興味を持つのは、千冬と影宮を入れて４人しかいなかった。だが影宮の作ったドロイドは、ＩＳや他の企業が作ったドロイドとは違う何かを感じていた。

「さて……学園の方はクラス対抗戦まで後少し。束さん頑張っちゃうぞー！」

束はそう言って、作業を続けるのだった。

０７話【対抗戦と謎のＩＳと重力コンボ】（前書き）

少し修正しました

０７話【対抗戦と謎のＩＳと重力コンボ】

◆朝　生徒玄関前廊下◆

あれから翌日、掲示板の前には人だかりが出来ていた。

「何だろ？」

「あれではないのか？クラス対抗戦の…」

竜馬と箒は人を避けながら掲示板の前に来た。すると、掲示板には大きく張り出された紙があった。

「なになに？クラス対抗戦日程表……」

表には以下の通りになっている。

四回戦　三組組組
三回戦　一組組組
二回戦　四組対対
一回戦　二組対対

六組組
八組組
五組組
七組組

「なるほど…。流れが良かったら決勝戦で鈴と当たるか…」

「そうみたいだな…」

竜馬と箒は納得すると、その場から離れて行った。

「竜馬。凰の対策はあるのか？」

「対策かぁ…。中国にいた頃はまだ訓練機だったから分からないなぁ。それでも……」

竜馬は1度廊下の天井を見上げると、真っ直ぐ前に向き直った。

「全力で戦う。ただそれだけ、かな……」

「そうか…。なら、今日も特訓だな！」

「ああっ！」

竜馬は笑顔で答えた。そして、対抗戦1週間前まで訓練を行うのだった。

～数週間後～

◆放課後　廊下　第４アリーナ前◆

「竜馬、来週からいよいよクラス対抗戦が始まるぞ。アリーナは試合用の設定に調整されるから、実質特訓は今日で最後だな」

５月。あれから数週間が経ち、竜馬は更に戦闘技術が上がっていた。微かに空が橙色に染まりはじめながら、竜馬は箒とセシリアと一緒に特訓をするため第４アリーナに向かっていた。

「ＩＳの技術も、格段に上がったな」

「そうかな？自覚は無いんだけど、箒が言うならそうなんだろうな」

「まあ、わたくしが訓練に付き合っているんですもの。このくらいは当然、上がらない方が不自然というものですわ」

「ハハッ。確かに、代表候補生の意見にはいつも助かってるよ」

竜馬は立ち止まると、いきなり箒とセシリアの頭を優しく撫でた。

「お、おいっ！」

「あの、竜馬さんっ！」

２人はいきなりの事で驚くなか、竜馬は御礼を言った。

「２人には感謝しているよ。ありがとう」

「あ、あぁ……（竜馬の手つき、何だか気持ちいいなぁ……）」

箒は気持ち良くて目を細めると、同じく気持ち良くなっているセシリアが言った。

「竜馬さん、初めて撫でてくれましたわね……」

「……いや、多分2回目だと思うけど…」

「「えっ？」」

「ほら、京水さんが来た時に……」

「「京水？……っ！！」」

だが京水の名前を言われて、2人はみるみる内に血の気が引いていった。

〔私の方が、おっぱい大きいわ！！〕

〔あんたレディーに対して最大の侮辱をっ！！ムッキィィィィィィィィィィィィ！！〕

「「……」」

2人は京水（トラウマ）を思い出してしまい、ガクガクと震えてしまった。

「…だ、大丈夫？」

竜馬は頭を撫でるのを止めて、心配した

「っ！あ、あぁ……大丈夫だ…」

「……わたくしはちょっと……気分が……」

すると、セシリアは上目使いで言葉を続けた。

「でも……竜馬さんが撫でてくれるなら、大丈夫ですわ」

「そうなの？それじゃあ…」

そう言われて、竜馬はセシリアの頭を優しく撫でた。

「……むっ」

すると、それを見た箒は膨れてしまった。

「……箒」

「あっ……」

だが竜馬は箒の機嫌が悪くなったのを感じ取り、セシリアと同じように頭を撫でた。

「それじゃあ、行こうか」

しばらくして、３人は第４アリーナに向かった。

◆第４アリーナ・Ａピット◆

「待ってたわよ、竜馬！」

竜馬はドアセンサーに触れて中に入ると、腕組みをして不敵な笑みを浮かべた鈴がいた。

あれから鈴は竜馬に会いに来ることなく（廊下や学食では普通に接している）、対抗戦に向けて特訓していた。

「貴様、どうやってここに入った！」

「ここは関係者以外立入禁止ですわよ！」

箒とセシリアが顔をしかめながら言うと、鈴は「はんっ」と挑発的な笑いとともに、自信満々に言い切る。

「あたしは関係者よ。竜馬関係者。だから問題無しね」

「ほほう、どういう関係かじっくり聞きたいものだな……」

「盗っ人猛々しいとは、まさにこの事ですわね！」

鈴の発言により、箒はぴくぴくと口元が引き攣り、セシリアはキレてしまった。

「まぁまぁ…」

竜馬は2人を宥めていると、鈴が言った。

「竜馬！勝負の約束、忘れてないわよね！」

「あぁ。鈴が勝ったら一緒の部屋になるんだろ？」

「えぇ。もちろん、決勝戦まで来れなくてもあたしの勝ちよ！」

「分かった。でもね鈴、ちょっと納得出来ない所があるんだ…」

「…？何よ？」

鈴は首を傾げると竜馬は言った。

「鈴は自分が勝った事しか言ってないけど、負けたら何かしてくれるのかい？」

「……へっ？」

「こっちは負けたら同じ部屋になるけど、勝っても何も無いのは不公平だと思うんだ。だから僕が勝ったら奢って欲しい物がある！」

「なっ、何よ……」

鈴はたじろぐと、竜馬は言った。

「@クルーズの……」

（@クルーズって、美味しいパフェがある喫茶店よね。まさか、1番高いパフェを奢れって言うの！）

鈴はそう考え込むが、竜馬は以外な事を言った。

「……隣にあるウサオちゃん喫茶で販売している“ウサオちゃんスペシャル”を奢ってもらうよ」

「やっぱ……って、何？」

「ウサオちゃん…」

「喫茶？」

竜馬の発言により、3人は頭にハテナを浮かべた。

「前デパートに来た時に見つけたんだ。そこにあった“甘辛い初恋の味”ってのが気になったからね…」

「ま、まぁそれぐらいなら……」

鈴は戸惑いながら言った。

「とにかく、決勝は楽しみにしてるわ！それじゃあ！」

鈴はそう言って、Aピットを出た。

「よしっ！それじゃあ、特訓に取り掛かろうか！」

竜馬はやる気が出て、特訓に取り掛かった。

～対抗戦前日～

◆夜　竜馬・箒の部屋◆

「うーん……」

竜馬はベッドに座り込み、コアメダルを見て悩んでいた。
あれから数日経つが、竜馬は特訓を欠かせていなかった。箒には剣術を、セシリアには技術を教わっていた。

「どうしたんだ？」

箒は竜馬が気になり、机から離れて近づいた。

「ん？実は影宮さんから連絡が来てね…」

「影宮さんが？」

『［］　［］そうなんですよ』

その時、シベラーが話し掛けてきた。

『［ー　ー］マスターは明日の各試合に条件を付けたのですよ』

シベラーは影宮が送ってきたデータを紙に書いて箒に見せた。

「何々？」

条件は以下の通りだった。

？1回戦ではオーバーズのままで戦うこと。

？準決勝ではバースモードで戦うこと。

？決勝戦ではオーズモードで戦うこと。純正コンボの使用も許可。

「成る程。で、竜馬は何で悩んでいるんだ？」

「……純正コンボは何にしようか迷ってるんだ」

「純正コンボ？」

竜馬は小さく頷き、１５枚のコアメダルを並べて見せた。

「同じ系統のコアメダルを使用した姿の事を言うんだ。資料によると…各純正コンボが成立した場合エネルギーは完全回復して、オーバーズ・オーズモードの性能が上昇及び各コンボによってワンオフ・

アビリティーが発動される…らしいんだ」

「聞くだけで凄いな…」

「ただ、その能力が何なのか分からなくてね……。それで悩んでたんだ」

そう言いながら、竜馬はコアメダルをメダルホルダーに直し始めた。

「どうしたんだ？」

「もう寝ようと思ってね。明日から対抗戦だし――「ま、待て！」――…ん？」

竜馬の言葉を遮り、箒は顔を赤くして言った。

「い、今から寝間着に着替えるのだから、むこうを向いてくれ！」

「あ、あぁ…。ゴメン…」

『［∪　∪］では、ワタクシも就寝いたします。おやすみなさいませ…』

竜馬はそう言うと体の向きを変えて、シベラーは待機状態になった。

「……」

「……（むぅ……。着替えは僕がいない時にしてほしいなぁ……）」

「い、いいぞ」

竜馬は体の向きを戻すと、箒は寝間着浴衣を着用していた。だが竜馬はある事に気が付いた。

「あれ？帯が新しいね」

「よ、よく見ているな」

竜馬は新品の帯に気が付いて箒に指摘すると、箒はちょっと上機嫌に言った。

「色も模様も違ったから。それに、箒を毎日見てるしね」

「そ、そうか。私を毎日見ている……か。そうかそうか…」

「？」

竜馬は上機嫌で何度も頷いている箒を見て首を傾げた。

「よし！では眠るとしよう！」

そう言いながら箒は自分の布団に入って消灯した。

（うーん……タイミングを逃したかなぁ……）

竜馬は寝るタイミングを逃してしまったが、箒が話し掛けてきた。

「……竜馬」

「うん？」

「対抗戦、頑張れよ……」

「……ああ」

「そ、それだけだ。……で、ではなっ」

「うん。おやすみ……」

そう言って、竜馬は少しずつ睡眠へと落ちていった。

～翌日～

◆朝　第2アリーナ・Bピット◆

翌日、クラス対抗戦が始まった。現在試合は鈴と7組が行っていた。

「あれが鈴のＩＳか…」

竜馬は鈴が展開しているＩＳをリアルタイムモニターで見ながら、ハイパーセンサーで確認していた。

┳　戦闘状態ＩＳ感知。操縦者、凰　鈴音。ＩＳネーム《甲龍（シェンロン）》。戦闘タイプ近接格闘型。特殊装備有り　┻

「特殊装備か……おそらく、あの棘付き装甲（スパイク・アーマー）に何かありそうだな」

竜馬は肩の横に浮いたアンロック・ユニットを見ていたが、鈴は巨大な青龍刀《双天牙月》を使うだけで７組の代表を倒してしまった。

『試合終了。勝者、凰　鈴音』

◆ピット◆

一方、千冬達がいるピットでは試合のデータを取っていた。尚、現在２回戦の最中である。

「すごいですね、凰さんのＩＳ…」

真耶が関心してると、千冬は言った。

「だが、まだ凰は実力を出してないな…」

『［ー　ー］確かに…。おそらく竜馬殿と戦うまでは、全力でいきませんね』

「えっ…！」

真耶はいきなりの声に驚くと、パソコンのすぐ横にシベラーがいた。すると、千冬はシベラーに言った

「…何故お前がここにいる」

『[ー　ー]竜馬殿の戦闘データを取る為です。ワタクシは情報解析に長けてますので、ここにいます。勿論、申請許可は出しました』

シベラーは千冬に敬礼して言った。

「そうか…」

「あ、次は龍東くんの試合ですよ！」

真耶はモニターを見る既に2回戦が終わっており、竜馬がオーバーズを展開してステージに出て来た。

◆第４アリーナ・ステージ◆

竜馬はピット・ゲートからステージに出ると、対戦相手の８組代表と対峙した。

相手のＩＳは学園でも訓練機で使われる《ラファールリヴァイヴ》（通称リヴァイヴ）。安定した性能と高い汎用性、操縦の簡易性によって操縦者を選ばない第２世代のＩＳである。

「よろしくね、龍東くん」

「あぁ。こちらこそ」

８組のクラス代表は竜馬に挨拶すると、竜馬も返した。

『それでは両者、試合を開始して下さい』

―ビーッ！―

試合のブザーが鳴り響くと、８組代表は機関銃を竜馬に向けて連射してきた。

「なんのっ！」

だが竜馬は撃たれる前に、展開していたブースター内蔵型斧（ソニックアックス）のブースターを起動して回転させ、機関銃の弾丸を防いだ。

「いくよっ！」

竜馬は弾丸を防ぎながら加速して近づいて来ると、ソニックアックスを振り下げて機関銃を叩き落とした。

「きゃあっ！」

「まだまだ！」

さらに竜馬は振り下げた勢いで、ソニックアックスを1回転するよ

うに8組代表に叩き付けた。

―ズドォォンッ！―

「あいたたた……」

8組代表は地面に叩き付けられて仰向けになっていたが、竜馬はそれを見過ごさなかった。

「これで……終わり！」

竜馬は4連ランチャー《フォークラスターL》を展開して、ミサイルを全弾発射した。

「キャアアアア！」

8組代表の叫びと共に、リヴァイヴのシールドエネルギーがゼロになった。

『試合終了。勝者、龍東　竜馬』

◆ピット◆

「龍東くんもすごいですね。オルコットさんと戦った時より、さら

に動きが良くなってます」

「当然ですわ！わたくしが直々に教えていますからね！」

「ん？お前たちか…」

千冬は振り返ると、そこにはセシリアと箒がいた。

『［？　？］オルコット殿に篠ノ之殿。何故ここに？』

「おおかた、観客席で見るよりここで見た方が龍東がどれほど強くなったか知りたいだけだろう」

「「……」」

「図星か…」

千冬は小さくため息をすると、第４試合が開始しているモニターを見た。

～数十分後～

◆第４アリーナ・ステージ◆

あれから数十分が経ち、鈴は１回戦と同じ戦法で勝利を収めて決勝に進めていた。

（この試合はバースで行うのか……。あれを試してみるかな）

竜馬はそう考えながら、目の前にいる６組代表と対峙していた。尚、６組代表のＩＳは打鉄である。

「手加減はしないわよ！」

「大丈夫。戦うのに手加減しないのは、僕もだよ」

竜馬は言いながらセルメダルを親指で弾いて、キャッチして言った。

「…変身」

そしてベルトにセルメダルを投入すると、右手をスライドした。

―カポーン！―

音と共に竜馬は光に包まれ、オーバーズはバースに変身した。

『それでは両者、試合を開始して下さい』

―ビーッ！―

「はあああっ！」

「まずは、コレだ！」

竜馬はバースバスターを発射するが、６組代表は刀で弾丸を弾きながら竜馬に向かって行った。

「なら！」

竜馬はセルメダルを３枚ベルトに投入した。

【ＢＲＥＡＳＴ　ＣＡＮＮＯＮ】

【ＣＲＡＮＥ　ＡＲＭ】

【ＣＵＴＴＥＲ　ＷＩＮＧ】

竜馬は３つのバースＣＬＡＷｓを装備すると、背中に装着されたカッターウイングを取り外して投擲した。

「くっ！」

６組代表はカッターウイングを刀で弾いた瞬間、クレーンアームの

ワイヤーが右腕に巻き付かれた。

「円の動きで追い込む！」

竜馬はワイヤーで巻き付いた６組代表を軸にして、大きく時計回りで回りながらバースバスターを連射した。

「そこへ集中砲火！」

半分回った所でワイヤーを離した瞬間、ブレストキャノンを一定の間隔で撃ち込んだ。

「うわぁっ！」

そしてブレストキャノンのエネルギー弾は６組代表に当たり、周りは煙に包まれた。

（くっ！すぐにこの中から出ないと！）

そう考えた６組代表は煙から出るが、竜馬はそれを待っていた。

「締めは……」

そう言いながら、竜馬はバースバスターのバレルポッドを銃口に接続した。

「出て来た所に撃ち込む！」

【ＣＥＬＬ　ＢＵＲＳＴ】

そして竜馬はトリガーを引き、６組代表に直撃させた。

「キャアアアア！」

叫びと共にシールドエネルギーが無くなったが、威力が強かったのか６組代表はそのまま墜落してしまった。

「やばっ！」

それに気付いた竜馬はカッターウイングのブースターを起動させて加速し、地上に激突する前にキャッチした。

「……あれっ？」

６組代表は目を開くと、すぐそこには竜馬の横顔が見えた。

「大丈夫？ゴメンね」

「……っ！は、はい…」

竜馬は小さく笑みを零すと、６組代表は顔を赤くした。

『試合終了。勝者、龍東　竜馬』

◆ピット◆

『[∩　∩]おぉ！ＣＬＡＷｓでアサルトコンバットを再現するとは、スゴイですね篠ノ……』

「「……」」

『[；ー　ー]ウッ！』

シベラーは竜馬の戦法に関心して箒達を見ると、箒とセシリアは怒りのオーラ垂れ流しだった。

（竜馬め……。また他の女子を堕としたな！）

（またライバルが増えてしまうではありませんかっ！）

２人は怒りの視線を、モニターに映っている竜馬に送った。

「……ふぅ」

その様子を見た千冬は小さくため息をして、モニターを見直すとハーフタイムに入っていた。

～数十分後～

◆昼　第４アリーナ・ステージ◆

ハーフタイムが終わる頃、やはり噂の新入生同士の戦いとあってアリーナの客席は満員御礼。それどころか通路まで立って見ている生徒で埋め尽くされており、会場入りが出来なかった生徒や関係者は、リアルタイムモニターで鑑賞していた。
尚、ハーフタイムの時に客席を《指定席》として売っていた２年生がおり、千冬に制裁を下された事はまだ知られてなかった。

「……」

「……」

ステージでは、竜馬と鈴が試合開始の時を静かに待っていた。

『それでは両者、規定の位置まで移動して下さい』

アナウンスに促された２人は空中で向かい合った。その距離約５ｍ。
そして２人は開放回線（オープン・チャンネル）で言葉を交わしていた。

「竜馬、今ここであたしと同じ部屋になるって言うなら、少しくらい痛めつけるレベルを下げてあげるわよ」

そう言いながら、鈴は双天牙月の刃を竜馬に向けた。

「それは雀の涙くらいでしょ。いいから、久々に全力でいくよ！」

そう言いながら、ベルトにタカメダル・トラメダル・バッタメダルを転送すると、右手をスライドした。

「変身！」

【カタ！トラ！バッタ！タ・ト・バ！　タトバ　タ・ト・バ！！】

竜馬は金色の光に包まれると、オーバーズはオーズ・タトバコンボに変身した。

「ちょっ！さっきの歌は何なのよ！」

「歌は気にしないで」

「…まぁいいわ。一応言っておくけど、ＩＳの絶対防御も完璧じゃないのよ。“シールドエネルギーを突破する攻撃力があれば、本体にダメージを貫通させられる”」

「……」

竜馬は鈴の言葉を真剣に聞いていた。
鈴の言葉は本当のことだった。噂では、ＩＳ操縦者に直接ダメージを与える“ためだけ”の装備が存在するらしいが、それは競技規定違反であり、何より人命に危険が及んでしまう。
けれど、『殺さない程度にいたぶる事は可能』という現実は、変わりようがない。

『それでは両者……』

アナウンスがすると2人は構えた。そして……

『決勝戦、開始です！』

―ビーッ！―

決勝戦のブザーが鳴り響き、それが切れる瞬間に竜馬と鈴は動いた。

―ガギィンッ！！―

「くっ！」

竜馬は瞬時に展開したメダジャリバーで双天牙月の初撃を防ぐが、鈴の甲龍のパワーがオーズより高かったせいで弾き返された。

「パワーが違いすぎるな…」

「ふぅん。初撃を防ぐなんてやるじゃない」

「そりゃどうも」

そう言いながら、竜馬はトラメダルからウナギメダルに変えて右手をスライドした。

【タカ！ウナギ！バッタ！】

「いくぞっ！」

竜馬はウナギアームにエネルギーを送り込むとメダジャリバーが青い電撃を纏い、その状態で鈴に仕掛けて行った。

―ガギィィィンッ！―

「くっ！パワーが上がった！」

メダジャリバーのパワーが上がっているのを感じた鈴は、双天牙月をバトンでも扱うように回して自在に角度を変えながら斬り込むが、竜馬もメダジャリバーを自在に扱い刃を捌いていった。

（一旦離れるか…）

竜馬は考えながら捌くと、一瞬の隙をついて双天牙月の刃身を踏み付けてショートバーニア・ブーストを起動した。

「きゃっ！」

鈴は弾かれるが、三次元躍動旋回（クロス・グリッド・ターン）をこなして竜馬を正面に捉えた。

「なかなかやるわね……。でも、甘いわっ！！」

そう言うと、甲龍の肩アーマーがばかっとスライドして開いた。

「ん？……！」

中心の球体が光る瞬間、竜馬は何かを感じ取りメダジャリバーで防御体勢を取った時、目に見えない衝撃に殴り飛ばされた。

「くっ！」

「今のはジャブだからね」

鈴はニヤリと不敵な笑みを浮かべると、また球体が光った。

「まさか…！」

竜馬はヘッドギアとスラスターにエネルギーを送り込んでホークアイを起動させた。そこから見ると、肩アーマー部分の空間に歪みが生じていた。

「喰らいなさいっ！」

そう言った鈴は何かを発射した。しかし……

「見える！」

竜馬はその何かを見破り、ショートバーニア・ブーストを駆使して多角移動で回避して地表に着地した。

「うそ！まさか《衝撃砲》が見破られるなんて…」

鈴は驚きを隠せなかった。

「完成してたのか……衝撃砲…」

◆ピット◆

「なんだあれは…？」

ピットからリアルタイムモニターを見ていた箒が呟く。それに答えたのはシベラーだった。

『［ー　ー］衝撃砲ですね。空間自体に圧力を掛けて砲身を生成、余剰で生じる衝撃自体を砲弾として撃ち出す第3世代型兵器…。近接戦闘メインのオーズでは、少々分が悪いですね』

シベラーはデータを取りながら話していたが、もう箒は聞いてはいなかった。モニターには回避に専念している竜馬が映し出されていた。

（竜馬……）

セシリアの時よりも激しい戦闘を目の当たりにして、箒は勝利よりもただただ無事を願っていた。

◆第４アリーナ・ステージ◆

「よくかわすじゃない！衝撃砲《龍咆》は砲身も砲弾も目に見えないのが特徴なのに！」

「まあね！こっちは良い眼があるから、そんな砲弾に当たらないよ！」

２人は話し掛けながら攻防を繰り返していた。鈴が衝撃砲を撃つ度に竜馬は回避し、隙をみて電気ウナギウィップで攻撃を仕掛けるが、鈴は双天牙月でそれを弾き返す繰り返しだった。

（流石に長期戦になるのはヤバイな……。だったら！）

あることを思い付いた竜馬は、回避しながらタカメダルをサイメダルに変更して右手をスライドした。

【サイ！ウナギ！バッタ！】

だがタカヘッドからサイヘッドに変えた事で、ホークアイが無効に

なってしまった。

「鈴」

「なによ？」

鈴は竜馬に呼ばれると攻撃を止めると、竜馬は真剣に鈴を見つめて言った。

「本気で行くよ」

「来なさい。返り討ちよ！」

そう言った鈴はバトンのように双天牙月を構え直すと、肩アーマーがスライドして中心の球体が見えた。

「そこだ！」

「えっ！？」

だが竜馬は電気ウナギウィップを鈴ではなく、甲龍の肩アーマーに巻き付いて強制的に閉じさせた。

「しまっ――「うおおおおっ！」――…っ！」

鈴は動揺していると竜馬の叫びが聞こえた。すると竜馬は電気ウナギウィップを引き、最大出力のショートバーニア・ブーストによって頭から鈴に突っ込んできた。

―ドゴォンッ！―

だが鈴は間一髪、双天牙月でグラビドホーンによる頭突きを防ぐが大きく弾き飛ばされ、双天牙月が大きく刃毀れした。

（やばい！）

鈴は心の中で思うと、竜馬はもう1度仕掛けた。

「これで、どうだぁぁ！」

竜馬は鈴に再度電気ウナギウィップを巻き付かそうと思った…次の瞬間！

―ズドオオォォンッ！！！―

「「！？」」

突然大きな衝撃がアリーナ全体に走った。

「な、何だ！？」

竜馬はステージ中央を見ると、そこからもくもくと煙が上がっていた。どうやら、さっきの衝撃は“それ”がアリーナの遮断シールドを貫通して入ってきたようだ。

「うっ……」

竜馬は先程の衝撃と立ち上る煙を見て、ある出来事と重なって見えた。まるで、あの時巻き込まれたテロのように……

（くそっ…収まれ…収まってくれ…！）

竜馬は身体が震えてしまい、右手で強く左腕を掴んだ。

『竜馬！』

「っ！？」

突然、鈴からプライベート・チャンネルが送られると竜馬は震えが収まった。

『竜馬、試合は中止よ！すぐにピットに戻って！』

鈴が言い出すと、オーバーズのハイパーセンサーが緊急通告を行ってきた。

┳ ステージ中央に熱源。所属不明のＩＳと断定。ロックされています ┻

「なっ――「竜馬、早く！」――…鈴っ！」

すると、竜馬と所属不明ＩＳの間に鈴が割り込んだ。

「あたしが時間を稼ぐから、その間に逃げなさいよ！」

「逃げるって……親友を置いてそんなこと出来ないよ！」

「馬鹿！さっきあんなに震えてたでしょ！アンタこの場面を見て、あの事を思い出したんでしょ！」

竜馬の言葉に、鈴は思いっきり言った。尚、鈴は竜馬に昔の事を聞いているので知っていたのだ。

「別に、あたしも最後までやり合うつもりはないわよ。こんな異常事態、すぐに学園の先生達がやってきて――「危ないっ！！」――…っ！」

竜馬は間一髪、鈴の体を抱き抱えて掠った。その直後に、先程鈴がいた空間が熱線で砲撃された。

「ビーム兵器……。しかもセシリアのＩＳより出力が高いな」

竜馬はハイパーセンサーの簡易解析で熱量を知ると、背中に冷たいものが伝わった。

「ちょっ、ちょっと、馬鹿！離しなさいよ！」

「お、落ち着いて――「う、うるさいうるさいうるさいっ！」――…ちょっ、殴らないでって！」

流石にシールドエネルギーで守られているが、鈴はパンチを連射砲の如く竜馬の顔に放っていた。

「だ、大体どこ触って――「来るよ！」――…っ！」

竜馬は鈴の言葉を遮るとビームを回避した。だがビームは煙を晴ら

すかのように連射されると、その射手たるＩＳがふわりと浮かび上がってきた。

「なんなんだ、こいつ……」

竜馬達はそのＩＳを見て驚いた。

姿から異形だった。深い灰色をしたそのＩＳは、手が異常に長くて爪先よりも下まで伸びており、人間の胴程の巨大な拳を持っていた。しかも首というものが無く、肩と頭が一体化しているような形をしていた。そして何より特異なのが、肌を１ｍｍも露出していない“全身装甲（フル・スキン）”だった。

（デカイな…）

竜馬は所属不明ＩＳを見て、その巨大な姿に驚いた。

腕を入れると２ｍを超える巨体は、姿勢維持のためか全身にスラスター口が見て取れ、頭部には剥き出しのセンサーレンズが不規則に並び、腕には先程のビーム砲口が左右合計４つあった。

「……何者なんだ、あなたは」

「……」

竜馬の呼びかけに、所属不明ＩＳは答えなかった。

『龍東くん！凰さん！』

すると、真耶がプライベート・チャンネルで話してきた。心なしか、いつもより声に威厳があった。

『今すぐアリーナから脱出して下さい！すぐに先生達がＩＳで制圧に――「いや、先生達が来るまで僕達で食い止めます」――…えっ！！り、龍東くん！？』

竜馬の発言に、真耶は驚いた。

「あのＩＳは遮断シールドをも突破するパワーがあります。今ここで誰かが食い止めないと、観客席にいる人達に被害が及ぶ可能性があります。シベラー！」

『はいっ！』

「今から所属不明ＩＳのデータを取るから、解析を頼むよ」

『御意！』

「いいかい、鈴」

「だ、誰に言ってんのよ。そ、それより離しなさいってば！動けないじゃない！」

「あぁ、ゴメン」

竜馬が腕を放すと、鈴は頬を赤くして自分の体を抱くような格好で離れた。

『龍東くん！？だ、ダメですよ！生徒さんにもしもの事があったら――――』

竜馬は真耶の言葉をそこまで聞くと、敵ＩＳが体を傾けて突進して

きた。

「くっ！」

だが竜馬はそれを回避すると、鈴と横並びになった。

「ふん、向こうはヤル気満々みたいね」

「みたいだね」

竜馬はウナギメダルをゴリラメダルに、サイメダルをタカメダルに変更すると右手をスライドした。

【タカ！ゴリラ！バッタ！】

頭部と腕部の装甲を変更すると、竜馬はホークアイを起動して敵ＩＳを見つめた。

「竜馬、あたしが衝撃砲で援護するから突っ込みなさいよ。アンタの武器、近接戦闘がメインみたいだしね」

「まあね。それじゃあ……」

竜馬はゴリバゴーンを、鈴は双天牙月の切っ先をキンッと当てると竜馬は言った。

「敵ＩＳの信号を《ジェントルハーツ》と固定！行くよ、鈴！」

「わかったわ！」

そして2人は即席コンビネーションで飛び出した。

◆ピット◆

「もしもし！？龍東くん聞いてます！？凰さんも！聞いてますー！？」

「本人達がやると言っているのだから、やらせてみても良いだろう」

「お、お、織斑先生！何を暢気な事を言ってるんですか！？」

「落ち着け。コーヒーでも飲め。糖分が足りないからイライラするんだ」

千冬はコーヒーに砂糖を入れてもう1度スプーンで掬うと、真耶はある事に気が付いた。

「……あの、先生。それ塩ですけど……」

「……」

真耶に指摘された千冬は、ぴたりとコーヒーに運んでいたスプーンを止め、白い粒子を大きく塩と書かれた容器に戻した。

「あっ！やっぱり龍東くん達の事が心配なんですね！？だからそんなミスを……」

「……」

……イヤな沈黙だった。何かまずい事が起きる気がして、真耶は話を逸らそうと試みた。

「あ、あのですねっ――「山田先生、コーヒーをどうぞ」――…へ？あ、あの、それ塩が入ってるやつじゃ……」

「どうぞ」

だが真耶の努力虚しく、千冬はずずいっとコーヒー（微塩）を押し付け、真耶は涙目で受け取った。

「い、いただきます……」

「熱いので一気に飲むと良い」

（…あ、悪魔だ）

真耶は心の中でそう呟くと、セシリアが千冬に話し掛けた。

「先生！わたくしにＩＳ使用許可を！すぐに出撃できますわ！」

「そうしたいところだが……」

そう言いながら、千冬はブック型端末の画面を数回叩いて表示される情報を切り替えた。

「これを見ろ」

千冬はそれをセシリアに見せた。画面に表示されているのは、この第４アリーナのステータスチェックだった。

「遮断シールドがレベル４に設定……？しかも、扉が全てロックされて……あのＩＳの仕業ですの！？」

「そのようだ。これでは避難する事も救援に向かうことも出来ないな」

実に落ち着いた調子で話す千冬だったが、よく見るとその手は苛立ちを抑えきれないばかりに忙しなく画面を叩いている。

「で、でしたら！緊急事態として政府に助勢を――「やっている。現在も３年の精鋭がシステムクラックを実行中だ。遮断シールドを解除出来れば、すぐに部隊を突入させる」――…っ」

千冬は言葉を続けるが、益々募る苛立ちに眉がぴくっと動いた。すると、画面に解析中と表示しているシベラーが話し掛けた。

『［解析中］ワタクシも敵ＩＳの解析とロック解除を進行中なのですが、なにぶんこの身体では満足に力を発揮できませんねぇ……』

それを聞いたセシリアは、頭を押さえながらベンチに座った。

「はぁぁ……。結局、待っている事しか出来ないのですね……」

「何、どちらにしてもお前は突入隊に入れないから安心しろ」

「な、なんですって！？」

セシリアは怒りながらベンチを立った。

「お前のＩＳは１対多向きだ。多対１では寧ろ邪魔になる」

「そんな事ありませんわ！このわたくしが邪魔だなどと――「では連携訓練はしたか？その時のお前の役割は？ビットをどういう風に使う？味方の構成は？敵はどのレベルを想定してある？連続稼動時間――」――…わ、分かりました！もう結構です！」

するとセシリアは、千冬の指導を両手を揺らして止めた。

「ふん。分かれば良い」

「はぁ……。言い返せない自分が悔しいで……あら？」

先程よりも深い溜め息をしたセシリアはベンチに座ろうとしたが、あることに気がついた。

「あら？箒さんはどこへ……」

キョロキョロと周囲を見回すセシリアとは対照的に、千冬だけはさっきまでと違う異様に鋭い視線をしていた。しかし、現時点ではそれに誰も気がつかなかった。

◆第４アリーナ・ステージ◆

「うおおぉぉぉっ！」

その頃、竜馬はゴリラアームによる連続攻撃を行っているが、ジェントルハーツはそれをするりと避けていた。

「竜馬！」

鈴は竜馬に言うと衝撃砲を撃ち込むが、ジェントルハーツは全身に付けたスラスターを駆使して一気に回避行動を行った。

（エネルギー残量８０を切ったか…。鈴との対戦でメダルを変えすぎたな）

「竜馬っ、離脱！」

「ああっ！」

ジェントルハーツは回避後、でたらめに長い腕を振り回して接近してきた。

「あああもうっ、めんどくさいわねコイツ！」
鈴は焦れたように衝撃砲を展開し、砲撃を行った。だがジェントルハーツの腕はその見えない衝撃を叩き落とした。
「……鈴、後エネルギーは殿くらい残ってる？」
「１８０ってところね」
鈴もだいぶ削られているが、それでも竜馬よりはマシだった。甲龍は燃費と安定性を第一に考えて作られているので、エネルギーの減りは少ないのだ。
「ちょっと、厳しいわね……。現在の火力でアイツのシールドを突破して機能停止させるのは確率的に一桁台ってとこじゃない？」
「ゼロじゃなきゃいいよ」
竜馬の言葉に、鈴は呆れて言った。
「あっきれた。確率はデカイ程いいに決まってるじゃない。アンタって、宝くじ買うタイプ？」
「それを買うんだったら、@クルーズのパフェを買うよ」
「あっそ。……で、どうすんの？」
「逃げたかったら逃げてもいいよ」

「なっ！？」

竜馬の発言に、鈴は怒鳴るように言った。

「馬鹿にしないでくれる！？あたしはこれでも代表候補生よ。それが尻尾巻いて退散なんて、笑い話にもならないわ！」

「分かった。じゃあ、鈴の背中くらいは守ってみせるよ」

「え？あ。う、うん……。ありが――」

鈴は頬を赤くした瞬間、横をビームが掠めた。

「ちっ！厄介だな…（しかしあのＩＳ、こっちが会話してる時はあまり攻撃してこないな……。興味でも持っているのか？それに行動が機械じみて――）」

『竜馬殿！』

竜馬が考えていると、シベラーからプライベート・チャンネルで連絡してきた。

「何だい！」

『敵ＩＳの解析が完了しました。今からデータを送ります』

送られたデータを見ると、竜馬は驚くと同時に納得した。

「…なるほど。これで合点がいった！」

「竜馬、どうしたの？」

「鈴。敵の正体が分かった」

「ホントに！」

鈴が驚くなか、竜馬は話し続けた。

「ホークアイから見た記録をシベラーに解析してもらった結果、あのＩＳ……ジェントルハーツは……、ドロイドが操縦している事が分かった！」

「えぇっ！？そんな、あり得ない。“ＩＳは人が乗らないと絶対に動かない”のに……」

鈴は真剣にジェントルハーツを見つめた。

そう……ＩＳは人が乗らないと絶対に動かないと、教科書に載っている。だが、今最先端の研究でそれが不可能かどうかは分からない。その事を黙れば、誰も知る事も無いのだから…。

「竜馬」

「ん？」

「どうしたらいい？」

竜馬と鈴は目が合った。鈴は竜馬が何か策を持っていると悟り、竜馬は鈴がそのサポートをしてくれると悟った。

「ジェントルハーツが飛び上がるのを衝撃砲で防いでほしい」

「当てなくていいの？」

「当てなくてもいいんだ。地上にいれば、こっちの勝ちだ」

すると竜馬はベルトのメダルを全て変更しようとしたその時、アリーナのスピーカーから大声が響いた。

「竜馬ぁっ！」

―キィーン……―

「っ！ほ、箒っ！」

竜馬は発声源を探ると、Bピット・ゲートにはマイクを持った箒が立っていた。さらに数十倍に拡大して箒を見ると、はぁはぁと肩で息をして、怒っているような焦っているような不思議な様相をしていた。

「男なら……男なら、そのくらいの敵に勝てなくてなんとする！」

「……」

ジェントルハーツは興味を持ったのか、竜馬たちからセンサーレンズをそらしてじっと箒の方を見た。

「まずい！！」

それに気付いた竜馬は、バッタメダルをチーターメダルに変更して移動しながら右手をスライドした。

【タカ！ゴリラ！チーター！】

チーターレッグに変更した瞬間、ジェントルハーツは左腕のビーム砲口を箒に向けて撃ってきた。

「っ！？」

「箒ぃっ！！」

「竜馬っ！？」

竜馬は鈴の言葉を聞かず、チーターレッグを最大速度で加速して箒の前に割り込んだ。

―ズドォォォン！―

「……っ！竜馬っ！？」

「くっ…、今のは…効いたね……」

竜馬はなんとかビームをゴリバゴーンで防いだが、腕部の装甲は焦げる他、エネルギーが一桁になってしまった。

「大丈夫かい……箒」

竜馬は箒を見て優しく微笑みながら言うと、箒は小さく頷いた。

「そうか……」

そして竜馬は再びジェントルハーツに向くと、先程の表情と違い、怒りをあらわにして言った。

「許さない…。僕は、あんたを許さない！！」

そして竜馬はタカメダルをサイメダル、チーターメダルをゾウメダルに変更して右手をスライドした。すると、亜種コンボとは違って銀色の光りに包まれると、タトバコンボの時と同じような不思議な歌が聞こえた。

【サイ！ゴリラ！ゾウ！…サッゴーゾ……サッゴーゾ！！】

光りが収まると、竜馬の口には白銀のマスクをしており、サイヘッド・ゴリラアーム・ゾウレッグの装甲を纏った姿を現して地上に降り立った。

そしてハイパーセンサーには、《サゴーゾコンボ》の成立を表示していた。

「……」

ジェントルハーツは再び竜馬に興味を示しビームを撃ってきた。

「「竜馬っ！？」」

箒と鈴は叫ぶが、竜馬は１歩も動かなかった。そして誰もがビームの直撃を逃れないと思った、その時だった。

「…えっ？」

「ビームが…曲がった！？」

箒は不思議がり、鈴は目の前ので起こった出来事に驚いた。竜馬の約２ｍ手前で、ビームが曲がったのだ。

「…ッ！ウオオオオオォォォォ！！」

すると竜馬は物凄い雄叫びを発すると、その振動でステージ全体を揺るがした。

「ウオオオォォォォッ！ウオォォォォッ！ウォッ！ウォッ！ウオオオオォォォォッ！」

そして竜馬はゴリラ特有のドラミングをジェントルハーツに見せながらした。

―ドドド

のハイパーセンサーから緊急通告を行っていた。

┳ ジェントルハーツ周辺の空間に異常発生。至急退避して下さい ┻

「退避って……えぇっ！？」

鈴は退避しながらジェントルハーツに目を向けると驚いた。
その周辺の地盤は砕けて浮かび上がり、ジェントルハーツ自体も身動き取れないようにジタバタするだけで、竜馬のドラミングによる振動に成すすべが無かった。
そう……これがサゴーゾコンボの能力。
周囲の重力場を自在に操って相手のＰＩＣをも無効化にし、特定の対象の周囲を高重力・無重力にしてしまうワンオフ・アビリティー……《Ｓｕｎ　ｇｏｅｓ　ｕｐ》である。

―ドガガガンッ！―

竜馬はドラミングを止めると、ジェントルハーツと砕けた地盤は地表に叩き付けられた。

「まだだっ！」

竜馬は高くジャンプしてジェントルハーツを踏み潰そうとすると、ジェントルハーツは右拳を叩き付けようとした。

―グシャアッ！―

だがサゴーゾコンボになった事で、オーズ自身を高重量に変えてズオーストンプの威力が上がり、ジェントルハーツの右拳を完全に破壊した。

「おらぁっ！！」

―ドガァン！―

そしてゴリラアームの一撃でジェントルハーツを約１０ｍ殴り飛ばした。

「鈴っ！」

「オッケー！！」

鈴は竜馬に呼ばれると、すぐさまジェントルハーツに衝撃砲を連射して飛び立たせないようにした。それを見た竜馬はベルトにエネルギーを送り込むと、右手をスライドした。

【ＳＣＡＮＮＩＮＧ　ＣＨＡＲＧＥ！】

「はぁっ！！」

音声が発したその瞬間、竜馬はその場で跳躍した。

―ズドォォォォンッ！―

着地と共に銀色の波紋状のリングが発生してジェントルハーツに触れた瞬間、ジェントルハーツは地面に減り込みながら竜馬に引き寄せられていた。

「ハァァァァ……！」

竜馬はエネルギーをグラビドホーンに送り込むと、それは輝き出してエネルギー状の角が形成された。そしてジェントルハーツが手前１mのところで、エネルギー状の角を突き出した。

「セイヤアァァァッ！」

さらに竜馬は叫びながらその角を両拳で叩き込んだ、次の瞬間！

―ドォォォ……ン”ッ！―

「「きゃっ！」」

角が砕け散り、そこから凄まじい衝撃波が生み出された。
そして至近距離にいたジェントルハーツはその衝撃で吹っ飛ばされると同時に、左拳が吹き飛び装甲が半分以上も剥がされ、全身装甲の中身を見せながら仰向けで地面に叩き付けられた。
これがサゴーゾコンボの必殺技、《サゴーゾインパクト》である。

「ハァッ、ハァッ…」

竜馬は荒く息をしていると、ボロボロだった地面が元に戻っていった。

「……やったの？」

「……まだだっ！」

鈴と箒はジェントルハーツを見た数秒後、微かだがジェントルハーツは動いて立ち上がろうとしていた。

「「竜馬っ！」」

2人は叫ぶと、竜馬は上を見上げて言った。

「……狙いは？」

『完璧ですわ！』

―キュインッ！―

刹那、上空から4つの光りがジェントルハーツを貫いた。その光り……ブルー・ティアーズの4機同時狙撃による攻撃だった。

―ボンッ！―

ジェントルハーツの身体から小さな爆発が起こり、再度仰向けで倒れてしまった。

「アンタ、どうやって入って来たのよ？」

鈴はセシリアに言うと、セシリアは高度を下げながら近付いていった。

「竜馬さんが敵ＩＳの右手を破壊した時に、箒さんとは反対側のピットから出て来ましたわ」

そして２人は一緒に竜馬の所へと行った。

「ナイスタイミングだよセシリア。君ならやれると思ってたよ」

竜馬はぐっと親指を立てながら笑顔で答えると、セシリアは頬を赤くして言った。

「そ、そうですの……。とっ、当然ですわね！何せわたくしはセシリア・オルコット。イギリス代表候補生なのですから！」

「ハハッ…。鈴もナイスフォローだったよ」

「何よ、その“も”って！あたしはついでなの！」

竜馬の発言に、鈴は頬を膨らませた。

「ごめんごめん……」

竜馬は鈴の機嫌を治すように頭を撫でようとした、その時だった。

―グラリッ―

「……っ！」

竜馬は突然の目眩に襲われるとオーバーズが強制的に解除され、竜馬は倒れてしまった。

「ちょっ！竜馬っ！」

「しっかりして下さい！竜馬さんっ！」

2人は気を失った竜馬を箒がいるピットに運ぶと、箒も気が動転するような取り乱しっぷりだった。

◆夕方　保健室◆

「……う……？」

あれから気を失った竜馬は、保健室のベッドの上で目を覚ました。

「気がついたか」

「……影宮さん？」

竜馬は体を起こすと、ベッドの横には影宮がいた。

「学園から連絡を貰ってな。千冬さんとシベラーから話しを聞いてるぞ」

「……気を失ってたみたいです」

「しかたないさ。純正コンボを初めて使ったんだ。あれらは強力な分、精神を一気に使うから多様するなよ…」

影宮は言い終わると、竜馬の頭をくしゃくしゃと撫でた。

「…無事でよかった。お前の関わる人もその手で守れて、良かったな」

「影宮さん」

「ん？」

「……心配かけて、すみません」

「……ふっ」

影宮は竜馬の言葉にキョトンとした後、小さく微笑んだ。

「んじゃ、俺は千冬さんに呼ばれてるから行くぜ。少し休んだら部屋に戻るんだぞ」

そう言って影宮は保健室から出て行った。

「あー、ゴホンゴホン！」

すると影宮との入れ違いに誰かが入ってきたが、竜馬は誰か分かっていた。

「…箒」

―ジャッ！―

箒は半分だけ開いていたカーテンを両手で開けた。

「やあ、箒」

「う、うむ…」

すると箒は腕組みをして言った。

「あ、あのだなっ。今日の戦いだがっ」

「ん？そういえば試合はどうなったの？やっぱり無効試合かな？」

「あ、あぁ…。あんな事が起きては当然だな」

「そうかぁ……」

竜馬は小さく溜め息をすると、箒が話し掛けてきた。

「……竜馬」

「何？……っ！」

竜馬はいきなりの事で驚いた。話し掛けた直後、箒が竜馬に抱き着いたのだ。

「え、えっと、箒さん？」

「…ありがとう。守ってくれて」

「え……。……うん」

箒はそれだけ言うと竜馬から離れた。竜馬は箒を見ると、恥ずかしいあまり顔を真っ赤にしていた。

「で、ではな！」

そして箒は逃げるような早足で保健室を出て行った。竜馬は見送ると急に眠気が来て眠りに落ちていった。

〜十数分後〜

「……」

（……ん？）

竜馬は寝ていると、右頬に何かが触れたのを感じた。

「竜馬……」

竜馬は名前を呼ばれると目を開けた。すると顔の間近に鈴の顔があった。

「鈴？」

「っ！？」

いきなり目を開けた竜馬を見て、鈴は頬を赤くしながら驚いた。

「……何してんの？」

「おっ、お、おっ、起きてたの！？」

「いや、呼ばれたから起きたんだよ。で、何か焦ってるみたいだけど、どうしたの？」

「あ、焦ってないわよ！勝手な事言わないでよ、馬鹿！」

「馬鹿はヒドイなぁ…」

竜馬は人差し指で右頬を掻きながら言うと、鈴は「ふんっ」と言いながらベッド脇の椅子に腰掛けた。

「……あ」

「な、なに？」

「勝負の決着ってどうする？試合も無効になったし…」

「その事なら、別にもういいわよ。あたしは我慢するわ」

「そっか……。あ」

竜馬は何かを閃くと鈴に話し出した。

「ねぇ、鈴」

「ん、なに？」

「次の日曜、僕が言った喫茶店に行こうか」

その言葉に、鈴は表情をぱあっと明るくした。

「え！？それって、そのデー――」

―バーンッ！―

だが鈴の言葉を遮るかのように保健室のドアが思いっきり開け放たれると、セシリアがつかつかと入ってきた。

「竜馬さん、具合はいかがですか？わたくしが看護に来て――あら？」

セシリアはベッドの傍らにいる鈴を見つけると、その場で止まってしまった。

「どうして貴女が……？竜馬さんは1組の人間、2組の人にお見舞いされる筋合いはなくってよ」

「何言ってんの？あたしは親友だからいいに決まってるでしょ。あんたこそただの他人じゃん」

「わたくしだって親友ですわ！それに、今は竜馬さんの“特別”コーチでしてよ！代表候補生ですし…」

「じゃあ明日からあたしが特別コーチになったげる。代表候補生だし」

「そ、そんなのダメですわ！」

「……はぁ」

鈴とセシリアが言い争いを始めると、竜馬はぽつんとため息を落と

した。

◆学園　地下研究室◆

学園の地下５０ｍ。そこにはレベル４権限を持つ関係者しか入れない隠された部屋に千冬と真耶がいた。
機能停止したジェントルハーツはすぐさまそこへと運び込まれ、シベラーと共にさらに詳しく調べていた。

「…来たか」

ドアが開くと、影宮が入ってきた。

「これがＩＳを動かしたドロイドか……」

影宮はジェントルハーツをまじまじと見ていると、千冬が質問をした。

「これは、お前が作ったのか？」

「外部装甲は確かに俺が開発してる物だが……内部システムは弄られてるな」

言い終わると、影宮はフッと小さく笑った。

（まさかドロイドにＩＳを操縦させるなんてな。……相変わらず凄いな、束……。まっ、俺の方が早いけどな…）

影宮は同い年の天才を思い浮かんでいると、真耶が千冬に話し掛けた。

「龍東くんの最後の攻撃で機能中枢が完全に破壊されていました。修復も、恐らく無理かと…」

「コアはどうだった？」

「……それが、登録されていないコアでした」

「そうか。……やはりな」

どこか確信じみた発言をする千冬に、真耶は怪訝そうな顔をして言った。

「何か心当たりがあるんですか？」

「いや、無い。今はまだ――な」

そう言って千冬はディスプレイの映像に視線を戻すと、それは教師の顔ではなく、戦士の顔に近かった。

かつて世界最高位の座にあった、伝説の操縦者。その現役時代を思わせる鋭い瞳は、ただただ映像を見つめ続けていた。

短編1話【甘辛なS／おきがえちゅうヨ♪】（前書き）

普段より短めです。

短編1話【甘辛なS／おきがえちゅうヨ♪】

◆昼　デパート◆

「鈴、ここだよ」

対抗戦が終わった週の日曜、竜馬は鈴と一緒にデパートへとやって来た。

「……」

だが今の鈴は頗る機嫌が悪かった。その理由はただ一つ……。

「ほぅ、ここがそうか」

「外装は、まあまあですわね」

（何でこの2人も来てるのよ！）

そう、竜馬の後ろに箒とセシリアがいたせいだ。

2人と出会ったのは“偶然？”にもバス停で、竜馬がここに来た理由を言うと“偶然？”2人も竜馬と同じ用件で来たらしい。

（絶対わざとね……。せっかく竜馬とふたりっきりのデートなのに！）

「…鈴、どうかした？」

「なっ、何でもないわよっ！」

「そうかい？じゃあ、入ろうか」
そして４人はウサオちゃん喫茶へと入って行った。

◆ウサオちゃん喫茶◆

「何だかこの店……、おかしいな」
「妙な雰囲気ですわね……」
喫茶店に入ると、箒とセシリアは店内の異様な雰囲気に違和感を持った。
店員の服装は統一されず、様々なコスチュームを身に纏っていた。
「……コスプレ喫茶なの？」
「そうみたいだね…」
竜馬は鈴の言葉を肯定すると、前から誰か歩いて来た。
「あら、可愛いお客さん達ね」

「ん？」

「「「げっ！」」」

竜馬達は声を掛けられると、竜馬以外の３人は顔を引き攣りながら驚いた

その声の主は普通のエプロン姿の男の店員だったが、筋肉の塊のような体つきで綺麗に化粧をした店員だった。よく見ると、エプロンに付いている名札に店長と書かれている。

「いらっしゃ～い♪ヒカリちゃ～ん、４名様を３番テーブルにご案内してぇ」

「は～い♪」

（（（（うわぁ……））））

店長は店員を呼び出したが、その店員は男なのにセーラー服を着ており、竜馬達は心の中で引いていた。

「は～い。じゃあ、こちらにどうぞぉ♪」

４人はテーブルに案内されると椅子に座り、店員はメニューを置いて行ってしまった。ちなみに竜馬の隣は鈴、向かいは箒、箒の隣はセシリアである。

「それじゃ、ごゆっくり～♪」

そして店長も仕事に戻り、竜馬達はメニューを見た。

「メニューも豊富だな」

箒はメニューを見て言った。この店の定番はパフェだが、アイスやケーキ、和風のスイーツもあった。

「決めた！あたし、イチゴのスペシャルムースパフェ」

「私は季節のフルーツあんみつにしよう」

「わたくしはチーズタルトにしますわ」

「僕はウサオちゃんスペシャルで……、店員さん。よろしくお願いします」

「分かりました～☆」

店員はメニューを聞くと、奥の厨房へと行ってしまった。

（う～ん……。いろんなコスチュームがあるけど圧倒的にモデルがねぇ…。竜馬が着ればましだけど……）

（まったく……、男が女の服を着るなど破廉恥な……。だが、竜馬なら……っ！な、何を考えているんだ！）

（早くこんなお店に出て、竜馬さんとまたショッピングに行きたいですわ……）

（ウサオちゃんスペシャル……。どんな物なんだろう……）

それぞれが考えていると、店長が直々に頼んだメニューを持って来たようだ。

「はい、ど～ぞ♪」

「「「…うっ」」」

「こ、これは……っ！」

竜馬達の前に置かれるスイーツ。だが3人は1個のパフェを見て若干引き竜馬は驚くと、店長が話し掛けてきた。

「うふ♪かわいいボーヤには、特別さ・あ・び・す♪アンコとプリンとチョコとキャラメルとバナナとキムチの、た～っぷり詰まった甘辛い初恋の味。ウサオちゃんスペシャル☆召し上がって♪」

（（（……キムチ？））））

竜馬以外の3人は最後のキムチに疑問を持つと、竜馬はスプーンを手に持った。

「（はっ、初恋の味か……）い、いただきます…」

「「「いただきます」」」

竜馬に続いて3人もそれぞれのメニューを食べた。

「おいしいわね、このパフェ」

「うむ。アンコの甘さとフルーツが合ってるな」

「このチーズタルトも、なかなかですわ」
「う……、この甘〜い味にピリリとキムチが効いて……」
それぞれの言葉を聞いた店長は良い笑顔で話し掛けた。
「ありがとう♪アタシはこの喫茶店の店長のユキエよ♪よろしくネ♪」
ユキエはそう言いながら竜馬を見た。
「隠し味のキムチが、パフェの甘さを引き立てて――「ねぇ、ぼく」――…はい？」
するとユキエは、竜馬の肩に手を置いて話し掛けてきた。
「食べ終わったらさ、ちょっと来てくんない？」
「何ですか？（何か嫌な予感がするのは……気のせいかな？）」
「すぐ終わるからっ…ね？ね？」
「はぁ……」
「ホント！やったわぁ♪」
竜馬は返事をすると、ユキエは喜びながらその場で跳ねた。
「じゃ、待ってるからね〜♪」

ユキエはそう言いながら離れると、奥の花柄の扉に入っていった。

〜数分後〜

「「「「ごちそうさま」」」」

4人は食べ終わると、鈴が竜馬に話し掛けた。

「さて。竜馬、行きなさいよ」

「あぁ。じゃあ――「ちょっと待て！」――…箒？」

竜馬は立ち上がると、箒が立ち上がって話し掛けた。

「その……あれだ。竜馬だけでは不安だから、私もついて行こう」

「「なっ！」」

箒の言葉に鈴とセシリアは驚くと、同じように立ち上がった。

「た、確かに。あの店長は何かありそうですから、わたくしもご一

緒いたしますわ」

「ま、分からない事も無いわね。あたしも一緒に行ってあげるから、早く行くわよ」

「結局みんなで行くんだ…」

そして４人は奥に行くと、花柄の扉をノックしてから入って行った。

◆衣装室◆

「うわぁー…。物凄い量の衣装ね……」

４人は部屋に入ると大量の衣装がハンガーに掛けてあった。

「あら？みんな来ちゃったのね」

すると奥からユキエがやってきたが、その手にはかわいらしいドレスを持っていた。

「あの……その手に持っているのは？」

セシリアは質問すると、ユキエは竜馬に近づいていった。

「ぼく、かわいいじゃなーい♪ちょっとコレ、着てみてよ。ね？」

「何ですか……コレ……？」

「かわいいでしょ？」

「なんか、貴方ってこういうの似合いそうだな～って思って☆」

―シュパパパッ！―

ユキエはウインクをした瞬間、目にも留まらぬ速さで竜馬の服とズボンを脱がせた。

「ぬわっ！？（ちょっ、いつの間に！？）」

インナーとパンツ姿にされた竜馬を、箒、セシリア、鈴は顔を赤くしてジ～ッと見た。

（りょ、竜馬……）

（いつもはＩＳスーツでよく見ますけど……）

（やっぱ、いい身体してるわね……）

「ちょっと！返して下さいよ！」

竜馬はユキエに脱がされた私服に手を伸ばした瞬間だった。

―シュパパパッ！―

「きゃ～☆よく似合ってるわよ～♪」

ユキエは、また目にも留まらぬ速さでドレスを竜馬に着させた。

「あ……あぁ……」

ユキエは喜ぶが竜馬は言葉が出てこず、３人は竜馬のドレス姿に見とれていた。

（竜馬…意外と似合って…っ！違う違う！男が女の服を着るのはっ！だがしかし……）

（竜馬さん……。まさかドレスも似合ってしまうとは……。コレは良いものを見れましたわ♪）

「ね。貴女達も、そう思うでしょ？」

「う、うむ……」

「そ、そうですわね……」

箒とセシリアは頬を赤くしながら頷いた。

「う～ん……」

だが鈴はふふんっと笑み零すとユキエに言った。

「あまいわね、ウサオちゃん」

「ユキエよ」

すると鈴は衣装の中から1着、淡い紫のメイド服を持って来て竜馬に近づいた。

「ちょ、ちょっと鈴！？」

竜馬はたじろいだ瞬間、鈴は目を光らせた。

―シュパパパッ！―

その瞬間、竜馬は鈴が持っていた服に着せられてしまった。

「竜馬には、こっちの方が断然似合うわっ！！」

「そ、それはっ！？」

ユキエは鈴が着せたメイド服姿をを見て驚くが、また衣装の中から濃い青のメイド服を持って来た。

―シュパパパッ！―

「うわっ！」

竜馬はまた脱がされ、また着せられた。

「これでどう？」

「やるわね……」

だが鈴もさらに淡い緑のメイド服を持って来たが、デザインが際どかった。

「さぁ、これが切り札よ！」

「鈴、それだけは勘弁して！」

「だいっじょーぶ！あたしに任せなさいっ！！」

「嫌だぁぁぁぁぁっ！！」

―シュパパパッ！―

だが叫び虚しく、竜馬はまた着せられてしまった。

「ざっとこんなもんよ！」

「やるわね……。アタシもそこまでは出来なかったわ……」

ユキエは鈴の選んだ竜馬の姿を見て驚くが、背中から物凄いオーラを出して目を輝かせて言った。

「でも、まけない！」

―シュパパパッ！―

「うわぁぁぁぁ！」

その瞬間、竜馬は先程の服から濃い赤のメイド服に着せられた。どうやらこの2人、竜馬にはメイド服が似合うと決めているようだ。

「これぐらいしないとね☆」

「ぐぐ……」

ユキエは勝利を確信してウインクをすると、それが鈴の闘志を燃やしてしまった。

「負けないわよっ！ウサオちゃん！！」

「ユキエよ！ぬぅわりゃあぁぁぁぁぁぁぁぁッ！！！！！」

「だからやめてっt……アッーーー！！」

竜馬の叫びと共に、更なる激戦が始まった。尚、箒とセシリアは手で顔を隠すが指の間から見ていた事は誰も知らない。

～数分後～

「完璧よ！まさに、パーヘックッ！」

「「おー…！！」」

ユキエの言葉に箒とセシリアは手を退けた。そこには黒いロングスカートのメイド服姿をした竜馬が立っており、目にはうっすら涙が浮かんでいた。

「……凄い」

「綺麗ですわ……」

「あはははっ！面白～い！あんた、ずっとそのまんまでいたら？」

「……（ひ、ひどい……）」

竜馬は心の中で泣くと、ユキエは鈴に近づいて言った。

「貴女、やるわね……。アタシをここまで熱くさせたのは、海の向こうのあの男以来よ……」

「アンタもやるわね……。また勝負しましょ♪」

「えぇ♪勿論よ☆」

そしてユキエと鈴は熱い握手を交わした。
こうして、2人は友情を手に入れたのだった。

「うぅ……」

そして竜馬は、ここに2度と来なかいと誓ったのだった。

短編1話【甘辛なS／おきがえちゅうヨ♪】（後書き）

知ってる人なら有名なあのシーンを入れました。

たまに短編を入れるので、よろしくお願いします。

０８話【兄妹と引っ越しと箒の宣言】（前書き）

若干修正しました

08話【兄妹と引っ越しと箒の宣言】

◆昼　五反田家◆

6月頭、日曜日。竜馬は久々に小学校からの親友、五反田　弾の家に来ていた。
弾は竜馬が転校してきたその日に親友となり、中学に行っていない時期でも変わりなく遊んでいる親友である。

「で？」

「？…何が？」

2人は3D対戦アクションゲームで対戦していると、弾は竜馬に話し掛けてきた。

「だから、女の園の話だよ。いい思いしてんだろ？」

「してないよ…っと！」

そう言いながら、竜馬は弾が操作しているキャラに必殺技を繰り出すが、あっさり避けられてしまった。竜馬はこうみえて、対戦ゲームが苦手である。

「嘘をつくなよ、嘘を。お前のメール見てるだけでも楽園じゃねえか♪なにそのヘヴン、招待券ねえの？」

「ないよ……って！ここでその技は無いでしょ！」

弾はそう言いながら、竜馬の操作キャラに連続空中コンボを浴びせた。

「でもまぁ、鈴が転校してきてくれて助かったよ。話し相手が本当に少なかったからなぁ……」

「ああ、鈴か。鈴ねぇ……」

「？」

弾はニコニコとニヤニヤの中間みたいな顔で竜馬を見ると、竜馬は頭にハテナを浮かべた。

『ＧＡＭＥ　ＳＥＴ！』

「よっしゃ、また俺の勝ちだな！」

「くっそー…。また負けたー…」

竜馬はコントローラーを置くと、弾が話し掛けてきた。

「なぁ、竜馬。鈴の事は――」

―どかん！―

「お兄！さっきからお昼出来たって言ってんじゃん！」

弾の話を遮るようにドアが蹴り開かれると、そこに立っていたのは

弾の妹、五反田　蘭だった。
蘭は竜馬と歳が1個下の中学3年で、有名私立女子校の聖（セント）マリアンヌ女学園に通う優等生である。

「さっさと食べに――「蘭ちゃん、久しぶり。邪魔してるよ」――
…って、りっ、竜馬……さん！？」

蘭は竜馬に気付くとドアの影に隠れ、着崩れしたラフな服装を直してから部屋に入った。

「えっと、あのっ、き、来てたんですか……？全寮制の学園に通っているって聞いてましたけど……」

蘭は顔を赤くして、たどたどしく話した。

「ああ、うん。今日はちょっと外出。影宮さんから連絡が来たから、ついでに寄ってみたんだ」

ちなみに五反田家は食堂を開いており、メルダから徒歩5分程の距離にある。メルダの社員は勿論、影宮や京水も常連である。

「そ、そうですか……」

「蘭、お前なあ、ノックくらいしろよ。恥知らずな女だと思われ――ギンッ！――――…っ！」

弾は蘭の鋭い視線により、某配管工事の男がダメージを喰らったかのように縮んだ。

「……なんで、言わないのよ……」

「い、いや、言ってなかったか？そうか、そりゃ悪かった。ハハハ……」

「……」

蘭は再度ナイフのように鋭い視線を弾に送りつけると、蘭はそそくさと部屋を出て行った。

「あ、あの…」

だが蘭はドア付近で立ち止まって振り向くと、竜馬に話し掛けた。

「よかったら竜馬さんもお昼どうぞ。まだ、ですよね？」

「うん、いただくよ。ありがとう」

「い、いえ……」

蘭は頬を赤くすると、ぱたんとドアを閉じて部屋に静寂が訪れた。

「うーん……。蘭ちゃんとも長い付き合いになるけど、まだ僕に心を開いてくれないなぁ……」

「……は？」

「いや、ほら、だってよそよそしいでしょ。今もさっさと部屋から出て行っちゃったし」

「……はぁ」

弾は溜め息を漏らすと、ふぅっと気を吐いた。

「……どうした弾？」

「いやー、なんというか、お前はわざとやっているのかと思う時があるぜ」

「ん？」

竜馬は訳が分からず首を傾げた。

「まぁ、いいや。とりあえず飯食ってから街にでも出るか」

そして2人は立ち上がると、部屋を出て1階の食堂に向かった。

◆五反田食堂◆

2人は1度裏口から出て、正面の食堂入り口から入った。

「うげ」

「ん？どした？」
弾は露骨にイヤそうな声を出すと、竜馬は後ろから覗いた。
「……」
するとそこには、竜馬たちの昼食が用意してあるテーブルに蘭が座っていた。
「なに？何か問題でもあるの？あるならお兄ひとり外で食べてもいいよ」
それを聞いた弾は涙を拭いながら言った。
「……聞いたか竜馬。今の優しさに溢れた言葉。泣けちまうぜ」
「別に3人で食べればいいでしょ。それより他のお客さんもいるし、さっさと座ろうよ」
「そうよバカ兄。さっさと座れ」
「へいへい……」
こうして2人はテーブルに座った。ちなみに竜馬、弾、蘭の並びで座っている。
「あら？……竜馬ちゃんじゃないの～」
「あっ」

竜馬は別のテーブルに座っていた人物に声を掛けられると、そこにいたのは京水だった。

「京水さん。今、昼休みですか？」

「そうなのよ。ここの食堂の料理は全部美味しいから、いつでも来ちゃうのよ♪」

「いつもありがとうございます、京水さん」

「んふっ♪ありがとう蘭ちゃん」

京水はクネクネと動きながら蘭に御礼を言うと、食事を再開した。

「あれ？蘭ちゃんさぁ……」

「は、はひっ？」

すると、竜馬は蘭の姿が2階にいた時とは違う服装に気がついた。

「着替えたの？どっか出かける予定？」

2階での蘭の服装はショートパンツにタンクトップという機能性重視の格好で、肩まである髪を後ろでクリップに挟んだ状態だったが、今は髪もしゅるりとおろしたロングストレートで、服装も半袖のワンピースで僅かにフリルの付いた黒いニーソックスをしている。

「あっ、いえ、これは、その、ですねっ」

「ああ！」

竜馬は何か閃くと、ポンと手を叩いて蘭に言った。

「デート？」

―ダンッ！―

「違いますっ！」

だが蘭はテーブルを叩いて否定した。

「ご、ごめん」

「あ、いえ……。と、とにかく、違います」

「違うっつーか、むしろ兄としては違って欲しくもないんだがな。何せお前そんなに気合いの入れたオシャレをするのは数ヶ月に１ｋ――」

―バシッ！―

「おぉ！」

竜馬は蘭が瞬撃のアイアンクローを弾に繰り出した事に驚いていると、なにやら２人はアイコンタクトでやり取りをしていた。

（弾ちゃんも一言多いわねぇ～…）

それを横目で見た京水は、五反田食堂の鉄板メニューの業火野菜炒め定食を食べながら思った。

「食わねえなら下げるぞガキ共」

すると、3人のテーブルから五反田食堂の大将にして一家の頂点、五反田　厳がぬっと現れた。

「た、食べます食べます」

竜馬の言葉で2人もおとなしく昼食をいただいた。

「「「いただきます」」」

「おう。食え」

厳は満足げに頷いて次の料理を始めた。

「はぁ～……。厳さん、いつ見てもその鍋さばきは凄いわ～。嫌いじゃないわ～」

そして京水は、中華鍋を1度に2つ振るう姿の厳を乙女の眼差しで見てうっとりしていた。

「でよう竜馬」

すると弾が食事の合間合間で竜馬に話し掛けた。尚、食べながら喋ると厨房から中華鍋が飛んでくるので、竜馬達はそのあたりのマナ

ーを徹底しているのだった。

「鈴と……誰だっけ？転校する前の親友と再会したって？」

「うん、箒だよ」

「ホウキ……？誰ですか？」

「ん？僕が前いた小学校の親友だよ」

「そうなんですか……」

蘭はそれを聞くと、僅かに表情が硬くなっていた。

「その箒と同じ部屋だったんだよ。まあい――「お、同じ部屋！？」――…うぉっ！」

竜馬の言葉を遮るように、取り乱した蘭が突拍子もなく立ち上がった。

「ど、どうしたの？落ち着いて」

「そうだぞ落ち着ｋ――――ギンッ！――――…っ！」

弾も落ち着かせるが、蘭の視線でまた小さくなった。

「り、竜馬、さん？同じ部屋っていうのは、つまり、寝食をともに……？」

「まぁ、そうなるかな。……あむ」

そう言うと、竜馬は揚げ出し豆腐を口にした。

「……」

すると蘭は無言で弾を見ており、弾は大量の汗をダラダラと流していた。

「……お兄」

「は、はいっ！」

「後で話し合いましょう……」

「お、俺、このあと竜馬と出かけるから……ハハハ……」

「では夜に」

蘭は有無を言わせぬ口調で言った。

「……決めました」

「…何を？」

竜馬は首を傾げると、蘭は言った。

「私、来年ＩＳ学園を受験します」

―ガタッ！―

蘭の言葉を聞いた弾は驚きながら立ち上がりながら言った。

「お、お前、何言って――――ガンッ！――――…うっ！」

だが立ち上がった瞬間、弾の顔面を厳が投げたおたまに直撃して床に倒れてしまった。

「え？受験するって……蘭ちゃんの学校ってエスカレーター式で大学まで出れるんじゃ？」

「大丈夫です。私の成績なら余裕です」

「ＩＳ学園は、推薦ないぞ……」

よろよろと立ち上がる弾だが、蘭は続けて言った。

「お兄と違って、私は筆記で余裕です」

「いや、でも……な、なあ竜馬！あそこって実技あるよな！？」

「ああ。確かＩＳ起動試験っていうのがあってね、適性が全く無い人はそれで落とされるみたいだよ」

「……」

だが蘭は無言でポケットから紙を取り出すと、弾は受け取って開いて見た。

「げぇっ！？」

弾は驚くと紙を京水の足元に落としてしまい、京水はそれを拾って見た。

「蘭ちゃん、凄いじゃな～い！ＩＳ簡易適性試験で判定Ａだなんて」

「問題はすでに解決済みです。で、ですので……」

蘭は京水に紙を返してもらうと、戻したばかりの椅子にちょこんと掛けて竜馬に言った。

「り、竜馬さんにはぜひ先輩としてご指導を……」

「ああ、いいよ。受かったらね」

竜馬が笑顔で安請け合いをした刹那、蘭が食いついてきた。

「や、約束しましたよ！？絶対、絶っっっ対ですからね！」

「う、うん…」

竜馬は蘭の勢いに若干押されながら頷くと、弾が話し掛けてきた。

「お、おい蘭！お前何勝手に学校変える事を決めてんだよ！なぁ、母さん！」

「あら、いいじゃない別に。竜馬くん、蘭のことよろしくね♪」

「あ、はい」

弾と蘭の母親で五反田食堂の自称看板娘、五反田　蓮がニコニコ笑顔で竜馬に言うと、弾は興奮して言った。

「はい、じゃねえ！ああもう、親父はいねえし！」

「まあまあ、弾ちゃん落ち着いて。何かを決意した女の子を止めるのは無理よ」

京水は弾を宥めると、蘭に近づいて言った。

「蘭ちゃん。もしＩＳ学園に合格出来れば、私が影宮ちゃんにＩＳ武装の手配をしてもらうよう掛け合ってみるわ」

「本当ですか！」

「ええ！乙女の約束は絶対よ♪」

京水はウインクをしながら言った。

「ありがとうございます！」

（乙女と言うより、“漢女（おとめ）”だろ……）

弾は心の中で思うと、京水が弾の顔間近に顔を引き寄せて言った。

「弾ちゃ～ん。何か失礼な事を思ってなかったかな～♪」

京水は笑顔で言うが、目が笑っていなかった。

「い、いえ……」

そして弾も京水の笑顔を見て更に縮んでしまった。

「では、そういうことで。ごちそうさまでした」

昼食を食べ終えた蘭は箸を揃えて置くと合掌して席を立った。そして竜馬は、自分が使った食器を片付ける姿の蘭を見て思った。

（あぁ、蘭ちゃんは良い奥さんになるな。相手の人はさぞかし幸せなんだろうなぁ…）

「竜馬」

「ん？」

すると弾がずずいっと顔を寄せると、なぜか竜馬に小声で話し掛けてきた。

「お前、すぐに彼女作れ。すぐ！」

「ウェッ！？」

「ウェッじゃねえ！すぐ作れ！今年……いや、今月中に！」

「うーん……。ＩＳ訓練も本格的になるし、今は興味無いよ」

「相変わらずお前は……。大体、お前いつ女に興味が湧くんだよ。アレか？モテスリム気取りか？ふざけんなよ、この野郎！」

「何でキレてるの？」

「キレてねえよ！」

竜馬は首を傾げると、弾がさらにキレてしまった。

「お兄」

「っ！？」

だが蘭が戻ってくると弾が震え、竜馬は瞬間的に気温が下がったのを感じた。

「お、おおおお、おう。ななななんだ？」

「？……っ！」

竜馬は弾が震え上がるのが気になって蘭の方を見ると、一瞬ではあったが、その瞳の奥に三面六手の阿修羅を見た。

『余　計　ナ　コ　ト　ヲ　ス　ル　ナ』

その目は確かにそう物語っていたと竜馬は感じると、蘭は我に返った。

「で、では私はこれで」

そして蘭はそそくさとその場を立ち去った。

「……」

「弾、大丈夫？」

竜馬は固まった弾を心配するが、弾は小さな声で呟いた。

「……んで……えが……」

「うん？」

すると弾は竜馬の肩を持ち、物凄い勢いで揺らして怒鳴った。

「何でお前ばっかりモテるんだ！？ええい、この顔か！？この顔なのかゴラァ！？」

「ちょ、ちょっと弾、落ち着いてって！？」

「うるせえぞ弾！」

すると厳が弾に一喝した。

「はいっ。すみませんでしたっ」

そして弾は竜馬を放すと、流れるような動きで椅子の上に正座と敬礼をした。

「竜馬、後で勝負しろ」

「……いいけど、なにで？」

「エアホッケー」

「ウェッ！？」

その言葉を聞いて竜馬は驚いた。体を動かすゲームは竜馬は得意で、特にエアホッケーに関しては１０連勝中である。

（あえてそれを選ぶなんて、引けない勝負なんだね……）

竜馬はそう思うと、弾の後ろに闘志の炎が見えた。

「あの時のままの俺だと思うなよ、竜馬！」

その発言を聞いた竜馬は、激戦の予感に僅かに震えている右手をぎゅっと握りしめた。

◆夕方　竜馬の部屋◆

「ただいまー…」

時刻は１８時。あれから竜馬は弾と激戦……とはいかず、更に連勝

記録をのばしたのだ。

『おかえりなさい、竜馬殿』

すると奥からシベラーが返事をしたが、カンドロイドの姿ではなかった。

身長は竜馬の腰ぐらいで、頭には小さなクワガタの顎をモチーフにしたツノを付けた青いハーフ・ドロイド……ＫＷＧ‐ＢＸ：バイザンにシベラーは乗っていた。

『おう竜馬、帰ってたのか』

さらにシャワー室のドアが開くと、バイザンと同じ位の背丈をしたハーフ・ドロイドがいた。

頭にはカブトのような太いツノが付いた赤いハーフ・ドロイド……ＫＢＴ‐ＢＸ：ベニマルに乗っているのはイマージュである。

「はぁ……腕がだるい……」

すると竜馬は、机に座って腕をぶらぶらと揺らしながら隣の机を見た。そこは箒の机だが、何も置いてなかった。

「……」

竜馬は天井を見上げると、４日前の出来事を思い出していた。

～4日前～

◇夕方　竜馬・箒の部屋◇

始まりは、部屋に真耶が訪れた時だった。

「どうかしたんですか、先生」

「あ、はい。部屋の調整が付いたので、篠ノ之さんはお引っ越しです。今日から同居しなくてすみますよ」

「……え？」

その言葉に箒は状況が飲み込めなかった。

「それじゃあ私もお手伝いしますから、すぐにやっちゃい――「ま、ま、待ってください！」――…ひゃっ！」

いきなり箒が大きな声で言うと、真耶は小動物のようにびくっと身を竦めた。

「それは、今すぐでないといけませんか？」

「えっと……それは、まぁ、そうです。いつまでも年頃の男女が同室で生活をするというのは問題がありますし……」

「い、いや、私は……」

（ん？……あぁ、なるほどね…）

箒はまごついた言葉を返しながら竜馬の方をちらっと見ると、竜馬は分かったかのように箒に言った。

「大丈夫だよ箒。そんなに気を遣う事はないし、僕のことなら心配しないでいいよ」

―カチン！―

竜馬の言葉に、箒は頭に青筋を浮かべた。

「先生、今すぐ部屋を移動します！」

「は、はいっ！じゃあ始めましょうっ」

真耶はいきなり箒に急かされて、またびくっと身を震わせていると竜馬が話し掛けた。

「僕も手伝おうか？」

「いらん！」

「っ！」

箒の言葉に竜馬は驚くと、大人しく自分のベッドの上で座って見て

いた。

「……私がこうまで気にかけているのに、お前というやつは……」

箒は怒りの混じった声でぶつくさと言いながら、作業を1時間足らずで終わらせた。

～数十分後～

『［ー　ー］だいぶ広くなりましたね……』

箒が部屋を移り変わってから、シベラーは部屋の面積が増えて少し寂しく思った。

「箒とは教室でいつでも会えるし、あんまり寂しくないよ……。でも……」

『［？　？］でも？』

「楽しかったなぁ……。箒と一緒の部屋で寝るのって、小学生以来だったから……」

―コン、コン―

竜馬は懐かしむように言うと、部屋のドアからノックが聞こえた。

「箒かな？はーい…」

竜馬はドアを開けるが、誰もいなかった。

「……誰だったんだ？」

『って、うぉぉい！下だ、し・た！』

「下って……え！」

竜馬はそのまま目線を下に向けると、そこにいたのはベニマルだった。

『［―　―］ベニマルという事は……イマージュですか？』

「何で、イマージュがベニマルで来たんだい？それにその箱……」

竜馬は背負っていた箱を見ると〈ＢＡＩＺＡＮ〉と書かれており、中身はバイザンだと分かった。

『影宮の旦那に、俺も竜馬の傍にいてくれって頼まれな。このボディは万が一の為に持って来たんだ』

イマージュは部屋に入りながら言うと、箱を開けてからシベラーを

バイザンの背中にセットした。

『……なるほど。対抗戦で現れたＩＳがまた現れてもいいようにと……その準備ですか』

『そう言う訳だ。……ん？侍オンナはどこだ？一緒の部屋なんだろ？』

「あぁ、箒なら部屋の調整が付いたから別の部屋になったよ」

『そうなのか？だったら…』

そう言うと、いきなりイマージュは箒が使っていたベッドにダイブした。

『だったら俺はこのベッドで寝るぜ！』

『こらイマージュ！ワタクシもそのベッドで寝るのですよ！半分空けなさい』

『嫌だね。お前なんか床で寝てろ』

『何ですか！後から来たくせに！』

『やろうってのか…』

『そっちがその気なら…』

そう言いながらイマージュは右腕の銃口をシベラーに向け、シベラーは腰にさしてある刀の柄に触れており、今にも戦いが起ころうと

していた。

「まあまあ2人とも…」

―コンコン―

「ん？」

竜馬は2人を宥めていると、またドアからノックが聞こえた。

「はーい、どちらさまです……って、箒？」

「……」

竜馬はドアを開けると、箒がむすっとした顔で立っていた。

「どうしたの？何か忘れ物？」

「……」

だが箒は答えず、2人の間には沈黙が漂っていた。

「ら、来月……」

「ん？」

だがその沈黙は、箒の言葉によって破られた。

「来月の、学年別個人トーナメントだが……」

「うん…」

「わ、私が優勝したら……」

箒は頬を赤くしながら言葉を続けると、ビシッと竜馬に指差して言った。

「つ、付き合ってもらう！」

「……はい？」

～現在～

◆夜　竜馬の部屋◆

「付き合ってもらう……ねぇ…」

竜馬はシャワーから出ると、壁に掛けているカレンダーを見て確認した。

学年別個人トーナメント……1週間かけて行う学年別のＩＳ対決ト

ーナメント戦で、全員強制参加の行事である。

「箒に話しても生返事だし、これはトーナメントが始まらないと分からないなぁ……」

そう言いながら、竜馬は部屋の明かりを消してベッドに寝転んだ。

「まぁ……いつでも付き合ってあげるけど……ね……」

そして竜馬は眠りに落ちていった。

明日、まさかあのような事になるとは思いも知らずに……。

短編2話【魅惑のP／オークション開催】

◆昼　寮◆

箒　Side

「……はぁ」

日曜日、竜馬の部屋に行ったがいなかった。ドアに貼っていた紙には外出中と書かれており、、私は1人で食堂へと足を運んでいる。

（いや、会わなくてよかったかもしれんな……）

そう思いながら、私はあの時の約束を思い出す。

〔わ、私が優勝したら……つ、付き合ってもらう！〕

「……はっ！」

い、いかん！今思い出しても恥ずかしい行為だ！おそらく、今の顔は真っ赤なのだと私は思った。

「と、とにかくだ！とにかく優勝すれば恥ずかしくないはずだ。今回は、あの時のようには……」

私は声に出して言うと、ふと足が止まり、意識が思い出したくない記憶を掠めた。

（あの時とは違う。大丈夫……なはずだ）

頭を振って忘れようとするが、記憶は鮮明になって蘇った。
それは私が小学４年の時だった。その時は剣道全国大会の小学生の部で、誰もが優勝は間違いないと言われていた。
大会１週間前、私は竜馬にその事を手紙で送ると『優勝、頑張ってね』と返事が送られてきた。
私はそれが嬉しくて、大会優勝を誓った。そして優勝したら……改めて、竜馬に好きだと伝えたかった。
（……しかし…）
だが私は……大会当日に引越してしまい、参加不能となった。引越しの理由…、それは姉さんのせいだ。
姉さんが発表したＩＳが既に兵器への転用が危ぶまれ、姉さんを含む親族の保護という名目で政府主導の転居を余儀なくされた。
（…ＩＳが発表されたあの日から……私は、姉さんが……）
姉さんが……嫌いだ。
その後も重要人物保護プログラムによって引越しをさせられ、慌ただしいばかりで何も出来なかった。竜馬に手紙を出そうとしても、政府からの圧力で返事も出来なかった…。
そして気がつけば、両親とは別々の暮らしを余儀なくされ、元凶である姉さんは行方をくらました。私は実の妹という事で、執拗なま

での監視と聴取によって心身ともに参ってしまった。

（……でも）

それでも、剣道だけは続けた。それが唯一、竜馬との繋がりに思えたからだ。そのおかげで、去年は全国大会で優勝したが……。

（あれでは、ただの暴力だ……）

そう……、優勝したが喜ばしいものではなかった。

……誰かを叩きのめしたい。そう思っていたからだ。

けれど、太刀筋は己を映す鏡だ。私は酷く醜い様を己自身に突き付けられ、表彰式では逃げ出したかった。

そして、そんな私に負けて優勝を逃した対戦相手が涙している姿を見た時……私はさらに絶望した。

「……」

それはただの暴力だ。強いとは言えない。

強さとは、そういうものを指すものではない事を、私は何より知っている。

知っていると……思っていた。

（今度こそ、私は……強さを見誤らずに勝つことができるだろうか……）

いや、勝たなくてはならない。何より……己自身に……。

「……早く食堂に行くか」

そう言って、再び私は食堂へ向かって歩きだした。

箒　Ｓｉｄｅ　Ｅｎｄ

◆食堂◆

「…ん？」

食堂に来た箒が目に入ったのは、１つのテーブルの前に出来ていた数十人の生徒の集まりだった。

「セシリア？」

「あら、箒さん」

箒はその中にいたセシリアに気付くと生徒達に近づいた。

「これは何の集まりだ？」

「知りませんの？今から――「はーい！みんな静かにねー！」――……あ、始まりましたわ」

「あれは……」

箒は前のテーブルから声が聞こえたので確認すると、そこに立っていたのは新聞部副部長の薫子だった。

「では……只今より、《第1回龍東　竜馬くん写真オークション》を開催いたします！」

―ワアアアアアアッ！！―

薫子の発言により、多くの生徒から歓喜の叫びが響いた。

「オークション……だと……？」

「みなさんこんにちは！この度、オークションを主催させていただきます黛　薫子です！そして私のアシスタントをしてくれるのは、龍東くんの部屋に住んでいる青いドロイド……」

『どうも。クイズ番組を見て、問題を真っ先に答える方、シベラー・バイザンと申します』

薫子は右に手を伸ばすと、シベラーはペコリとお辞儀をした。

「えっと、シベラーくんは私の交渉によって龍東くんの画像データを数枚譲ってくれました。今から私の撮った写真を含めた数枚を出すから、みんな頑張ってね♪」

（り、竜馬の写真……だと！……よしっ！）

箒は決意を固めると、セシリアの隣に立った。

「…セシリア」

「分かってますわ。恨みっこ無しですわよ」

「では１枚目！」

薫子が言うと、シベラーは１枚のパネルを出した。そこに写っていたのは、対抗戦で鈴と戦っている姿の竜馬だった。

「この荒々しくも凛々しい顔立ちの龍東くん！まずは１００円から。はい！」

「１１０円！」

「１３０円！」

生徒達が手を挙げて金額を増やしていく中、箒とセシリアは写真に見とれて顔を赤くしていた。

（こ、これは何と…！）

（竜馬さんの凛々しい顔が…！）

「はい終了！５５５円で落札決定！」

「「あっ！」」

だがそのせいで落札されてしまった。

「まだまだこれから、２枚目！」

そう言われ、シベラーはパネルを挙げたが……。

「「「キャアアアッ！」」」

―バタッ！バタッ！バタッ！―

一部の生徒は叫ぶと同時に失神してしまった。

『これは刺激が強いのではありませんか？』

２枚目の写真は、上半身裸で身体を拭いている竜馬だった。

「これは私が日曜の朝に撮ったものだよ。では、２００円からスタート！」

「２２０円」

「２５０円！」

だんだん値段が上がり続けると、セシリアは決意をして言った。

「な…７５３円ですわ！」

「７５３円、他にいないかな～！」

薫子は確認するが、誰もいなかった。

「決まり！７５３円で落札決定！」

「や、やりましたわ！」

（い、いかん…。私としたことが、鼻血を噴いてしまった……）

セシリアは喜ぶと、箒は鼻をハンカチで拭いていた。

「それじゃ、３枚目！」

シベラーはパネルを挙げた。そこには、とても優しい笑顔をしていた竜馬だった。

（……っ！これだっ！）

「じゃあ、これも２００円か――「９１３円！！」――…っと、いきなり上がったー！」

箒はそれを見てすぐに手を挙げた。

「さぁ、誰かいないかなー？」

（頼む、誰も挙げないでくれ……）

箒は心の中で念じると、薫子は決定した。

「それじゃ、９１３円で落札決定！」

「……ふぅ～」

箒は安堵のため息をすると、薫子の前に来た。

「はい、これが写真だよ」

「あ、ありがとうございます！」

箒はお金を支払い写真を受け取ると、すぐに食堂を出て行ってしまった。

◆箒・静寐の部屋◆

「はぁ……はぁ……」

箒は急いで部屋に戻ると落札した写真を見た。

「……竜馬」

優しい笑顔、それは箒が１番好きな顔だった。

「ふふっ♪」

箒は笑みを浮かべて、写真を優しく胸に抱いた。

（竜馬、私は……絶対優勝して、お前と付き合う！）

そして箒は闘志を燃やすのだった。

だが……、明日まさかあんな事が起こるなど、箒はまだ知らない。

０９話【転校生と新たな教員と合同実習】

◆朝　１年１組◆

「諸君、おはよう」

「「「おはようございます！」」」

月曜日の朝。教室に千冬と真耶が入って来ると、賑やかに談笑していた生徒達は一瞬で静かになり、２人に挨拶した。

「今日からは本格的な実戦訓練を開始する。訓練機ではあるがＩＳを使用しての授業になるので各人気を引き締めるように」

（実戦訓練かぁ……。いろんな人と戦えるから楽しみだなぁ……）

竜馬はそう考えていると、連絡事項を言い終えた千冬が真耶にバトンタッチした。真耶はちょうど眼鏡を拭いていたらしく、慌ててかけ直すと教壇に立つとＨＲを始めた。

「ええとですね、今日はなんと転校生を紹介します！しかも２名です！」

「ウェ……」

「「「えええええっ！？」」」

竜馬が真耶の発言に一瞬驚くと、クラス中が一気にざわつき始めた。

（なんでうちのクラスなんだろう？普通分散させるもんじゃないのかな？）

竜馬は至極まっとうな事を考えていると、教室のドアが開いた。

「失礼します」

「……」

クラスに入ってきた2人の転校生を見て、ざわめきがぴたりと止まった。

1人は輝くような銀髪ロングで鈴と同じ位の身長。そして左目には、20世紀の戦争映画に出てくる軍人がしていそうな黒眼帯をしており、赤い右目の目つきは冷たいモノに感じた。

だが、ざわめきを止めたのはもう1人の方だった。

人懐っこそうな中性的に整った顔立ち。濃い金髪は首の後ろで丁寧に束ねており、体は華奢に思えるくらいスマートで、脚はしゅっと伸びている。

「シャルル・デュノアです。フランスから来ました。この国では不慣れな事も多いかと思いますが、みなさんよろしくお願いします」

金髪の転校生……シャルルはにこやかな顔でそう告げて一礼すると、クラスの誰かが呟いた。

「お、男……？」

そう……シャルルは竜馬と同じ、男だった。

「はい。こちらに僕と同じ境遇の方がいると聞いて本国より転入を

――「きゃ……」――…はい？」

（やばっ！）

竜馬は危険を察知すると耳を手で塞いだ瞬間だった。

「「「「きゃあああああああーーーーっ！！！！」」」」

クラスの中心を起点に、歓喜の叫びはあっという間に伝播した。

「男子！２人目の男子！」

「しかもうちのクラス！」

「美形！守ってあげたくなる系の！」

「私の魂はＩＳと共に有りー！」

（……何だかデジャブを感じるな…）

竜馬はこの現状を見て、自分が転入してきた時と同じように見えていた。

「あー、騒ぐな。静かにしろ」

「み、皆さんお静かに。まだ自己紹介が終わってませんから～！」

千冬は面倒くさそうにぼやき、真耶はクラスを宥めようとしていると、竜馬は銀髪の転校生を見た。

「……」

その転校生は未だに口を開かず、腕組みをした状態でクラスメイト達を下らなそうに見ているが、その視線を千冬にだけ向けた。

「……挨拶をしろ、ラウラ」

「はい、教官」

銀髪の転校生……ラウラは、いきなり佇まいを直して素直に返事をする姿を見て、クラス一同がぽかんとしていた。それに対して、千冬は先程とはまた違った面倒くさそうな顔をした。

「ここではそう呼ぶな。もう私は教官ではないし、ここではお前も一般生徒だ。私のことは織斑先生と呼べ」

「了解しました」

竜馬は、そう答えるラウラを見て納得した。

（千冬さんを教官と呼ぶという事は、ドイツの軍人なんだ……）

竜馬が思っていると、ラウラが挨拶をした。

「ラウラ・ボーデヴィッヒだ」

「「「……」」」

クラスメイト達は沈黙をしてラウラの続く言葉を待っているが、名前を口にしただけで閉ざしていた。

「あ、あの、以上で――「以上だ」――…ひっ」

真耶は出来る限りの笑顔で聞くが、返ってきたのは無慈悲な即答で、真耶は涙目になっていた。

（あー…。これは、友達になるには時間が掛かりそうだなぁ…）

竜馬は思っていると、ラウラがつかつかと竜馬の所にやってきた。

「貴様が……」

「ん？」

竜馬はラウラと目が合うと、ラウラは右手を大きく振った。

―バシッ！―

「……ちっ」

クラス中、誰もがラウラの平手打ちが竜馬の左頬に直撃すると思っていた。

「えっと……」

しかし、竜馬は咄嗟に左手でラウラの右手を握り平手打ちを防いだのだった。

「なっ…！何をしてるんだ！」

いち早く正気に戻った箒はラウラに怒鳴り付けるが、ラウラは箒の事を無視していた。

「……私は」

「？」

竜馬は首を傾げると、ラウラは竜馬の手を振りほどき、怒りの篭った冷たい目で睨んで言った。

「私は認めない。貴様の存在など、断じて認めるものか」

そう言って、ラウラは来たとき同様すたすたと竜馬の前から立ち去り、空いている席に座ると腕を組んで目を閉じた。

「竜馬、大丈夫か？」

「う、うん……」

箒は心配すると、千冬がぱんぱんと手を叩いた。

「あー……ゴホンゴホン！ではＨＲを終わる。各人はすぐに着替えて第２グラウンドに集合。今日は２組と合同でＩＳ模擬戦闘を行う。解散！」

そう言って千冬は行動を促すと、竜馬は席を立ち上がった。

（確か第２アリーナ更衣室が空いてたかな。……でも、ボーデヴィ

ッヒさんの言った言葉……あの時、僕と影宮さん達が巻き込まれたテロの事だよね、きっと……）

竜馬はラウラの言葉を聞いて過去を思い出していると、千冬が話し掛けた。

「龍東。デュノアの面倒を見てやれ。同じ男子だろう」

「あ、分かりました」

竜馬はそう言うとシャルルの傍に来た。

「君が龍東君？初めまして、僕は……」

「ああごめん、挨拶は後でね。女子が着替え始めるから、先に移動しよう」

「あっ……」

説明と同時に竜馬はシャルルの手を取って教室を出た。

◆廊下◆

廊下に出ると、竜馬は走らない程度の速度で歩きながら、シャルルに説明をしていた。

「とりあえず男子は空いてるアリーナ更衣室で着替え。これから実習のたびにこの移動だから、早めに慣れてね」

「う、うん……」

しかしシャルルは妙に落ち着かなそうにしていると、それに気付いた竜馬は1度歩くのを止まった。

「えっ、何かな？」

「トイレかい？」

「トイ……っ違うよ！」

「そっか。それは何より」

2人は再び歩きだすと、階段を降りて中間に差し掛かった時だった。

「ああっ！転校生発見！」

「しかも龍東君と一緒！」

「ウェッ！」

竜馬は振り向くと、ＨＲが終わった各学年の生徒が階段の上下から駆け出してきた。

「いたっ！こっちよ！」
「者ども、出会え出会えい！」
（暴れん坊の将軍ですかっ！）
竜馬は心の中で突っ込むが、２人は生徒達に囲まれてしまった。
「龍東君の黒髪もいいけど、金髪っていうのも良いわね」
「しかも瞳はアメジスト！」
「きゃああっ！見て見て！ふたり！手！手繋いでる！」
生徒達が騒ぐなか、シャルルは困惑顔で竜馬に言った。
「な、なに？何でみんな騒いでいるの？」
「そりゃ男子が僕達だけだからね」
「……？」
「……いや、普通に珍しいでしょ。ＩＳを操縦できる男って、今のところ僕達しかいないでしょ？」
「あっ！……ああ、うん。そうだね」
「それと、この学園の女子って男子と極端に接触が少ないから、多摩川に現れたアザラシ状態なんだよ」

「アザラシ？」

「しかし、どうしようか…」

竜馬は周りを見渡すと、前と左右には生徒の波、後ろには窓があった。

「……よし！」

【ＴＡＫＯ－ＫＡＮ】

竜馬は背を向けると窓を開け、転送したタコ・カンドロイドを起動して外に投げた。

「いくよ」

「えっ？……うわっ！」

竜馬はシャルルをお姫様抱っこすると窓から飛び出した。

「「「ええっ！」」」

生徒達は驚いて窓の外を見ると、タコ・カンドロイドで出来た坂があった。どうやら竜馬は飛び出したと同時に、数十本のタコ・カンドロイドを転送したようだ。

「ふぅ……。何とか突破出来た……」

無事に着地すると竜馬はシャルルを降ろした。

「……」

だがシャルルは恥ずかしかったのか、顔を赤くしていた。

「しかし助かったよ」

「えっ？何が？」

「やっぱ学園に男1人は辛いからね。1人でも男がいてくれるっていうのは心強いよ」

「そうなの？」

「そうなのって……まぁ、いいや」

すると竜馬はシャルルに手を差し出した。

「何にしてもこれからよろしくね。僕は龍東　竜馬。友達からは竜馬って呼ばれてる」

「うん。よろしく竜馬。僕のこともシャルルでいいよ」

「わかったよ、シャルル」

そう言って2人は握手をすると、更衣室に向かって再び歩きだした。

◆第2アリーナ・更衣室◆

「よーし、到着……って、時間ヤバイな！」

2人は更衣室に着く頃、時計の針がかなりギリギリのところに指していた。勿論、急がないと遅れること間違いなしである。

「すぐに着替えよ――「わぁっ！？」――……ん？」

竜馬は制服とTシャツをベンチに脱ぎ捨てて上半身裸になると、シャルルは頬を赤く染めた。

「どうしたの？……って、なんで着替えないの？早く着替えないと遅れるよ」

「う、うんっ？き、着替えるよ？でも、その、あっち向いてて……ね？」

「別に着替えをジロジロ見る気はないけど……って、シャルルはジロジロ見てるね」

竜馬の言葉に、シャルルは両手を突き出して慌てて顔を床に向けた。

「み、見てない！別に見てないよ！？」
「そう？んじゃ……」
竜馬は背を向けると、再び着替え始めた。
「……」
だが、後ろから視線を感じて竜馬は振り向いた。
「シャルル？」
「な、何かな！？」
竜馬は振り向くと、シャルルは竜馬にちょっと向けていた顔を慌てて壁の方にやり、インナー型ＩＳスーツを着ていた。
「おお、着替えるの早いね。コツでもあるの？」
竜馬はズボンと下着を脱いでスパッツ型のＩＳスーツを腰まで通したところで止め、シャルルの着替える早さに驚いていた。
「い、いや、別に……って竜馬、まだ着てないの？」
シャルルは目線を若干、下に向けていた。
「これ、着るときに引っ掛かって着づらいんだよねー」
「ひ、引っ掛かって……」

何を想像したのか、シャルルは顔を赤くしていると竜馬は着替え終わり、更衣室を出た。

◆学園内　廊下◆

「うーん……」

「どうしたの？」

グラウンドに向かう途中、竜馬は改めてシャルルを見て言った。

「そのスーツって、なんか着やすそうだね」

「これ？デュノア社製のオリジナルだよ」

「デュノアって、あのデュノア？」

竜馬はその単語を聞いて思い出した。

デュノア……第2世代ＩＳリヴァイヴを開発した量産機ＩＳシェア世界第3位の企業である。ちなみにメルダはＩＳを開発してはまだ日が浅いが、独特のシステムや強力な武装に関して注目されている。

「うん、僕の家だよ。父が社長をしてるんだ」

「へぇ…、道理で……」

「道理でって？」

「んー……、気品というか、いいところの育ちって感じがしたからね。納得したよ」

「いいところ……ね」

竜馬は腕を組んで納得していると、シャルルは視線を逸らした。

（……何かいけない事、言っちゃったかな…）

竜馬はそう思っていると、第2グラウンドのゲートに到着した。

◆第2グラウンド◆

「遅い！」

2人は第2グラウンドに到着したが、案の定千冬が腕を組んで待っ

ていた。

「す、すみません」

竜馬は千冬に謝ると、シャルルと一緒に1組整列の1番端に加わった。尚、隣はセシリアだった。

「随分ゆっくりでしたわね。スーツを着るだけで、どうしてこんなに時間が掛かるのかしら？」

「えっと…、道が混んでいたんだよ」

「ウソおっしゃい。いつも間に合うくせに」

セシリアは言葉の端々に棘を含めて言った。

「ええ、ええ。竜馬さんはさぞかし女性の方との縁が多いですから？そうでないと、女性から叩かれそうになりませんよね」

それを聞いた竜馬は頬を指で掻きながら苦笑すると、後ろから声が聞こえた。

「なに？アンタ、なんかやったの？」

セシリアは後ろを向くと、そこには鈴がいた。

「こちらの竜馬さん、今日来た転校生の女子に叩かれそうになりましたの」

「はぁっ！？竜馬、アンタなんでそうバカなの！？」

鈴に言われるが、竜馬は振り向かなかった。何故なら……

「……安心しろ。バカは私の目の前にも2名いる」

「「っ！？」」

セシリアと鈴は首をゆっくり後ろに振り向くと、視線の先には出席簿を持った千冬が待ち構えていた。

（これ……僕のせいかな？だったらごめんね、2人共…）

―バシーン！―

竜馬は心の中で謝罪すると、千冬は2人の頭に出席簿アタックを繰り出して、何事も無かったかのように戻った。

「では、本日から格闘及び射撃を含む実戦訓練を開始する」

「「「「はい！」」」」

千冬の言葉に1組・2組の生徒達は返事をした。合同実習なので人数はいつもの倍で、返事も気合いが入っていた。

「くうっ……。何かというとすぐにポンポンと人の頭を……」

「……竜馬のせい竜馬のせい竜馬のせい……」

セシリアと鈴はちょっと涙目になりながら、叩かれた頭を押さえていた。

「今日は戦闘を実演してもらおう。ちょうど活力が溢れんばかりの１０代女子もいることだしな……」

そう言って、千冬は鈴とセシリアを見て言った。

「凰！オルコット！」

「は、はい！」

「な、何故わたくしまで！？」

「専用機持ちはすぐに始められるからだ。いいから前に出ろ」

「だからって、どうしてわたくしが……」

「竜馬のせいなのに、なんでアタシが……」

２人はそう呟いて前に出た。

「お前達、少しはやる気を出せ……」

千冬はそう言うと、小声で２人に告げた。

「アイツにいいところを見せられるぞ？」

「「っ！」」

（ん？2人共、さっきよりやる気が上がってる？）

竜馬はそう思っていると、セシリアと鈴はテンション高めで言った。

「やはりここはイギリス代表候補生、わたくしセシリア・オルコットの出番ですわね！」

「まあ、実力の違いを見せるいい機会よね！専用機持ちの！」

（千冬さんに何か言われたのかな……。そうか、勝ったらデザートをおごってもらえるんだ！）

そして、竜馬は間違った事を思っていた。

「それで、相手はどちらに？わたくしは鈴さんとの勝負でも構いませんが…」

「ふふん、こっちの台詞。返り討ちよ」

2人が火花を散らしていると、千冬が言った。

「慌てるなバカども。対戦相手は……」

―キィィィン―

すると、上空から空気を裂く音が聞こえた。

「ん？」

竜馬や他の生徒達は上を見上げると、何かが飛来してきた。

「あああああーっ！ど、どいてください～っ！」

「ウェッ！？」

竜馬が驚くなか、他の生徒達はその場から退避して激突を免れようとした、次の瞬間だった。

「…よっと！」

千冬の後ろから誰かが飛び出し、空中で飛来したものを受け止めた。

「だ、誰なの？」

「男の方……ですの？」

鈴とセシリアはその人物の容姿を見て疑問に思った。

散斬頭の銀髪で眠たそうにしている細目の顔、華奢な体つきで千冬より少し高い身長の男。だが、その男の両腕と両足が機械になっており、色は違うが竜馬と同じＩＳスーツを着ていた。

「え……」

そして竜馬はその人物を知っていた。何せ、昨日再会したばかりなのだから。

「大丈夫ですか、山田先生」

「……えっ、あれ？」

飛来したもの……リヴァイヴを装着した真耶は目を開くと、男に抱き着くような体勢になっていた。

「あっ、す、すみません！」

真耶は地上に着地すると、男に離れながら謝った。

「…黄金さん」

竜馬はそう呟くと、男は生徒達に向いて言った。

「はじめまして。今日から学園で整備学科の担当になった金剛　黄金だ。主に2・3年生の授業を任されているが、時々全学年の実戦訓練にも参加させてもらうからな」

「りゅーくん。あの人、知ってるの？」

黄金が話していると、本音が竜馬に話し掛けた。

「うん。黄金さんは、メルダでＡＩ開発の主任を任されてるんだ」

竜馬は本音に説明していると、千冬が鈴とセシリアに話し掛けた。

「さて小娘どもいつまで惚けている。まずは山田先生と2対1、その次に金剛先生と2対1で戦ってもらう」

「え？あの、2対1で……？」

「いや、さすがにそれは……」

2人は躊躇していると黄金が言った。

「大丈夫、山田先生はああ見えて元代表候補生だ。それに、今の君達なら5分足らずで負けるさ」

「「なっ！」」

負けると黄金に言われて、2人は再びその瞳に闘志をたぎらせていると、黄金は言い続けた。

「勿論、オレと戦っても同じことだよ」

―プチッ―

「なあんですってぇっ！」

刹那、その発言にキレた鈴は甲龍を展開すると双天牙月を連結し、黄金に向けて投擲した。

「……ふっ」

だが黄金はその場から動かず左手を突き出すと、鈍色の左腕が青い肩で巨大な白いグローブになった。尚、そこには金の腕章でキャプテンの文字が書かれていた。

「「「なっ！」」」

竜馬以外の生徒はそれを見て驚くと、黄金は双天牙月を軽々と受け止めた。

「ＳＣＲ－Ｌ：チャントキャッチ……。軽いな……」

「くっ……」

黄金はそう呟きながら左腕を元に戻すと、鈴に双天牙月を手渡した。

「もういいか…」

「はい、どうぞ」

「では、はじめ！」

千冬が号令すると同時に、セシリアと鈴が飛翔した。そして真耶も2人を1度確認してから空中へと踊り出し、黄金はタイマーを持ってスイッチを押した。

「手加減はしませんわ！」

「さっきのは本気じゃなかったしね！」

セシリアは1度勝っている相手という事で余裕をこき、鈴は先程の怒りを真耶に向けていた。

「い、行きます！」

真耶の言葉はいつもどおりだったが、その目は鋭く冷静なものへと変わっており、セシリア・鈴組の先制攻撃を簡単に回避した。

「さて、今の間に……デュノア、山田先生が使っているＩＳの解説をしてみせろ」

「あっ、はい」

シャルルは空中での戦闘を見ながら、しっかりとした声で説明を始めた。

「山田先生の使用されているＩＳはデュノア社製（ラファール・リヴァイヴ）です。第２世代開発最後期の機体ですが、そのスペックは初期第３世代型にも劣らないもので、安定した性能と高い汎用性、豊富な後付武装が特徴の機体です」

上空では、真耶が５１口径アサルトライフル《レッドバレット》でセシリアのビットを撃ち墜としていた。

「特筆すべきはその操縦の簡易性で、それによって操縦者を選ばない事と多様性役割切り替え（マルチロール・チェンジ）を両立しています。装備によって格闘・射撃・防御といった全タイプに切り替えが可能で、参加サードパーティーが多い事でも知られています」

「ああ、一旦そこまでいい。……終わるぞ」

―ドカァァン！―

千冬が言った瞬間、上空で爆発が起こり、煙の中からふたつの影が地面に落下した。

どうやら、真耶の射撃がセシリアを誘導して鈴をぶつけたところでグレネードを投擲して起こったようだ。

「くっ、うう……。まさかこのわたくしが……」

「あ、アンタねぇ……何面白いように回避先読まれてんのよ……」

「り、鈴さんこそ！無駄にばかすかと衝撃砲を撃つからいけないのですわ！」

「こっちの台詞よ！なんですぐにビットを出すのよ！しかもエネルギー切れるの早いし！」

２人は主張をし続けると、２人の間に黄金が現れた。

「３分１５秒……まさか４分足らずで負けるとはねぇ……」

「「はあっ！」」

黄金に言われて、２人はキッと黄金を睨みつけた。

「次はオレとだろ？先に行くぞ」

そう言って、黄金は右手に持っている物体を展開した。

【Ｃｈａｎｇｅ！ＤＩＡ！】

そこから音声が聞こえると、黄金は宝石の形をしたホログラムに包

まれた。

「…変身完了！」

ホログラムが消えると、黄金の両腕と両足以外の部分に全身装甲を纏っていた。
装甲は銀を主色に赤く光るエネルギーラインが引かれており、頭部には黄色く光るカメラアイが特徴で、さながら特撮ヒーローのような姿になっていた。

「龍東、金剛先生が使っている物の説明をしろ」

「はい…。金剛先生が使用したのは、現在メルダで開発中のパワードスーツ《アーティジェム》です。装甲素材はドロイドと同じサイプラシウム合金を使用してますので、軽装な姿ですが高い防御力があります。さらにＩＳと同じＰＩＣとシールドエネルギーを搭載してますので、ＩＳとの戦闘も可能です」

「いいだろう。次はその義手義足を説明しろ」

千冬は黄金の両腕と両足を見ながら言うと、竜馬は話し出した。

「あれらは身体障害者の為に作られた物をベースに、影宮さんと金剛先生が作り上げた《戦闘強化股肱》と言って、金剛先生しか扱えない義手と義足です。両腕は多機能機械腕（ダイヤ）、両足はブースター内蔵推進機構（モンド）と呼ばれてます。先程見せていましたけど、両腕のダイヤは別のドロイドの腕と取り替え可能で、両足のモンドには簡易型ＰＩＣが備わってますので、アーティジェム無しで約１０分ほど浮かび上がる事が出来ます」

「ああ、それくらいでいい。では、はじめ！」
千冬の号令と同時に黄金は飛び出し、鈴とセシリアが飛翔した。

「さて、目標タイムは3分以内で倒すか…」
黄金は鈴とセシリアに対峙しながら言った。
「はんっ！アンタなんか1分で十分！いくわよセシリア！」
「わたくしたちに挑んだのを、後悔させますわ！」
鈴は双天牙月を構えて黄金に突撃すると、セシリアは後方で援護射撃を行った。しかし黄金はその場に止まり、両腕に力を集中して言った。
「ＥＬＦ‐Ｒ：ライトガード！ＧＢＫ‐Ｌ：ブレークバット！」
すると右腕は巨大な楕円形の盾を持った腕に、左腕は巨大な黒い金棒を持った腕に変わった。そして黄金はライトガードでセシリアと鈴の攻撃を受け流し、ブレークバットで鈴を上から叩きつけた。
「きゃあっ！」
―ドゴォォォン！―

そして鈴は地上に激突してしまったのは、開始して２９秒の事だった。

「鈴さん！」

「心配かけるのはいいが、今は戦闘中だぜ…」

そう言った黄金の左腕は、緑の肩に黒い機関銃の腕をしたＦＲＬ-Ｌ：アンブッシュガンに変更されており、セシリアに向けて火を噴いた。

「くっ！」

だがセシリアは回避をするが、黄金はそれを狙ってイグニッション・ブーストをして一気に距離を詰めると、右腕に力を集中して言った。

「ラスト！ＤＶＬ-Ｌ：デビルハンド！」

右腕は漆黒の腕に強靭な爪を持ったデビルハンドになると、セシリアを鈴同様に上から叩きつけた。

―ドゴォォォン！―

「……５３秒。１分足らずか……」

黄金は両腕を元に戻しながら呟くと、地上までゆっくりと降下した。

黄金が地上に降り立つ頃、千冬が生徒達に話し出した。

「さて、これで諸君にもＩＳ学園教員と金剛先生の実力は理解できただろう。以後は敬意を持って接するように」

「ま、頑張れよ」

黄金はそう言うと、アーティジェムを解除した。

「専用機持ちは龍東、オルコット、デュノア、ボーデヴィッヒ、凰だな。では８人グループになって実習を行う。各グループリーダーは専用機持ちがやること。いいな？では分かれろ」

千冬が言い終わるや否や、２クラス分の女子が竜馬とシャルルに詰め寄ってきた。

「龍東君、分からないところ教えて～」

「デュノア君の操縦技術を見たいなぁ」

「ね、ね、私もいいよね？同じグループにいれて！」

「「え、えっと……」」

竜馬とシャルルはどうしたらいいのか分からず、ただただ立ち尽く

すだけだった。

「この馬鹿者どもが……」

千冬はその状況を見兼ねて、面倒くさそうに額を指で押さえながら低い声で告げた。

「1人ずつ各グループに入れ！次にもたつくようなら今日はＩＳを背負ってグラウンド１００周させるからな！」

千冬の鶴の一声で、女子達は2分と掛からず専用機持ちグループが出来上がった。

「はぁ……。最初からそうしろ、馬鹿者どもが」

溜め息を漏らす千冬にバレないように、各班の女子はぼそぼそとおしゃべりをしていた。

「……やったぁ。龍東君と同じ班っ……」

「……うー、セシリアかぁ……。さっきボロ負けしてたし。はぁ……」

「……凰さん、よろしくね。後で龍東君のお話聞かせてよっ……」

「……デュノア君！分からない事があったら何でも聞いてね！ちなみに私はフリーだよ！……」

「……」

各班はおしゃべりをしているが、唯一ラウラの班だけがおしゃべりをしていなかった。

（……なんか、あそこの女子だけ可哀相だなぁ…）

竜馬はラウラの班を見てそう思った。

張り詰めた雰囲気。人とのコミュニケーションを拒むオーラ。そして生徒達への軽視を込めた冷たい眼差し。そんなラウラに話し掛ける事が出来ず、その班の女子達は俯き加減で押し黙っていた。

「ええと、いいですかー皆さん。これから訓練機を1班1体取りに来てください」

「数は打鉄が3機にリヴァイヴが2機だ。早い者勝ちだからなー」

真耶と黄金が各班に言うと、各班長は数人を連れて格納庫に向かった。

～数分後～

各班に訓練機が渡ると、真耶がＩＳのオープン・チャンネルで連絡をした。尚、竜馬と鈴とセシリアの班は打鉄、シャルルとラウラの

班はリヴァイヴである。

『各班長は訓練機の装着を手伝ってあげてください。全員にやってもらうので、設定でフィッティングとパーソナライズは切ってあります。とりあえず午前中は動かすところまでやってくださいね』

「分かりました。それじゃあ、出席番号順にＩＳの装着と起動、そのあと歩行までやろう。最初は――「はいはいはーいっ！」――…ん？」

竜馬は元気のいい返事に振り向くと、そこには清香が片手を挙げてぴょんぴょんと跳ねていた。

「出席番号１番！相川　清香！ハンドボール部！趣味はスポーツ観戦とジョギングだよ！」

「そうなんだ……って、なんで自己紹介を――「よろしくお願いしますっ！」――…ウェッ！」

すると清香は腰を折って深く礼をすると、そのまま竜馬に手を差し出してきた。

（……握手すればいいのかな？）

「ああっ、ずるい！」

「私も！」

「第一印象から決めてました！」

「え、え～と……？」

清香の行動を見た龍東班の女子は、竜馬の前に来て同じようにお辞儀をして頭を下げたまま右手を突き出した。

「えっとね？……どういう状況かよく分からないんだけど――「「「よろしくお願いしますっ！」」」――…ん？」

竜馬は後ろから同じような声を聞くと振り向いた。

「え、えっと……？」

すると、シャルルが同じように女子達がお辞儀&握手待ちの手を並べられて困っていた。

―スパパパーン！―

「「「いったああっっ！」」」

だがシャルル班の女子一同は、いきなりの衝撃に頭を押さえながら顔を上げると、そこには黄金がハリセンを持って立っていた。

「やる気があっていいな。よし、今織斑先生を呼ぶから直々に教えてもらおうか」

黄金の言葉にシャルル班の女子は息を飲んだ。それを見て飛び火を恐れた竜馬班女子は流れるような動きで列を解散し、清香は打鉄の

外部コンソールを開いてステータスを確認した。

「……じゃあ、始めようか。相川さん、ＩＳに何回かは乗ったよね？」

「あ、うん。授業でだけだけど…」

「じゃあ大丈夫かな。とりあえず装着して起動までやろうか」

竜馬はそう言うと、清香は真面目に装着・起動・歩行と問題なく進んだが、２人目の装着の時に小さな問題が発生した。

「あー…いや、あのさ、コックピットに届かないんだけど……」

「あ！ごめーん」

そう……、清香は打鉄をしゃがませずに、立ったまま装着解除をしてしまったのだ。

「どーした？」

すると、黄金が清香の傍に来た。

「あ、金剛先生」

「金剛は止してくれ。オレの事は黄金でいいさ」

黄金は苦笑しながら打鉄を見て、状況を理解した。

「なるほど、コックピットが高い位置で固定した状態だな。んじゃ

あ仕方がないから竜馬、オーバーズを展開して岸里を乗せてあげな」

「あ、はい」

黄金の言葉に竜馬は返すとオーバーズを展開、装着した。

「乗せる時は……、まぁ安全面で考えたら抱っこだな」

「な、なに？」

「えええ～っ、超ラッキー！」

黄金の言葉に箒は驚き、岸里は喜んでいた。

「んじゃ、頑張れよ」

そう言って黄金は別の班の様子を見て行った。

「それじゃあ、早くしようか」

「ひゃあっ！？」

竜馬は岸里を抱き抱えると、岸里は変な声を出した。

「あ、ごめん」

「り、龍東君って強引ね……」

「落ちるから、ちゃんと掴まってよ」

「う、うん……」
岸里は頬を赤く染めながら言うと、竜馬はゆっくりと上昇して打鉄のコックピットに運んだ。
「それじゃ、背中からゆっくり入って。あ、そっちの装甲に手を掛けるとやりやすいかも。わかる？」
「だ、大丈夫」
岸里はそう言うが、落ち着かなさそうに視線をさ迷わせていた。
「じゃあ、離すけどいい？」
「え！？え、ええと……」
「？なんかまずい？」
竜馬は首を傾げて聞いた。
「まずいっていうか、その、おいしいっていうか……」
「？」
すると、その2人のやり取りを見た周囲の班から声が上がった。
「あああっ！」
（り、竜馬さんっ！）

「な、何してるのよ！」

（あああ、アンタって奴は！）

「ズルイ！私もされたい！」

（ああっ、もう腹立たしい！）

周囲から声が上がるなか、３人は平静を装いながら心の中で叫んでいた。ちなみに上からセシリア、鈴、箒である。

「と、とりあえず、大丈夫だから龍東君は戻って。このままだと私、後で何されるかわかんないし……」

「分かったよ（何があるんだろう……？）」

竜馬は心の中で考えながら、岸里から離れた。

「じゃあ起動してみて」

「う、うん」

岸里は竜馬に促されて起動シークエンスを始めると、開いたままだった装甲が閉じて操縦者をロックすると、打鉄が静かに起動音を響かせて姿勢を直した。

「じゃあ次は……」

～数分後～

「それじゃあ装着解除して」

数分後、岸里は起動と歩行が終わった。

「あ、しゃがんで解除してね。でないとまた――「……」――……って、ああっ！」

だが岸里は何を思ったのか、ＩＳを立ったままの状態で装着解除をした。

「な、何してるの！」

「いや、まあ、他の女子の視線が強制力を持っていて……」

「え、何？」

「ゴホンゴホン！……こっちの話」

そう言って、岸里は班の中に戻っていった。ちなみに他の女子というのは竜馬の班の事で、その視線は猛烈に『自分だけいい目を見ていいと思ってるの？』と投げかけているのを、竜馬は知らない。

「……また運ばないといけないなぁ。次は誰かな？」

（……コホン）

すると箒は心の中で咳払いをして気持ちを整えると、なるべく平静を装って告げた。

「私だ」

「あ、箒か」

竜馬は箒の方を向くと、箒は前に出た。

「私はあまり望まないが、安全面を考慮すると仕方がない。私はあまり望まないが、仕方がないな」

箒は“とりあえず仕方がない”ということを強調しておくと、さっきの岸里の姿を見て思った。

（あ、あれが伝説の《お姫様抱っこ》というやつか……！なんというか、……良い……ではなく！男女があのように密着するなど本来あってはならない事だろう！……しかし、まあ、安全面を考慮すれば仕方がないこと。そう、仕方がないことなのだ）

「……箒？」

「あー、ゴホンゴホン！」

「……風邪かい？」

「いや、なんでもない」

箒は必死だった。竜馬に運んでもらえると思うと顔が変にゆがんでしまいそうで、その衝動を押さえ込んでいるせいか、その顔はいつもより2割増しで厳しいものに見えた。

「じゃあ抱えるよ」

「う、うむ……（つつ、ついに来た！）」

箒は竜馬の腕が近づくにつれ、心臓がバクバクと激しく打ちはじめ、体温までも上がってしまう程だった。

「よっ、と」

「きゃっ……ゴホンゴホン！」

竜馬が箒を抱えた瞬間、箒はつい反射的に声が出てしまい、それをごまかそうとしてさっきよりも強く咳払いをしてしまった。

（ば、ば、馬鹿者！いきなり抱えるやつがあるか！び、びっくりするではないか……。それにしても、妙に手慣れている気がするが……）

箒は気になってじいっと竜馬の顔を見上げる。

「どうしたの？」

刹那、竜馬は箒の視線に気づいて顔を向けた。

「！い、いや！なんでもない！」

箒は慌てて顔を逸らすと、竜馬は箒に言った。

「箒」

「な、なんだっ！？」

「落ちるから、ちゃんと掴まってね」

「う、うむ……。そ、そうだな。落ちるといけないし、竜馬に掴まるのは仕方がないな……仕方がない」

そう言って、箒は怖ず怖ずと竜馬の体に手を回す。ＩＳスーツは肌に密着するという形状から、触れた指先に竜馬の鍛えられた筋肉を感じて、箒の胸の鼓動がますます早くなった。

「それじゃ……」

竜馬はふわりとわずかに上昇して打鉄のコックピットへと近づいた。

「箒」

「な、なんだ！？」

「早くＩＳに移らないと実習が進まないよ。それとも、もっと近づいた方が――「い、いや！これ以上近づかれるとさすがに私も平常心を……」――…？」

竜馬は首を傾げると、箒は我に返った。

「な、なんでもない！と、とにかく、大丈夫だ」

箒はその言葉通り、竜馬の体から手を離すと打鉄に乗り込んだ。

「大丈夫そうだね。じゃあ起動と歩行までやって――「竜馬」――…ん？なに？」

「そ、その、だな。今日の昼は予定があったりするのか？」

箒は平静を装ってはいるが、その声はいつもよりわずかに高く、どこかしら不安を含んでいるかのような声だった。

「いや、特にはないよ」

「そ、そうか！」

竜馬の言葉に箒はその表情がぱあっと華やぐと、すぐまた落ち着き払っているかのような顔に戻した。

「で、では、たまには昼食を一緒に取るとしよう。うむ、それがいい」

「そうだね。それじゃあ、起動したら歩行してみて」

そんな会話をしながら、箒は打鉄を起動してそのまま歩行へと状態を移した。その作業には一切の無駄がないが、箒の心中では喜びに小躍りしそうなほどだった。もちろん、本人がそれを隠しているので竜馬には伝わらないが。

「問題ないね。さすが箒だ。じゃあしゃがんで――「……」――……って！箒まで！」

箒は竜馬の言葉を最後まで聞かずにすたっと地面に着地して、班の中に戻った。

（あ、あの日からずっとまともに竜馬と話していなかったからな。今日で挽回しなくてはなるまいな♪）

箒は昼休みを楽しみにしながら、午前の実習を過ぎるのを待ったのだった。

（……まさか、みんなしゃがまずに起動解除するのかな……はぁ）

竜馬はそう思いながら、心の中で小さく溜め息をした。そしてそれが的中したのは、言うまでもなかった。

１０話【弁当と認めぬ存在と貴公子の秘密】

◆第２アリーナ・更衣室◆

「ふぅ……」

昼休み前、竜馬は午前の実習を終えて更衣室で制服に着替えていた。

「シャルルも一緒に着替えればいいのになぁ…」

竜馬はそう呟きながら、制服のズボンを着た。
実は竜馬はシャルルと一緒に着替えようと本人を誘ったが、その本人は機体の微調整をしてから着替えると言われて、先に更衣室に来たのだ。

「よう、竜馬」

すると更衣室に入って来たのは、灰色のスーツ姿をした黄金だった。

「黄金さん」

「班長、ご苦労さんだな」

「いえ。……黄金さん。何で教員なんかに？」

竜馬は疑問に思っていた事を黄金に言った。
昨日、影宮に呼ばれたのは“影宮が近日中、ドイツへ出張する”と言っていただけで、黄金が教員に赴任する事は聞いていなかった。

「理由は２つ……」

すると、黄金は小声で話してきた。

「１つは、クラス対抗戦で乱入してきた無人ＩＳの事件があっただろ。アレが学園のアリーナ管理システムをごちゃごちゃにしやがったから、影宮局長に言われてメルダで使われてる管理システムを導入する為に来たんだ」

「もう１つは？」

「そんな異常事態が起こった時に備えての戦力……と言えばいいかな？」

「なるほど。確かに《メルダ三任衆》の黄金さんがいれば安心ですね」

「ハハハ、こやつめ！」

竜馬の言葉に黄金は笑って答えた。

ちなみに竜馬の言ったメルダ三任衆とは、ＩＳ武器開発局主任・ＡＩ開発部主任・販売部主任の３人で、軍人以上の高い戦闘力を持っている主任達の事である。

「んじゃ、オレは職員室に戻る」

「はい。黄金さん、頑張って下さい！」

竜馬はそう言うと、黄金は振り向かずに右腕を挙げて更衣室を出た。

「さて、僕も行くかな」

そして竜馬は着替え終わると、頭をタオルで拭きながら更衣室を出た。

◆昼休み　屋上◆

「んーっ！……いい風だなぁ。ねえ、箒」

昼休み、竜馬は屋上に到着すると背伸びをして屋上から吹く優しい風を感じていた。

「……どういう事だ」

「ん？天気がいいから屋上で食べるって話だったでしょ？」

「いや、そうではなくてだな……」

しかし箒はそんな風を無視してちらっと横に視線をやると、セシリア・鈴・シャルルが円テーブルの椅子に座っていた。どうやらセシリアと鈴は、箒と同じ事を考えていたようだ。ちなみにシャルルは竜馬に誘われたのだった。

「せっかくのお昼御飯だし、大勢で食べた方が美味しいでしょ。それにシャルルは転校してきたばかりで、右も左も分からないだろうし」

「そ、それはそうだが……ぐぬぬ」

箒は何かを言いたげにしながら持ち上げた拳を握りしめ、同じテーブルの椅子に座った。その手には包みにくるんだ手作り弁当が２つ握られていた。

「はい竜馬。アンタの分」

竜馬も椅子に座ると、鈴がタッパーを竜馬に渡した。

「おお、酢豚だ！美味しそう」

「そ。今朝作ったのよ♪アンタ前に食べたいって言ってたでしょ」

「昔言った事を覚えててくれたんだ。ありがとう、鈴」

竜馬は笑顔で御礼を言うと、鈴は頬を赤くした。

「コホンコホン……」

すると、セシリアはテーブルにバスケットを置いて竜馬に言った。

「竜馬さん、わたくしも今朝はたまたま偶然何の因果か早く目が覚めまして、こういうものを用意してみましたの。よろしければおひとつどうぞ」

そう言ってセシリアはバスケットを開くと、そこにはサンドイッチが綺麗に並んでいた。

「おお、これも美味しそうだ！ありがとう、セシリア」

同じく笑顔で言うと、セシリアも頬を赤くした。

「……」

「お、箒のは何かな～」

箒は無言で竜馬に弁当を渡すと、竜馬は弁当を開けた。

「おお！」

竜馬は弁当の中身を見て嬉しそうに驚いた。弁当の中身には、鮭の塩焼きに鶏肉の唐揚げ、こんにゃくとゴボウの唐辛子炒め、ほうれん草の胡麻和えという何ともバランスの取れた献立だった。

「これは凄いね！どれも手が込んでそうだ」

「つ、ついでだついで。あくまで私が自分で食べる為に時間を掛けただけだ」

「そうだとしても嬉しいよ。箒、ありがとう」

「ふ、ふん……」

竜馬に御礼を言われて何でもないようにしながらも、箒は嬉しそう

な表情だった。

「ええと、本当に僕が同席してよかったのかな？」

すると、シャルルが遠慮そうに言った。

「いいんだよ。それに男子同士仲良くしようよ。色々不便もあるだろうけど、協力してやっていこう」

「…ありがとう。竜馬って優しいね」

「どういたしまして」

2人は笑顔で言うと、ふと竜馬は言った。

「決めた！今度、僕が4人の弁当を作るよ」

「「「「えっ」」」」

竜馬以外が驚くと、鈴が話し掛けた。

「アンタ、料理出来るの？」

「うん。白黒さんや影宮さんは泊まり込む事が多いから、よく自炊をしたよ」

「へぇ～…」

竜馬の言葉に鈴は驚くと、シャルル以外の3人は心の中で思った。

（竜馬の手作りか……。これは弁当を作った甲斐があったな）

（竜馬さんの手作り……。楽しみですわ♪）

（料理が出来てＩＳも動かせるって……どんだけ才能に恵まれてるのよ）

そんな中、シャルルが竜馬に話し掛けた。

「みんなの分を作るのは分かるけど、僕の分は……」

「いいんだよ。これからルームメイトになるんだし、ついでだよ」

「…ありがとう♪」

シャルルが笑顔で御礼を言うと、箒が話し掛けた。

「さて、話はこのくらいにして昼食にしよう。いつまでも談笑していられる程、昼休みは長くはない」

「そうだね。それじゃあ……」

「「「「「いただきます」」」」」

５人は食事を始めると、竜馬は唐揚げを持とうとしたらある事に気がついた。

「箒、なんでそっちに唐揚げがないの？」

「！こ、これは、だな。ええと……、わ、私はダイエット中なのだ

！だから、1品減らしたのだ」

箒は視線を泳がしながら言った。だが実際は唐揚げの半分を焦がしてしまった為、竜馬の弁当にだけ入れたのが真実である。

「そうなの？……むむっ！美味しい！」

唐揚げを一口頬張った竜馬は、その美味さに驚いた。冷めてはいるが衣はパリッとしており、噛むたびに口の中に広がる肉汁の後味はしつこくなく、飲み込むとすぐに次の唐揚げが食べたくなる程の美味さだった。

「これって結構仕込みに時間掛けてないかい？……んぐ、混ぜてるのは生姜と醤油と……何だろう？」

「おろしニンニクだ。それとあらかじめコショウを少しだけ混ぜてある。隠し味には大根おろしが適量だな」

「へえ！今度僕もやってみよう」

そして食べかけの唐揚げを食べると、竜馬は箒に言った。

「本当に美味いな。箒、食べなくていいの？」

「……失敗した方は、全部自分で食べたからな……」

「ん？」

箒は小声で言うと、竜馬は聞き取れず首を傾げた。

「あ、ああ、いや、大丈夫だ。まぁ、なんだ……。美味しかったのなら、いい」

「本当に美味いから箒も食べよ、ね」

竜馬はそう言うと、唐揚げを女子が食べる1口サイズに切って箸で持ち上げた。もちろん、落とさないように左手を添えながら。

「な、なに？」

「はい。食べてみてよ」

「い、いや、その、だな……」

箒は頬を赤くしながら、困ったような顔で自分の弁当と竜馬の箸を交互に見る姿は、いつもの刀の如き鋭さはなかった。

「「……」」

「ほら。箒、食べてみてよ」

「い、いや、その……だな。ううむ……」

竜馬はセシリアと鈴にじとーっとした目線を送られるなか箒に唐揚げを勧めると、シャルルは何か思い出したように話し出した。

「あ、これってもしかして日本ではカップルがするっていう『はい、あーん』っていうやつなのかな？仲睦まじいね」

「「なっ！？」」

シャルルがそんな事を言って納得したように微笑むと、鈴とセシリアがシャルルに食ってかかった。

「だ、誰がっ！何でこいつらが仲いいのよっ！？」

「そっ、そうですわ！やり直しを要求します！」

そんな状況でもシャルルは笑顔を絶やさず、ある提案を思い付いた。

「それならこうしよう。みんな、１つずつおかずを交換しようよ。食べさせあいっこならいいでしょう？」

「ん？僕はいいよ」

「わ、私もいいぞ……」

「ま、まあ、竜馬がいいって言うんならね。付き合ってあげてもいいけど」

「わたくしは本来ならばそのようなテーブルマナーを損ねるような行為は良しとはいたしませんが、今日は平日でここは日本、『郷に入っては郷に従え（ゴーイング・ゴウ）』ですわね」

「じゃ、早速もーらいっ！」

「あ、こら！」

全員参加が決まると、いきなり鈴が竜馬の箸から唐揚げを奪った。

「う！な、なかなかやるわね。なかなか」
「ふっ。和の伝統を重んじればこそだ」
箒は鈴に余裕の表情を見せると、竜馬は困った顔で箒に言った。
「あー……ごめん箒。今ので唐揚げ、僕が口付けたのしか無くなった」
「そ、そうなのか？」
「うん。いくらなんでも男が口付けた食べ物って嫌でしょ？あっ、でもそうなると他に出せるおかずがないなぁ……」
竜馬がそう言うと、箒は小さな声で言った。
「……でも、いいぞ……」
「箒？」
「べ、別に、口がついていてもいいぞ……。私は気にしない」
「うん？そうなんだ。じゃ、はいあーん」
「あ、あーん……」
箒は多少ぎこちないながらも唐揚げを頬張ると、頬を赤くしながら言った。
「い、いいものだな……」

「でしょ？美味いよね、この唐揚げ」
「唐揚げではないが……うむ。いいものだ」
「「竜馬ぁ！！（さん！！）」」
すると、それを見た鈴とセシリアが竜馬に押し寄せた。
「はい、酢豚食べなさいよ酢豚！」
「サンドイッチもどうぞ！１つといわずにどうぞ全部！」
「「さあ！」」
「それじゃあ、まず酢豚をもらうね」
そう言いながら２人は竜馬の前に料理を差し出すと、竜馬は鈴の酢豚を食べた。
「うん、美味い……って、鈴。なんで鈴の酢豚は温かいの？」
「ご飯を買ってきた時に電子レンジで温めなおしたからよ」
「なるほど……」
竜馬は納得すると、次はセシリアがバスケットからサンドイッチを取り出した。
「では、わたくしの手作りサンドイッチもどうぞ」

「ありがとう」

セシリアがはにかみながら竜馬にサンドイッチを差し出すと、竜馬は一口頬張った。

「……！？」

しかし頬張った瞬間、竜馬に衝撃が走った。

（×●■▲★qあｗせｄｒｆｔｇｙふじこｌｐ；@：！！１！……

……あ、甘い。ＢＬＴサンドなのに……異常に甘い……）

この時、竜馬は初めて知った。実家が由緒正しい名家……超金持ちの令嬢であるセシリアは、料理がからっきしダメな事を……。

「どうかしら？」

セシリアは購買で買ったパンを持ちながら聞いてくると、竜馬はしどろもどろに言った。

「う、うん、いいんじゃ……ない、かな……。ぼ、僕は好きだよ」

「そうですか！では、残りもどうぞ！」

セシリアは表情が華やぐと、ずずいっと竜馬にバスケットごと渡した。

「あ、ありがとう……」

こうして竜馬はみんなから貰った昼ご飯を残さず食べて、午後の授業まで談笑を楽しんだのだった。

〜十数分後〜

◆学園内◆

「あー……、食べ過ぎたかな……」

あれから昼食が終わった竜馬は、午後の授業である訓練機の整備を行う為に第1アリーナの更衣室に向かっていた。ちなみにシャルルは忘れ物を取りに教室へ向かっていた。

「授業まであと15分位か……。早く着替えたら間に合――「何故こんなところで教師など！」――…ん？」

すると中庭から声が聞こえ、竜馬は木の陰から覗いた。そこにはラウラが千冬に話し掛けていた。

「やれやれ……、何度も言わせるな。私には私の役目がある。それだけだ」

「このような極東の地で何の役目があるというのですか！」

（……ボーデヴィッヒさんがあんなに声を荒げるなんて）

竜馬はそう思いながら、ラウラはさらに千冬の仕事についての不満や思いの丈をぶつけていた。

「お願いです、教官。我がドイツで再びご指導を。ここでは貴女の能力は半分も生かされません」

「ほう、何故だ？」

「この学園の生徒など、教官が教えるにたる人間ではありません。意識が甘く、危機感に疎く、ＩＳをファッションかなにかと勘違いしている。そのような程度の低い者達に教官が時間を割かれるなど――「そこまでにしておけよ、小娘」――…っ……！」

千冬はラウラの言葉を遮り凄味のある声で言うと、さすがのラウラもその声に含まれる覇気に竦み、言葉は途切れたままだった。

「少し見ない間に偉くなったな。１５歳でもう選ばれた人間気取りとは恐れ入る」

「わ、私は……」

ラウラは千冬に２つの恐怖を感じていた。圧倒的な力の前に感じる恐怖と、かけがえのない相手に嫌われるという恐怖を……。

「……さて」

すると、千冬は声色を戻してラウラに話した。

「もうすぐ授業が始まるな。さっさと格納庫に行けよ」

「……」

そしてラウラは黙したまま、早足でその場を去っていった。

「……そこの男子、盗み聞きか？」

ラウラが去ると千冬は竜馬がいる方を向いて言うと、竜馬は無言で千冬の前に出た。

「まったく……異常性癖は感心しない――「織斑先生…」――…ん？」

すると竜馬は俯きながら言った。

「…ボーデヴィッヒさんがあんなになったのって、僕のせいですよね。僕と影宮さん達が巻き込まれたテロのせいで、あんなに……」

「……」

―バシーン！―

「痛っ！？」

すると千冬は竜馬の頭を出席簿で叩いた。

「あまり考え込むな、馬鹿者。お前が小さい頃、師匠に頼まれているからな……。それを果たしたまでだ……」

「父さんが……」

竜馬は千冬の言葉を聞いて懐かしんだ。幼い頃に亡くした、自分に剣術や仲間を守る事を教えてくれた父親の事を……。

「そら、走れ少年。このままじゃ次の授業に遅刻するぞ……」

ニヤリと笑みを竜馬に見せた千冬の顔は、小さい頃に本当の姉のように接してくれた優しい顔だった。

「はい。それじゃあ……」

「おう。……ああ、それと龍東」

「はい？」

すると千冬は、くるりと竜馬に背を向けて言った。

「廊下は走るな……とは言わん。バレないように走れ」

「…はい！」

そう言われて、竜馬は更衣室の道のりをバレないようにダッシュして、午後の授業を受けたのだった。

◆夜　竜馬・シャルルの部屋◆

「じゃあ、改めてよろしくね」

夕食を終えた竜馬とシャルルは部屋に戻ってくると、食後の休息をかねてシベラーとイマージュを紹介していた。

『貴方が噂のデュノア殿ですか。ワタクシはシベラーと申します。そしてこっちが…』

『俺はイマージュだ。よろしくな！』

「うん。よろしく、みんな」

『ヌハッ！』

シャルルが柔らかな笑みを浮かべると、イマージュは変な声を出してしまった。

（な、何だこの笑顔……一瞬ドキッとしちまったじゃねえか……。男にドキドキするなんて、俺はノーマルだぞ……）

『…イマージュ？』

『お、おう！』

『何か考え込んでいましたが、どうかしたのか？』

『い、いや、何でもないぞ……』

イマージュとシベラーがそんなやり取りをしていると、シャルルは竜馬が入れた日本茶を飲んでいた。

「紅茶とはずいぶん違うんだね。不思議な感じだけど、おいしいよ」

「気に入ってもらえて嬉しいよ。今度、機会があったら抹茶でも飲みに行こうよ」

「抹茶って、あの畳の上で飲むやつだよね？」

『デュノア殿。抹茶は『たてる』と言いますよ』

すると、シベラーが2人の会話に混ざった。

「ふうん、そうなんだ」

「今は駅前に抹茶カフェがあるんだ。コーヒーみたいな感覚で飲めるやつがね」

「じゃあ、今度誘ってよ。1度飲んでみたかったんだ」

「そうだね。ついでに色々案内するよ」

『せっかくですから、今週末の日曜にでも出かけてはどうでしょうか』

「本当？嬉しいなあ。ありがとう」

『ヌァッハッ！』

シャルルの笑みに、またもや変な声を出すイマージュであった。

「そういえば竜馬は放課後にＩＳの訓練をしてるって聞いたけど、そうなの？」

「まあね。箒達と一緒にしてるんだよ」

竜馬は箒・セシリア・鈴と共に、放課後は模擬戦等をしていた。ちなみに模擬戦でのトータル勝率は１位が竜馬、同率２位がセシリアと鈴、４位が箒である。

「僕も加わっていいかな？何かお礼がしたいし、専用機もあるから少しくらいは役に立てると思うんだ」

「それはありがたい話だね。ぜひ頼むよ」

「うん。任せて」

『イヤッフゥゥゥッ！』

『イ、イマージュ！』

またもや（以下同文）のイマージュだった。

～数日後～

◆放課後　学園システム管理室◆

「……ふぅ、《Ｔ－５ＫＡＤ・システム》導入率８２％……あと少し」

シャルルとラウラが転校してきて５日後の土曜日、黄金は学園システム管理室で１人システム変更をしていた。

「お疲れ様です、黄金くん。少し休んだらどうですか？」

すると真耶が軽食のおにぎりを持って入室してきた。

「ありがとうございます、山田先生。学年別トーナメントが始まる頃には完成できますので、もう少しのご猶予を……」

そう言いながら黄金はおにぎりを口にした。ちなみに、中身は梅干しである。

「このシステムって、メルダと同じなんですか？」

真耶は画面を見つめながら言った。

Ｔ－５ＫＡＤ・システム（通称てらかど）とは、衛星軌道上にいる衛星型ドロイドによる管理システムで、辺りの監視や高レベル権限

を持つ部屋の管理、危険を侵す者にはてらかどによる制裁が降されるシステムである。

「このてらかどのおかげで、メルダで事件が起こった事はありませんね…」

「そうですかー。今はどんなシステムが使えますか？」

「ある程度は出来ますよ。あとはこのシステムを管理するＡＩを導入して、最終チェックをするだけっすね」

そう言いながら、黄金はステージの様子を映し出した。そこでは竜馬達が訓練をしていた。

ちなみに竜馬・シャルル・セシリアは射撃訓練、箒・鈴は格闘訓練をしている。

「デュノア君、龍東くんや皆さんとも仲良くなれてよかったですね…」

（……デュノア君、ねぇ…）

真耶はそう呟くと、黄金はシャルルを疑いの眼差しで見ながらおにぎりを完食した。

◆第１アリーナ・ステージ◆

その頃、竜馬はシャルルの近くに来て話しをしていた。

「そういえば、シャルルのＩＳってリヴァイヴだよね？山田先生が操縦していたのとだいぶ違うけど……」

竜馬は気になっていた事をシャルルに話した。

一般のリヴァイヴはネイビーを主色に４枚の多方向加速推進翼（マルチ・スラスター）が特徴なシルエットをしているが、シャルルのＩＳは色だけではなく全体のフォルムからして違っていた。

背中に背負った一対の推進翼、一般のリヴァイヴのアーマー部分よりも小さくシェイプアップされているうえに、マルチウェポンラックとして大きなリアスカートがついている。

そして何より違うのが肩部分のアーマーで、本来ついている４枚の物理シールドが全て取り外されており、その代わりに左腕にシールドと一体化した腕部装甲が付けられ、逆に右腕は射撃の邪魔にならない為にスキンアーマーだけになっている。

「ああ、僕のは専用機だからかなりいじってあるよ。正式にはこの子の名前は《ラファール・リヴァイヴ・カスタム？》。基本装備をいくつか外して、その上で拡張領域を倍にしてあるから、今量子変換してある装備だけでも２０くらいあるよ」

「へぇ……、オーバーズみたいだな。僕のも装備が多いけど、全部がメルダ社製だから容量がでかいんだよ」

２人はそんな話をしていると、ステージ内にいる生徒達がざわつき

はじめていた。

「ねえ、ちょっとアレ……」

「……」

竜馬はざわつきの注目の的に視線を移すと、そこにいたのはラウラだった。

「ウソっ、ドイツの第3世代型だ」

「まだ本国でのトライアル段階だって聞いてたけど……」

生徒達がざわつくなか、竜馬はオーバーズから送られたラウラが乗っている漆黒のＩＳの情報を見た。

┳ 待機状態のＩＳを感知。操縦者、ラウラ・ボーデヴィッヒ。ＩＳネーム《シュヴァルツェア・レーゲン》。戦闘タイプ中距離砲撃型。特殊機能有り ┻

竜馬は情報を見ながらシュヴァルツェア・レーゲンを見た。
右肩に取り付けられた大型カノン、両肩に搭載されている左右一対の刃を装備している。

「おい」

すると、ラウラがＩＳのオープン・チャンネルを開いて竜馬に話し掛けてきた。

「…なにかな？」

竜馬は返事をすると、ラウラは言葉を続けながらその場からふわりと飛翔した。

「貴様も専用機持ちだそうだな。ならば話が早い。私と戦え」

「……」

竜馬は黙ると気持ちが曇るなか、ラウラはその冷たい眼差しを向けながら話し続けた。

「貴様達が巻き込まれなければ、教官が大会2連覇の偉業をなしえただろう事は容易に想像できる。だから、私は貴様を……貴様の存在を認めない」

「…あの日の事は今でも忘れた事はないよ。でもね、今は無理だ……」

そう言って、竜馬はラウラに背を向けた。

「ならば……戦わざるを得ないようにしてやる！」

―ドカァン！―

刹那、ラウラは大型カノンを回転して砲口を竜馬に向けると火を噴いた。

―ドガギンッ！―

「……っ」

「……だから、今は君と戦いたくないんだ」

竜馬はラウラの砲撃を展開した高電圧ハンマー《タケミカヅチ》で弾くと、ラウラを鋭く睨みつけて言った。

「なら――「こんな密集空間でいきなり戦闘を始めようとするなんて、ドイツの人は随分沸点が低いんだね。ビールだけでなく頭もホットなのかな？」――……貴様」

ラウラの言葉に割り込んで、シャルルは右腕に展開したアサルトカノン《ガルム》をラウラに向けていた。

「フランスの第2世代型（アンティーク）ごときで私の前に立ち塞がるとはな」

「未だに量産化の目処が立たないドイツの第3世代型（ルーキー）よりは動けるだろうからね」

互いに涼しい顔をした睨み合いが続くと、その間から空中投影ディスプレイが出現した。

『あまり感心できないな、お前達』

そこに映っていたのは黄金だった。

『ボーデヴィッヒ。密集空間での砲撃はやめろよ。それと竜馬、弾

くより防げよ』

「…すみません」

黄金は2人にそう言うと、ディスプレイは消えてしまった。

「……ふん。今日は引こう」

そしてラウラは、横槍を2度も入れられて興が削がれてしまい、戦闘態勢を解除してアリーナゲートへと去って行った。

「竜馬、大丈夫？」

「……うん」

シャルルはラウラと対峙していた眼差しをなくし、人懐っこい顔で竜馬の顔を覗き込んだ。

「今日はもうあがろっか。４時を過ぎたし、どのみちもうアリーナの閉館時間だしね」

「そうだね。今日はありがとう。また一緒にやろう」

「うん」

シャルルはにっこりと微笑むが、だんだんとぎこちなく話した。

「えっと……じゃあ、先に着替えて戻ってて」

（またか……）

竜馬は心の中で呟いた。
そう、この5日間シャルルは実習後の着替えを竜馬と一緒にしたがらず、竜馬は距離を感じていた。

「たまには一緒に着替えようよ」

「い、イヤ」

「……つれないなぁ」

「つれないっていうか、どうして竜馬は僕と着替えたいの？」

「なんでって――「はいはい、アンタはさっさと着替えに行きなさーい」――…ぐぇっ！り、鈴。分かっ、分かったから首根っこは掴まないで…」

そして竜馬は鈴に引きずられながらゲートに向かった。

◆第1アリーナ・更衣室◆

「よし、着替え終わり」

竜馬は鈴と別れた後、自分の制服がある更衣室で着替えを終えていた。

「あのー、龍東君とデュノア君はいますかー？」

すると、更衣室のドア越しから真耶の声が聞こえた。

「龍東だけいます。着替えは済んでますので、入っても大丈夫です」

「そうですかー。それじゃあ失礼しますねー」

そしてドアが開くと真耶が入ってきた。

「デュノア君は一緒ではないんですか？」

「まだステージの方にいます。もうピットまで戻ってるかもしれませんけど、何かあったんですか？」

「ええとですね、今月下旬から大浴場が使えるようになります。時間帯別にすると色々と問題が起きそうだったので、男子は週に2回の使用日を設ける事にしました」

「そうなんですか。ありがとうございます、山田先生」

竜馬は笑顔で言った真耶に頭を下げた。

「……竜馬？何してるの？」

すると、シャルルが更衣室に入ってきた。

「まだ更衣室にいたんだ。先に戻ってって言ったよね」

「あ、ああ。ごめん」

竜馬はシャルルの言葉に刺を感じるが、先程真耶が言っていた連絡を話した。

「シャルル。今月下旬から大浴場が使えるらしいよ！」

「……そう」

シャルルは竜馬を横目で見ながら頭をタオルで拭くと、真耶が竜馬に話し掛けた。

「ああ、そういえば龍東君。黄金先生が呼んでいましたから職員室に来てくれますか？何か影宮さんから預かっていた書類を渡すようなので」

「黄金先生が？……分かりました。じゃあシャルル、ちょっと長くなりそうだから今日は先にシャワーを使っていいよ」

「うん。分かった」

シャルルは返事をすると、竜馬は真耶と共に更衣室を出た。

◆夕方　竜馬・シャルルの部屋◆

『お帰りなさいませ、デュノア殿』

「……」

シャルルは部屋に戻ってくるがシベラーの返事を返さず、自分のベッドに寝転んだ。

『……デュノア殿？』

「えっ？あ、ごめん。何かな？」

『はい。実はワタクシ達、黄金殿に呼ばれましたので部屋を出ますね』

「そう。いってらっしゃい」

『では…』

『いってくるぜ』

シベラーとイマージュは部屋を出ると、シャルルは1人になった。

「……。はぁっ……」

すると、シャルルははき出すように溜め息を漏らした。それまで我慢していたせいかなのか、無意識に出たそれは思ったよりも深く、本人が驚くくらいだった。

（何をイライラしているんだか……。それに、あんな態度をしちゃったし……きっと…）

きっと竜馬も面食らっていたに違いない。
シャルルはそう思うと、ますます落ち込みに拍車が掛かる。

「……。シャワーでもして気分を変えよう」

そしてシャルルはベッドから起きると、クローゼットから着替えを取り出してシャワー室へと向かった。

～数十分後～

「ただいまー。って、あれ？シャルルがいないな」

あれから少し経ち、竜馬が何か未開封の資料を持って戻ってきた。
ちなみに黄金に呼ばれた理由は、先程のラウラとの衝突を改めて注意された事、てらかどの作業を進める為にシベラーとイマージュを

貸し出した事、そして影宮に渡された“バースＣＬＡＷｓの特性が書かれた資料”を竜馬に渡す為に呼ばれたのだ。

「どこ行ったんだろ。……ん？」

竜馬は机に資料を置くと、シャワー室から響く水音に気がついた。

（シャワー中かぁ。……あ、そういえば、確か昨日ボディーソープが切れたって言ってたっけ）

それを思い出した竜馬はクローゼットから予備のボディーソープを取り出し、シャワー室の脱衣所まで持って行きドアを開けた。

―ガチャ―

すると、シャワー室を開けた後にシャワールームのドアが開いた。

（あぁ、きっとボディーソープを探しに来たんだね）

そう思った竜馬はボディーソープを持って言った。

「あ、ちょうどよかった。これ、替えのボディー――「り、り、竜……馬……？」――……ウェッ？」

竜馬は振り向いた瞬間、思考が停止した。

何故停止したかと言うと、シャワールームにいたのは竜馬が見たことのない“裸の女子”だったからだ。

「きゃあっ！？」

「っ！？」

ハッと我に返った女子が慌てて胸を隠しながらシャワールームに逃げ込むと、竜馬も同じく我に返った。

「……えーと……」

「……」

「ぼ、ボディーソープ、ここに置いとくよ……」

「う、うん……」

竜馬はまだ思考が回復してないが、シャワールームのドア前にボトルを置いて脱衣所を出て自分のベッドに腰掛けた。

（な…、何でこの部屋に女子がいるの！？部屋を間違えた？いやここは僕とシャルルが居る部屋だし番号も間違って……待てよ？）

そう考えていると、先程見た女子の姿を思い出した。

中性的に整った顔、アメジストの瞳、そして濃い金髪……。それらを兼ね備えた人物が、竜馬は1人だけ知っていた。

―ガチャ―

「！？」

竜馬は控えめに開いたシャワー室のドアの音に思わず体が強張ると、そこから先程の女子が出て来た。

「あ、上がったよ……」

その言葉に竜馬はゆっくりと後ろを振り向くと、いつも目に入っているスポーツジャージを着た女子がいた。

「……シャルル？」

竜馬はそう言うと、女子は小さくゆっくりと頷いた。

そう……シャルルは、女子だった。

～数十分経過～

「「……」」

あれから数十分が掛かるが、竜馬とシャルルはお互いのベッドに腰掛けて向かい合ったまま、視線はそれぞれさ迷っていた。

「…えっと、その……」

竜馬は埒が明かないと思い、シャルルに声を掛けた。

「…お茶しない？」

「う、うん。もらおうかな……」

シャルルの言葉を聞くと、竜馬は電気ケトルでお湯を沸かしてそれを急須へと注いだ。

「「……」」

お茶ができるまでまた沈黙の再来だが、数分後、湯飲みにお茶を注いでシャルルに手渡した。

「はい。熱いから気をつけてね」

「あ、ありがと……きゃっ」

だが、渡す時に2人の指先が触れ合ってシャルルが慌てて手を引っ込めると、竜馬は湯飲みを落としそうになり、握り直した反動でお茶が手にかかってしまった。

「あちっ！水っ、水っ」

竜馬は急いで水道のところまで行き蛇口を全開すると、流れ出した水で手を冷やした。

「ご、ごめん！大丈夫？」

「う、うん。すぐに冷やしたから火傷にはならないよ」

「ちょっと見せて。……ああ、赤くなってる。ゴメンね」

シャルルは竜馬の側に来ると、その手を強引に取って痛々しげな表情で見つめていた。

「大丈夫だから心配しないで……ね？」

「でも――「それより、その……。さっきから胸が……」――…胸？……っ！！！！」

シャルルは竜馬の言葉を聞くと、やっと自分の態勢を理解して竜馬から飛び退くように離れると、胸を隠すように自分の体を抱き、若干弱々しく女子特有の抗議の眼差しを送ってきた。

「……心配しているのに……竜馬のえっち……」

「うっ……ご、ごめん……」

竜馬は頭を下げてシャルルに謝るが、シャルルの眼差しは抗議だけでなく、恥ずかしそうでそのくせどこか嬉しそうな表情をしていたのを竜馬は知らない。

「……ここまで冷やせば大丈夫かな。じゃあ、改めて」

「う、うん」

竜馬は再びシャルルに湯飲みを渡すと、受け取ったシャルルがこく

りと一口お茶を口にすると、同じように竜馬も喉を潤した。

「ふぅ……」

竜馬は一息付くと、先程から疑問であった事をシャルルに言った。

「なんで男のフリを……？」

「……実家の方からそうしろって言われて……」

「実家っていうと、デュノア社の……」

「そう、僕の父がそこの社長。その人から直接の命令なんだよ」

「……？」

顔が顕著に曇りだしたシャルルの言葉に、竜馬は違和感を感じていた。

「命令って……親なんでしょ？なんでそんな――「僕はね、竜馬。愛人の子なんだよ」――……！！」

竜馬はシャルルの言葉に絶句すると、シャルルは続けて話し出した。

「引き取られたのが2年前。ちょうどお母さんが亡くなった時にね、父の部下がやってきたの。それで色々と検査をする過程でＩＳ適応が高いことが分かって、非公式ではあったけれどデュノア社のテストパイロットをやることになってね……」

言いたくはないであろう話をそれでも健気に喋るシャルルに、竜馬

は耳を傾けるために目を閉じてしっかりと話を聞いた。

「父にあったのは2回くらい。会話は数回くらいかな。普段は別邸で生活をしているんだけど、1度だけ本邸に呼ばれてね。あの時はひどかったなぁ……。本妻の人に『泥棒猫の娘が！』って言われて殴られたよ。参るよね。お母さんもちょっとくらい教えてくれたら、あんなに戸惑わなかったのにね。あはは……」

「……」

シャルルは乾いた愛想笑いをすると、竜馬は何かを堪えるように拳をきつく握りしめた。

「それから少し経って、デュノア社は経営危機に陥ったの。第3世代型を開発していたんだけど、元々遅れに遅れての第2世代型最後発だから、圧倒的にデータも時間も不足していて、なかなか形にならなかったんだよ。それで、政府からの通達で予算を大幅カットされて、次の欧州連合統合防衛計画（イグニッション・プラン）のトライアルで選ばれなかった場合は援助を全面カット、その上でＩＳ開発許可も剥奪するって流れになったの……」

その話で竜馬は目をゆっくりと開けると、シャルルに言った。

「……それがどうして男装に繋がるの？」

「簡単だよ。注目を浴びる為の広告塔。それに……」

するとシャルルは竜馬から視線を逸らし、どこか苛立ちを含んだ声で話し続けた。

「……同じ男子なら日本で登場した特異ケースと接触しやすい。可能であればその使用機体と本人のデータを取れるだろう……ってね」

「それは、つまり……」

「そう、オーバーズのデータを盗んでこいって言われているんだよ。僕は、あの人にね……」

竜馬はシャルルの話を聞いて解った。その父親は、たまたまＩＳ適応があったシャルルをただ一方的に利用している事を、それくらいにしか感じていない事を……、竜馬は解ったのだ。

「とまあ、そんなところかな。でも竜馬にばれちゃったし、きっと僕は本国に呼び戻されるだろうね。会社は、まぁ……潰れるか他企業の傘下に入るか、どのみち今までのようにはいかないだろうけど、僕にはどうでもいい事かな…」

「……」

「ああ、なんだか話したら楽になったよ。聞いてくれてありがとう。それと……今までウソをついていて、ゴメンね」

シャルルは深々と頭を下げると、なにもかも諦めた思いをしていた。

（これでいいんだ、もう……。竜馬にウソを付くのも疲れたし……もう騙したくない。せっかく友達になれたのに、こんな形で終わるなんてね……）

「……シャルル」

「？……！？」

すると、竜馬がシャルルの頭を優しく撫でながら言った。

「ありがとう、話してくれて。それと、ごめん……」

「どうして竜馬が謝るの？僕は竜馬を騙してたんだよ……」

「…シャルルがこんなに思い悩んでいたのに、僕は気付けなかった……っ！…情けないな。友達の気持ちを、理解出来なくて……」

竜馬は後悔していた。何故、彼女の心の悲しみに気付かなかったのかを……。

「竜馬……」

シャルルは、自分の事でこんなにも悔やんでくれている竜馬を見つめて涙が静かに頬へと流れると、竜馬はその涙を指で拭った。

「シャルル、もうそんな悲しい顔をしないで。いつもの優しい笑顔に戻って……ね？」

「竜、馬……。うっ、うぅ……」

そしてシャルルは竜馬の胸にすがり付いて静かに泣き、そんなシャルルを竜馬は優しく頭を撫でた。まるで母親が愛しい子を宥めるように……

『……』

そんな中、窓の外から銀色のタカ・カンドロイドが部屋を覗いているのを2人は知らない。

◆学園システム管理室◆

「……」

その頃、黄金は左腕から出現させたディスプレイから竜馬達の様子を見ていた。どうやら銀色のタカ・カンドロイドは黄金の物のようだ。

「やっぱりな……。竜馬以外の男がＩＳを使えるなんて、有り得な……」

すると、黄金は言うのを止めた。

（いや……、あの人も使えるのを忘れちゃいけないな……）

そう考えていると、黄金は視線を横に移した。

『『ムワアアアア～ッ！』』

そこにはシベラーとイマージュが涙という洗浄液を流していた。

『で、でゅのわどぅののがごががあんむぁがなじみばなんで～！（デ、デュノア殿の過去があんな悲しいだなんて～！）』

『ムワアアアア～ッ！』

「……うるせぇ」

黄金は面倒くさそうに呟くと、目線を再びディスプレイに移した。

◆竜馬・シャルルの部屋◆

「……落ち着いた？」

「……うん」

あれから数分後、シャルルはひとしきり泣いて落ち着いたところで竜馬は本題に入った。

「シャルル、これからどうするの？」

「……時間の問題じゃないかな。フランス政府も事の真相を知ったら黙っていないだろうし、僕は代表候補生を降ろされて、よくて牢屋とかじゃないかな」

「そんな……」

竜馬はシャルルの言葉に俯くと、ふと机の引き出しが視線に入った。

「……そうだ！」

竜馬はベッドから腰を上げると、引き出しからテキストを取り出して開くと、あるページを見た。

「……シャルル、何とかなるかもしれないよ！」

「え？」

「“特記事項第２１、本学園における生徒はその在学中においてありとあらゆる国家・組織・団体に帰属しない。本人の同意がない場合、それらの外的介入は原則として許可されないものとする”。……つまり、この学園にいれば、少なくとも3年間は大丈夫だよ。それだけ時間があれば、何とかなる方法だって見つけられるよ」

「竜馬……。ありがとう」

シャルルは竜馬にお礼を言うと優しい笑顔をして、竜馬は照れくさくなって頬を掻きながら言った。

「ま、まあ、とにかく決めるのはシャルルなんだから、考えてみて」

「うん。そうするよ」

（……よかった。やっぱりシャルルは笑顔が似合うな）

竜馬はそう思いながらシャルルに視線を向けると、シャルルとちょうど目が合った。

「ん？どうしたの？」

「あ、その……」

シャルルは竜馬の顔を覗き込むと、竜馬はその無防備な表情と襟元から僅かに見えた胸の谷間に頬を赤く染めた。

「えっと、とりあえず、シャルル……」

「？」

「あの、その、胸元が……ね……」

「え？……あっ！」

竜馬の指摘されて、シャルルは頬を赤くした。

「り、竜馬、胸ばっかり気にしてるけど……見たいの？」

「ウ、ウェッ？」

2人は顔を赤くしたまま黙ってしまった。

『……』

それを見た銀色のタカ・カンドロイドは、その場から飛び立ってしまった。

―コンコン―

「「！？」」

すると、部屋のドアからノックが聞こえて2人揃って身を竦めた。

「竜馬さん、いらっしゃいます？夕食をまだ取られていないようですけど、体の具合でも悪いのですか？」

（セ、セシリア！）

「竜馬さん？入りますわよ？」

竜馬はまずいと思った。もし今のシャルルの姿を見たら、誰だって女子だと分かってしまう。すると2人は、ぼそぼそと小声でやり取りをしていた。

「ど、どうしよう？」

「と、とりあえず隠れないと…」

「わ、分かったよ。とりあえず身を潜めて――「って！クローゼットは違うよ！ベッドベッド！布団の中で大丈夫だから！」――…あ、

ああっ、そっか！」

バタバタと慌ただしく動くと、シャルルはベッドに寝転んで竜馬が布団を被せた。

―ガチャ―

そしてドアが開く音が部屋に響くと、セシリアが入ってきた。

「竜馬さん……あら？デュノアさん、どうかしまして？」

「や、やあセシリア！ど、どうもシャルルは具合が悪いからしばらく寝るんだって。夕食はいらないみたいだし、仕方ないから僕1人で行こうって話をしてたんだよ」

「そ、そうそう……ご、ゴホッ、ゴホッ」

竜馬の言葉にシャルルは布団の中でわざとらしく咳を出した。

「そうですの？では、わたくしもちょうど夕食はまだですし、ご一緒しましょう」

「う、うん。いいよ…」

竜馬はセシリアに感づかれずにすんで、心の中でホッとした。

「ゴホッ。そ、それじゃあごゆっくり」

「あ、ああ…」

「デュノアさん、お大事に。さあ竜馬さん、参りましょう」

セシリアはそう言って、竜馬の腕を取って体を密着しながら部屋を出た。

◆廊下◆

「なっ、なっ、何をしている！？」

竜馬とセシリアは食堂に向かって歩いていると、箒が廊下の端からずんずんと早足でやってきた。

「あら、箒さん。これからわたくし達“一緒に”夕食ですの」

するとセシリアは“一緒に”を強調して言うと、箒が怒りながら話した。

「それと腕を組むのとどう関係がある！？」

「あら、殿方がレディをエスコートするのは当然のことですわ」

（そうだったんだ……）

竜馬は心の中で理解すると、箒が竜馬を睨みながら言った。

「竜馬っ、お前もお前だ！私が食堂で待っていたというのに、どういうことだ！？」

「えー……」

竜馬は箒の言葉に若干困りながら言った。

「ともかく、わたくし達はこれから夕食ですので失礼しますわね」

「ま、待て！それなら私も同席しよう。ちょうどこれから夕食だったのでな」

「あらあら箒さん、１日４食は体重を加速させますわよ？」

「ふん、心配無用だ。私はその分運動でカロリーを消費しているからな」

箒はそう言うと竜馬の横に来た。

「で、では、行くとするか」

「ん？……ウェッ！？」

すると箒は竜馬の右腕に自分の腕を絡んできた。

「……箒さん、何をしてらっしゃるのかしら？」

「男がレディをエスコートするのが当然なのだろう？」

「……仕方ないなぁ。それじゃあ食堂に行こうか」

竜馬は2人に両腕を絡まれながら、食堂に向かって歩きだした。

～十数分後～

「ふぅ……」

あれから時間が経ち、焼き魚定食が乗ったトレイを持っている竜馬は、箒達と別れて自分の部屋に戻っている途中だった。

「シャルル、お腹を空かしてるだろうなぁ……。ん？」

竜馬は何かに気付いた。すると、目の前に銀色のバッタ・カンドロイドが竜馬に近づいてきた。

「これって黄金さんの……。はい、竜馬です」

竜馬はバッタ・カンドロイドを肩に乗せると、黄金に連絡してみた。

『おう、竜馬か』

「どうしたんですか？シベラー達に何かあったので――『いや、あの男装した女子についてだ』――…！！」

竜馬は驚愕すると、黄金は話し続けた。

『安心しろ。誰にも喋らないさ。何せ、竜馬の親友だからな……』

「ありがとうございます。もしかして、シベラー達もこの事を？」

『そうだ。だがあいつらもデュノアの事を応援するようだ。だが、念のためシベラー達はこっちで預かる。それまでは、２人で頑張りな…』

「はい！」

そして銀色のバッタ・カンドロイドはその場を離れ、竜馬は再び歩きだした。

◆夜　竜馬・シャルルの部屋◆

「ただいまー」

「あ、おかえり竜馬」

「はい、これ。お腹が空いてると思って焼き魚定食をもらってきたよ」

「ありがとう。いただくよ」

シャルルはにっこり笑い、竜馬からトレイを受け取りテーブルに置いた。

「……」

するとシャルルは表情が固まってしまうと、竜馬が話し掛けた。

「？どうしたの？暖かいうちに食べた方が美味しいよ」

「そ、そうだね。うん、いただきます」

竜馬はぎこちない笑みを浮かべるシャルルを不思議に思っていた。

「あっ……あっ、あっ……」

「あー…。箸が苦手だったのね」

だが竜馬は、シャルルがぽろぽろとおかずを落として情けない声をあげているのを見てその理由を理解した。

「う、うん……。練習はしてはいるんだけどね。あっ……」

「スプーンでも貰ってこようか？」

「ええっ？い、いいよ、そんな。なんとかこれで食べてみるから」
「遠慮しないで」
「で、でも……」
「シャルル。もうちょっと他人に甘える事を覚えた方がいいと思うよ。そんなに遠慮ばかりしてたら損だよ」
「うう……」
「まあ、いきなりは難しいかもしれないから、最初は僕に頼る事から始めてみたらどうかな？」
「竜馬に？」
シャルルの返事に竜馬は頷いた。
「……話がズレるかもしれないけど、家庭の事情も含めて僕はシャルルの味方だよ。それに、きっとシベラーとイマージュも味方になってくれるさ」
「竜馬……」
シャルルはその言葉が嬉しく思い、竜馬にあるお願いを言ってみた。
「じゃ、じゃあ、あの……」
「スプーンでいい？」

「え、えっと、ね。その……竜馬が食べさせて」

そして、シャルルは竜馬にアゴを引いた上目遣いで言葉を重ねた。

「あ、甘えてもいいって言ったから……」

「よし、それじゃそうしようか」

そう言って竜馬はシャルルから箸を受け取り、先程皿の上に落としていた鰆の身をつまんだ。

「はい、あーん」

「あ、あーん」

シャルルはもぐもぐと咀嚼をすると頬を赤くしていた。

「美味しい？」

「う、うん。美味しいね。じゃ、じゃあ、その、次はご飯がいいな」

「分かった」

そしてまた竜馬は箸でご飯を少し摘むと、受け皿の手を添えてシャルルの口へと運び、ぱくっと食べた。

〜十数分後〜

「そうなんだ。黄金先生も……」
「うん。どうやら気付いてたみたいなんだ……」
シャルルの食事が終わると、竜馬は食堂の帰りに起こった出来事を話していた。
「安心して。黄金さんは誰にも話さないって言ってたから大丈夫だよ」
「竜馬、黄金先生の事を信頼してるんだね」
「ああ。あの人とは、よく訓練に付き合ってもらったからね……」
そういいながら、竜馬は自分のベッドに寝転んだ。
「それじゃあ、電気を消すよ」
「うん……あ！」
すると、竜馬は何かを思い出してベッドから起き上がった。
「ど、どうしたの？」
「大事なことを忘れてた…」
「大事なこと？」

シャルルは首を傾げると、竜馬がシャルルに近づいてきた。

「はい…」

そして拳をシャルルの前に突き出した。

「えっと……、こうかな？」

シャルルも竜馬と同じように拳を作ると、竜馬が自分の拳とシャルルの拳を軽くぶつけた。

「よし！これで僕とシャルルは親友だね！さっき言ったけど、僕と黄金さんはシャルルの味方だ。だから、存分に頼ってね」

「竜馬……。うん♪」

竜馬は笑顔で言うとシャルルも笑顔を見せ、２人はそれぞれのベッドで眠りに落ちていった。

◆深夜　第３アリーナ・ピットゲート◆

「……」

満月が昇る夜、１人の女子がピットゲートで目を閉じて静かに佇んでいた。

（あの人の存在が……その強さが、私の目標であり、存在理由……）

女子は思いながらゆっくりと手を顔に近づけ、左目に着けている黒眼帯を外した。

（何の意味も持たない私は、あの人の……教官のようになりたい……）

女子は思った……。これに、私はなりたいと。
自らの師であり、絶対的な力であり、理想の姿……。
唯一自らを重ね合わせてみたいと感じた存在……。

（ならば、それが完全な状態でない事を許せはしない！）

女子はゆっくりと目を開くと、赤い右目と金色の左目が鈍く光を放っていた。

（龍東　竜馬……。教官に汚点を残させた張本人……）

その女子……ラウラは竜馬の名を心の中で言うと、暗い闘志に火が付いた。

「……排除する。どのような手段を使ってでも……」

ラウラはそう言うと満月を睨みつけ、ピットゲートを出たのだった。

11話【噂と黒雨の暴虐と分身コンボ】

〜ドイツ〜

◆朝　ドイツ国内軍施設研究所◆

「これはこれは影宮様。ようこそ、我らの研究所へ……」

日曜の朝、ドイツ国内軍施設にある研究所に影宮はいた。

「ほぉ……。なかなか興味深い物ばかりですね」

「ありがとうございます」

影宮は資料を見ながら言うと、研究所の所長はぺこりと頭を下げる。

「我らドイツ軍最強の部隊、シュヴァルツェ・ハーゼには最新の技術や兵器を提供しております。1度ご覧になりますか？」

「そうですね。昼頃に見させてもらいま……ん？」

すると、影宮はある資料を見ていると気になった。資料にはシュヴァルツェア・レーゲンに搭載されているプログラムだった。

「所長さん。このプログラムは？」

「はい。ドイツ軍が完成させた強化プログラム、その名も《ヤミー》です」

「ヤミー…」

すると、所長は話しを続けた。

「このヤミーの特徴はどんなＩＳにも搭載可能で、搭載するだけで基本性能を３倍にまで高める事が可能です」

「……凄いですね。メルダでは作れそうにないですよ」

影宮はそう言って席を立った。

「影宮様、どちらに？」

「次の場所に行きましょう。ここはまた後で……」

「では、次はドロイド施設を案内いたします」

「お願いします」

そう言って、２人は部屋を出た。

〔日本〕

◆夕方　学園システム管理室◆

「ふう……。ＡＩ完成度２１％か……」

影宮が研究所にいる頃、黄金は学園に導入する管理システムのＡＩを作っていた。

「……影宮局長、今頃どうしてるかな。……あ」

ふと黄金が呟くと、ダイヤに搭載されている回線に反応がある事に気付き回線を開いた。

「これは……」

するとディスプレイには文章が記載されていた。

［添付されたプログラムの解析を頼む。俺の勘だが、何やら嫌な予感がしてな……頼むぜ、黄金］

「これか……。……ヤミー？」

黄金は添付ファイルを開くと、そこにはヤミー・プログラムがあった。

「嫌な予感かぁ……。影宮局長の勘は当たるからな、調べておくか」

そう呟くと、黄金はダイヤにＵＳＢを挿してプログラムの移動準備をした。

（それに、ドイツ軍には色々と噂があるしな。最近ではＩＳ条約で禁止されているシステムを導入しているんじゃないかって話だし……）

黄金はドイツ軍で噂されている事を思っていると、保存が完了した。

「さて。もうこんな時間か……」

黄金は時間を見ると、夕食の時間になっていた。

「飯でもするか……。……噂といえば…」

黄金は立ち上がりながら言うと、ある事を思い出した。

「学年別トーナメントの優勝者には、竜馬と付き合う事が出来るって噂がされてるなぁ……。本当なのか？」

◆竜馬・シャルルの部屋◆

「へっくしゅんっ！！」

「大丈夫、竜馬？」

同じ頃、竜馬はくしゃみをするとシャルルが心配をした。

「うん。大丈夫だよ（誰か噂でもしてるのかな？）」

―コンコン―

「ん？」

すると、部屋のドアからノックが響いた。

「はーい、誰ですかー」

竜馬はドアを開けると、そこには鈴がいた。

「竜馬、一緒に食堂行こう！」

「あ、もうそんな時間か。いいよ。シャルルも呼ぶから、ちょっと待ってて」

竜馬は一旦戻ると、シャルルにその事を話した。

「シャルル。鈴が一緒に食堂行こうって誘われたけど、シャルルも行こうよ」

「うん。分かったよ」

そして2人は鈴と共に食堂へ向かった。

◆廊下◆

「あ、龍東君だ。やっほー」

3人が歩いていると、本音が竜馬を見つけてぶんぶんと手を振って歩いてきた。

「やー、りゅーくん」

「本音さんも夕飯かい？」

「そうだよー。私と一緒に夕飯しようよ～」

そう言いながら、本音はダボダボのパジャマ姿で竜馬にひっついてきた。その光景は、まるで小型犬が構って欲しくて来客に二足歩行

で接近してくるようだった。

「残念、竜馬はあたし達と夕飯するの」

「わー、りんりんだー。勇気が出そうだね～」

「そ、その呼び方はやめてよ！」

鈴は本音の言ったあだ名に軽くトラウマを刺激されて声を荒げるが、本音はどこ吹く風だった。

「まあまあ落ち着いて……」

「鈴、別に４人で食べてもいいでしょ？」

「……よくないけど……いいわよ」

鈴は２人に説得されてしぶしぶと言い、本音を加えて食堂へと向かった。

◆食堂◆

その頃、食堂では十数名の生徒がスクラムを組んで話をしていた。

「ねえ、聞いた？」

「聞いた聞いた！」

「え、何の話？」

「だから、あの龍東君の話よ」

「いい話？悪い話？」

「最上級にいい話」

「聞く！」

「まあまあ落ち着きなさい。いい？絶対これは女子にしか教えちゃダメよ？女の子だけの話なんだから。実はね、今月の学年別トーナメントで……」

その一団が話すなか、竜馬達が夕食を乗せたトレイを持って空いてるテーブルに座った。

ちなみに竜馬・鈴・本音のメニューは、チキンの香草焼きと山芋と野菜の煮物、だし巻き卵、合わせ味噌汁で、シャルルはペペロンチーノとオニオンスープ、季節の野菜サラダである。

「？なんだかあそこのテーブル、すごい人だかりだね」

シャルルはその一団に気付くと、鈴が言った。

「トランプでもやってんじゃないの？それか占いとかさ」
「……でも今日の盛り上がり方は、いつもより熱気が増してる気がするなぁ」
「だねー」
すると、その一団の中で竜馬の存在に気付いた女子が竜馬達に近づいた。
「あーーーっ！龍東君だ！」
「えっ、うそ！？どこ！？」
「ねえねえ、あの噂ってほんと――「ちょっ、バカ！」――もがっ！」
「い、いや、なんでもないの。なんでもないのよ。あははは……」
「「「「？」」」」
1人の女子が竜馬達の前で大の字になりながら言うと、その陰でなにやら2人が小声でぼそぼそと喋っていた。
「……何か隠してない？」
竜馬の言葉に女子達はビクッとした。
「そんなことっ」

「あるわけっ」

「ないよ！？」

すると、見事な連携技を決めた女子達は即撤退した（この間、僅か2秒）。

「何だったんだろ……」

そして4人は夕食を終えると、それぞれの部屋に戻ったのだった。

◆朝　廊下◆

「ふぁ～…」

翌日の月曜の朝、左手に紙袋を持った竜馬は大きな欠伸をしながら、シャルルと共に教室へと向かっていた。

「うわ、大きな欠伸だね」

「まあね……。5時半から厨房で、みんなの弁当を作ってたから。……はい、シャルルの弁当」

「わぁ♪ありがとう、竜馬」

竜馬はシャルルに弁当の入った包みを渡した。ちなみに中身は、桜海老にぎりとコンビーフにぎり、野菜たっぷりすき煮、アスパラの卵炒め、それに大根のゆかり和えである。

「後は箒とセシリアと鈴の分を渡したら――「そ、それは本当ですの！？」――…ん？」

すると、竜馬は廊下にまで聞こえた声に目をしばたたかせて教室に向かった。

◆1年1組◆

その頃、教室では先日の食堂と同じように机に集まっている人だかりがあり、その中にはセシリアと鈴もいた。

「ウ、ウソついてないでしょうね！？」

「本当だってば！この噂、学園中で持ち切りなのよ？」

「なんだろ？」

「さあ？」

そんな中、竜馬とシャルルは教室に入ってきたが誰も気付いてなかった。

「月末の学年別トーナメントで優勝したら龍東君と交際でき――「僕がどうしたの？」――……っ！」

「「「「きゃああっ！？」」」」

竜馬はその集まりの生徒達に声を掛けたが、取り乱した悲鳴が返ってきた。すると竜馬は状況が分からないので、セシリアと鈴に話し掛けた。

「セシリア、何の話だったの？」

「さ、さあ、何でしたっけ？うふふ……」

「鈴、僕の名前が出てたみたいだけど……」

「う、うん？そうだっけ？あはは……」

「？まあいいけど……。セシリア、鈴、はいこれ……」

「「？」」

竜馬は紙袋から2つの包みを取り出しながら言った。

「先週、僕が言った手作り弁当だよ。またみんなで屋上に行こう」
そして竜馬は笑いながら2人に弁当を渡した。
ちなみにセシリアの弁当は、豆腐入りクリームチーズのベーグルサンド、ミックスビーンズサラダとパイナップルで、鈴の弁当はホイコーローどん、チンゲンサイともやしののりあえ、ブロッコリーのザーサイ和えにプチトマトである。
「あ、ありがとうございます♪」
「そ、そうね。それじゃ、また昼に行こっか♪」
2人は笑みを浮かべながらそれぞれの席とクラスに戻っていくと、その流れに乗って他の生徒達も自分のクラス・席へと戻っていった。
「それじゃあ……」
竜馬も自分の席に行くと、箒の肩をトンと軽く叩いた。
「っ！？……な、何だ？」
すると箒は驚いて後ろを向くと、竜馬は包みを渡した。
「箒、はいこれ。先週のお返しだよ」
「あ、ああ。…ありがとう♪」
箒は頬を赤くしながら御礼を言った。ちなみに箒の弁当の中身は竜馬と同じメニューであり、鮭ときのこのホイル焼きとソーセージのしそ巻きソテー、かぼちゃのカレーマヨ和え、それにプチトマトで

ある。

「またみんなで食べよう♪」

「う、うむ……」

そう言って箒は体を前に戻して、いつもの表情になった。しかし……

（な、なぜあのような事に……）

心の中では先程の人だかりの話を聞いて、箒は頭を抱えていた。

（……学年別トーナメントに関する噂が流れている事は知っていが……、その内容が何故“学年別トーナメントの優勝者は竜馬と交際できる”なんだ！そ、それは私と竜馬だけの話だろうっ！）

そう……。何故かその話の内容が漏れて今ではほとんどの生徒が知っており、先程教室にやってきた上級生が『学年が違う優勝者はどうするのか』『授賞式での発表は可能か』等々、クラスの情報通に訊きに来ていた。

（まずい、これは非常にまずい……）

そして箒は、授業中も心の中で頭を抱えて千冬の出席簿アタックの餌食になるのは、今は知らない。

〔ドイツ〕

◆深夜　ホテル◆

「……」

箒が悩んでいる頃、影宮はホテルで本を読んでいた。

「……おっと、もうこんな時間か」

影宮は時計を見て言うと立ち上がりベッドに寝転んだ。

「早く寝ないと、明日がもたないな……。ふぁ～……」

そして部屋の明かりを消して眠るが、影宮はある事を考えていた。

（竜馬は最近、純正コンボを使ってないな。サゴーゾだけじゃなく、他のコンボの性能を見たいものだな……）

そう考えると、影宮は眠りについたのだった。

〔日本〕

◆放課後　第３アリーナ・ステージ◆

「「あ」」

影宮が眠りはじめた頃、ステージで鈴とセシリアがばったりと会い、間の抜けた声を出していた。

「奇遇ね。あたしはこれから月末の学年別トーナメントに向けて特訓するんだけど」

「奇遇ですわね。わたくしもまったく同じですわ」

２人はそう言うと、その間には見えない火花が散っていた。どうやらどちらも優勝を狙っているようだ。

「ちょうどいい機会だし、この前の実習のことも含めてどっちが上かはっきりさせとくってのも悪くないわね」

「あら、珍しく意見が一致しましたわ。どちらの方がより強くより優雅であるか、この場ではっきりとさせましょうではありませんか」

鈴は双天牙月、セシリアはスターライトｍｋ?を呼び出した。

「では……」

「いくわよ！」

２人は構えて対峙した時、それは起こった。

―ズドンッ！―

「「！？」」

２人は超音速の砲弾が飛来した事に気付くと緊急回避をして、鈴とセシリアは揃って砲弾が飛んできた方向を見た。すると、セシリアの表情が苦く強張った。

「ラウラ・ボーデヴィッヒ……」

そう……。そこにいたのは漆黒のＩＳ、シュヴァルツェア・レーゲンを身に纏ったラウラが佇んでいた。

「……どういうつもり？いきなりぶっ放すなんていい度胸してるじゃない」

鈴は双天牙月を連結させて肩に預けながら、甲龍の衝撃砲を準戦闘状態へとシフトさせた。

「中国の甲龍にイギリスのブルー・ティアーズか。……ふん、データで見た時の方がまだ強そうではあったな」

ラウラの挑発的な物言いに、２人が口元を引きつらせる。

「何？やるの？わざわざドイツくんだりからやって来てボコられたいなんて大したマゾっぷりね。それとも、じゃがいも農場じゃそういうのが流行ってんの？」

「あらあら鈴さん、こちらの方はどうも言語をお持ちでないようですから、あまりいじめるのはかわいそうですわよ？犬だってまだワンと言いますのに」

２人は怒りのはけ口を言葉に見いだそうとするが、それはおおよそ無駄な労力であった。

「はっ……。ふたりがかりで量産機やＩＳに劣るスーツを着けた男に負ける程度の力量しか持たぬ者が専用機持ちとは、よほど人材不足と見える。数くらいしか能のない国と、古いだけが取り柄の国はな」

―ぶちっ……！―

２人から何かが切れる音がすると、装備の最終安全装置を外した。

「ああ、ああ、分かった、分かったわよ。スクラップがお望みなわけね……。セシリア、どっちが先やるかジャンケンしよ」

「ええ、そうですわね。わたくしとしてはどちらでもいいのですが……」

2人は話していると、次のラウラの言葉に2人の怒りは加速した。

「はっ！ふたりがかりで来たらどうだ？1＋1は所詮2にしかならん。下らん種馬を取り合うようなメスに、この私が負けるものか」

「「っ！？」」

ラウラの明らかな挑発だが、今の2人にはもうどうでもいい。何せ、この場にいない想い人を侮辱されたのだから……。

「……今なんて言った？あたしの耳には『どうぞ好きなだけ殴って下さい』って聞こえたけど？」

鈴はそう言いながら両肩アーマーをスライドした。

「場にいない人間の侮辱までするとは、同じ欧州連合の候補生として恥ずかしい限りですわ……」

そしてセシリアは4機のビットを自分の周りに浮かばせた。

「その軽口…！」

「2度と叩けぬように、ここで叩いておきましょう…！」

そう言いながら2人は獲物を握りしめる手にきつく力を込める。しかしラウラはそれを冷ややかな視線で流すと、僅かに両手を広げて自分側に向けて振った。

「とっとと来い」

「「上等！！」」

そして2人は、ラウラに攻撃を仕掛けた。

◆廊下　第3アリーナ前◆

その頃、竜馬はシャルル・箒と共に廊下を歩いていた。

「竜馬、今日も放課後特訓するよね？」

「もちろん。今日は第3アリーナが使えるんだっけ？」

「ああ。今日は使用人数が少ないと聞いている。空間が空いていれば模擬戦も出来るだろう」

「そっか。それじゃあシャルル、一緒に模擬戦する？」

「うん。僕も負けないよ」

3人は会話をしながら第3アリーナに近づくにつれて、なにやら周りが慌ただしかった。

「何かあったのかな？」
シャルルがそう言うと、竜馬は廊下を走っていた生徒を止めて質問した。
「どうしたの？」
「第３アリーナで専用機持ちが２対１で模擬戦してるんだって！」
「２対１で？」
生徒はそう言うと走り去り、竜馬は不思議そうに首を傾げた。
「竜馬、こっちで先に様子を見ていく？」
シャルルはそう言って観客席へのゲートを指した。
「確かに、ピットに入るよりも早いな」
箒の言葉に竜馬も頷き、第３アリーナの観客席に向かった。

◆第３アリーナ・観客席◆

―ドゴォンッ！―

「「「！？」」」

3人は観客席に到着すると、突然の爆発に驚いた。

「な、何だ！？」

箒がそう言うと、爆発で起こった煙を切り裂くように2つの影が飛び出した。

「あれは！」

シャルルは飛び出した2つの影を見て驚いた。そこには機体の所々が損傷し、装甲の一部が完全に失われているセシリアと鈴の姿だった。

「鈴！セシリア！」

竜馬は2人を呼ぶが、ステージの遮断シールドによって声が届かなかった。

「いったい何が……ん？」

箒は爆発の中心部に視線を向けると、そこにはシュヴァルツェア・レーゲンを駆るラウラがいた。

「何をして……って、２人とも！」
すると鈴とセシリアは軽く目配せの後、ラウラへと向かっていった。

◆第３アリーナ・ステージ◆

「くらえっ！！」
鈴は両肩の龍咆を開いてラウラに仕掛けるが、ラウラは回避をしようともしなかった。
「無駄だ。このシュヴァルツェア・レーゲンの停止結界の前ではな」
ラウラはそう言うと右手を突き出し、衝撃砲の不可視の弾丸を無効化した。
「まさかこうまで相性が悪いだなんて……！」
鈴が呟くとラウラは両肩に搭載されたワイヤーブレードを射出した。
「くっ！」

ワイヤーブレードは複雑な軌道を描き迎撃射撃をくぐり抜け、鈴の左足を捕らえた。

「そうそう何度もさせるものですかっ！」

セシリアは鈴の援護するため射撃を行い、同時に2機のビットをラウラに向けて射出した。

「理論値最大稼働のブルー・ティアーズならいざ知らず、この程度の仕上がりで第3世代型兵器とは笑わせる」

しかしラウラはセシリアの狙撃とビットによる視界外攻撃を回避、さらに両腕を突き出しながら交差すると、その先ではビットが動きを停止させていた。

「動きが止まりましたわね！」

「貴様もな」

セシリアはスターライトｍｋ?をラウラに撃つが、ラウラは大型カノンによる砲撃でセシリアの攻撃を相殺した。

「なら…――「きゃあああっ！」――…っ！?」

―ガシャァンッ！―

セシリアが連続射撃の状態に移行しようとするが、ラウラは先刻捕まえた鈴をぶつけて阻害した。さらに空中で一瞬姿勢を崩した2人

にラウラはイグニッション・ブーストを使用して間合いを詰め、両手首からプラズマ刃を展開した。

「このっ……！」

鈴は双天牙月の連結を解いてラウラのプラズマ刃を凌いでいた。鈴は上手くステージの形状に合わせた機動をするが、ラウラは両肩と腰部左右のワイヤーブレードを射出して、斬撃の嵐が鈴に襲いかかる。

「くっ！」

鈴は再度、龍咆を展開して砲弾エネルギーを集中するが、ラウラは見逃さなかった。

「甘いな。この状況でウェイトのある空間圧兵器を使うとは」

―ドカァン！―

「！」

ラウラは大型カノンを甲龍の肩アーマーに砲撃すると爆散し、鈴は大きく大勢を崩した。

「もらっ――「させませんわ！」――…」

ラウラが鈴の懐にプラズマ刃を突き刺す瞬間、セシリアは間に割り入りスターライトｍｋ？を盾に使い一撃を逸らし、同時にウェスト・

アーマーに装着されたミサイルビットをラウラに向けて射出した。

―ドガァァァンッ！―

至近距離によるミサイルの爆発は鈴とセシリアも巻き込み、２人は地上へと叩き付けられた。

「無茶するわね、アンタ……」

「苦情は後で。けれど、これなら確実にダメージが……っ！？」

セシリアは爆発で起こった煙が晴れると言葉が止まった。

「……」

そこには至近距離での爆発を喰らっても、何事も無かったかのようにラウラが宙に浮かんで佇んでいた。

「終わりか？ならば……私の番だ」

ラウラは言うと同時にイグニッション・ブーストで地上へと移動した。

◆第3アリーナ・観客席◆

「セシリア！鈴！」

箒は傷つく仲間を叫んだ。ラウラは地上へと移動すると鈴を蹴り飛ばし、セシリアには近距離からの砲撃を当てた。さらにワイヤーブレードが射出され、2人の体を捕まえてラウラの元に手繰り寄せ、一方的な暴虐を行っていた。

「ああっ！」

「がっ！」

ラウラは苦しむ2人の腕に、脚に、体に拳を叩き込んだ。そしてシールドエネルギーはあっという間に減り機体維持警告域（レッドゾーン）を超えて操縦者生命危険域（デッドゾーン）へと到達していた。

「やめろ……」

竜馬は呟くがラウラは攻撃の手を止めなかった。ただ淡々とセシリアと鈴を殴り、蹴り、装甲を破壊していく。

「やめろよ……」

竜馬は震えながら呟くとラウラを見ると、普段と変わらないラウラの無表情が確かな愉悦に口元を歪めていた。

―ぶちっ！！―

その瞬間、竜の何かがブチ切れた。

「やめろおおおおぉぉぉ！！」

「「っ！？」」

竜馬の叫びに箒とシャルルは驚くと、竜馬はベルトを部分展開するとタカメダル・トラメダル・チーターメダルを転送して右手をスライドした。

【タカ！トラ！チーター！】

竜馬はオーズに変身するとメダジャリバーを展開し、後ろにジャンプしながらセルメダルを2枚メダジャリバーに投入して右手をスライドした。

【ＤＯＵＢＬＥ！ＳＣＡＮＮＩＮＧ　ＣＨＡＲＧＥ！】

「箒、シャルル、どいて！」

竜馬は2人に言うと同時にチーターレッグにエネルギーを送り込む。

「うおおおおっ！」

―バリィィン！―

そして青白く光ったメダジャリバーを前に突き出し、チーターレッグの加速を使用した突貫を繰り出すと遮断シールドを破壊した。

「2人を離せぇ！！」

さらに竜馬はその速度でラウラに突撃を仕掛けるが、ラウラは冷静だった。

「ふん……。感情的で直線的、絵に描いたような愚図だな」

そう呟いたラウラは腕を突き出し、チーターレッグの加速を使用している竜馬の体を止めた。

「何っ！？体がっ――「消えろ」――…！」

そしてラウラは大型カノンの砲口を竜馬に向けて砲撃した。

―ズドォン！―

「ぐああっ！」

竜馬は大型カノンの直撃を喰らい、右腕の装甲が砕けてしまった。

「「竜馬っ！？」」

箒とシャルルは叫ぶが、ラウラは砲口を再度竜馬に向けた。

「やはり敵ではないな。この私とシュヴァルツェア・レーゲンの前では、貴様も有象無象の１つでしかない」

「……んで…」

「？」

「何で、２人にこんな事を……」

竜馬はゆらゆらと立ち上がりながら問い掛けると、ラウラは言った。

「こいつらが弱い……、ただそれだけだ。弱者は強者に喰われる餌にしかならない愚かなモノだ……」

「「あああああっ！」」

ラウラはワイヤーブレードをきつく締め上げると、セシリアと鈴は苦痛の叫びをあげた。

「……許さない」

「何…？」

「絶対に許さないぞ……ラウラ・ボーデヴィッヒ！」

竜馬の怒りの感情が頂点に達するとコアメダルを全て変更し、クワガタメダル・カマキリメダル・バッタメダルに変えて右手をスライドした。すると緑色の光が竜馬を包み込み、コンボ成立の歌が流れた。

【クワガタ！カマキリ！バッタ！…ガ～タ　ガタガタキリッバ！ガタキリバ！！】

緑の光が収まると竜馬は口元に緑色のマスクをしており、クワガタヘッド・カマキリアーム・バッタレッグを纏った姿になった。
これがオーズ第2の純正コンボ、《ガタキリバコンボ》である。

「くだらんな。姿を変えたところで、貴様は私には勝てん」

ラウラは残りのワイヤーブレードを竜馬に向けて射出すると、竜馬はバッタレッグにエネルギーを送り込みショートバーニア・ブーストでラウラの頭上まで跳んだ。

「返してもらうよ！」

さらにカマキリアームにエネルギーを送り込みカマキリソードを展開すると、それにエネルギーを送り込んで威力を上げた。そして、すかさずワイヤーを切断してセシリアと鈴を拘束から解放すると2人を抱き抱え、ショートバーニアでラウラから離れた。

「セシリア！鈴！」

「う……。竜馬……」

「無様な姿を……お見せしましたわね……」

「喋らないで、傷に響くよ」

竜馬は安堵するが、ラウラは背中を向けた竜馬に言った。

「戦闘中に背を向けて逃げるとは、愚かだな」

ラウラがプラズマ刃を展開して竜馬を追い詰めようとするが、竜馬は既にガタキリバコンボのワンオフ・アビリティーを発動していた。

―ガシンッ！―

「っ！何だ！」

突然ラウラは後ろに起こった衝撃に振り向くと、そこにいたのは竜馬と同じガタキリバコンボの装甲を纏い、緑色のアーティジェムを装着したヒューマン・ドロイド……《ブレンチシェイド》が１０体いた。

そう……これがガタキリバコンボの能力。

現段階で最大２０体のブレンチシェイドを呼び出して援護をさせるワンオフ・アビリティー……《Ｇｏｔ　ｔｏ　ｋｅｅｐ　ｉｔ　ｒｅａｌ》である。

「無人機ごときに」

ラウラはブレンチシェイドにプラズマ刃とワイヤーブレードの斬撃

を仕掛けるが、４体はカマキリソードでそれを受け流し、４体は少し離れた所で待機し、残りの２体は竜馬達に近づいて鈴とセシリアを抱き抱えて観客席に入った。

（これで準備は調った……）

竜馬はセシリアと鈴が観客席に避難したのを確認すると、目線をラウラに向けて言った。

「……それじゃあ、反撃開始だ！」

『『『『Ｊｕｄ！』』』』

竜馬の言葉にブレンチシェイド達は了承すると、待機していた４体が背中のツノ型ユニットを展開して雷をラウラに放った。

「くっ！」

ラウラは雷を回避するとカマキリソードを持ったブレンチシェイド達が追撃して、確実にシュヴァルツェア・レーゲンにダメージを与えていた。

「雑魚共め…」

ラウラそう言うと両腕を突き出し、４体のブレンチシェイド達の動きを止めた。

「消え――「それを待っていた！」――…何っ！？」

―がしっ！―

ラウラは竜馬の声に気付いて振り向こうとするが、竜馬がツノ型ユニットを展開してシュヴァルツェア・レーゲンごとラウラを挟んだ。

「しまっ――「そぉいっ！！」――…がはっ！」

―ドガァァァン！―

そして竜馬はそのままバックドロップの要領でラウラを地面に叩きつけるとブレンチシェイドの１０体の内８体を収納した。
ブレンチシェイドは呼び出した数が多い程、エネルギーを多く分散してしまい威力が落ちる。だが数が少ないほどエネルギーの分散は少なくなり、竜馬と同じ威力の攻撃が可能になる。

「これで終わらせる！」

竜馬はラウラから離れるとベルトにエネルギーを送り込み右手をスライドすると、ブレンチシェイド達も同じく右手でベルトをスライドさせた。

【【【ＳＣＡＮＮＩＮＧ　ＣＨＡＲＧＥ！】】】

竜馬とブレンチシェイド達は１度だけ軽く後ろを跳ぶと、起き上がったラウラと竜馬達の間から３つの緑のリングが出現した。

「『『セイヤアアアッ！』』」

そして竜馬達は各々のリングをくぐり抜け、ラウラに必殺技（ガタキリバキック）を喰らわせようとした次の瞬間、２つの影が割り入った。

―ガギンッ！―

―ヴォンッ！―

竜馬の攻撃は前方に現れた影が持つＩＳ用近接ブレードに弾かれて、ブレンチシェイド達は前方に発生した光の壁によって阻まれ、強制的に収納された。

「……やれやれ、これだからガキの相手は疲れる」

「少しは落ち着いたらどうだ？」

「織斑先生！？それに黄金先生も！？」

そう、その影とは千冬と黄金だった。

竜馬は千冬を見ると、普段と同じスーツ姿で軽々と近接ブレードを扱っていた。

黄金は両腕をＭＡＮ‐Ｒ：カウンセラー・ＭＡＮ‐Ｌ：インバリットに変更してブレンチシェイド達の攻撃を防いでいた。

「模擬戦をやるのは構わん……」

すると黄金が千冬に続いて言った。

「でもな、遮断シールドまで破壊する事態になっちゃあ、こっちも黙ってられないな……」

すると、千冬は竜馬とラウラの顔を交互に見ながら言った。

「この戦いの決着は学年別トーナメントでつけてもらおうか」

「教官がそう仰るなら……」

千冬の言葉にラウラは素直に頷くと、ＩＳの装着状態を解除してその場を去った。

「龍東、それでいいな？」

「は、はい。……っ」

竜馬は装着状態を解除した瞬間、純正コンボをした事によりぐらりと身体が倒れそうになるが、何とか踏み留まった。そして竜馬の言葉を聞いた千冬は、改めてアリーナ内すべての生徒に向けて言った。

「では、学年別トーナメントまで私闘の一切を禁止する。解散！」

―パンッ！―

そして千冬は強く手を叩くと、それはまるで銃声のように鋭く響い

た。

◆夕方　保健室◆

「「……」」

第3アリーナの一件から1時間後、保健室のベッドの上では治療を受けて包帯の巻かれた鈴とセシリアが不機嫌な顔をしていた。

「別に助けてくれなくてよかったのに」

「あのまま続けていれば勝っていましたわ」

「あのねぇ……」

竜馬は少し呆れながら言うと、2人の頭を撫でた。

「でもよかった。たいした怪我じゃなくて」

「「うぅ……」」

2人は頬を赤くしながら俯くと、保健室にシャルルが飲み物を買っ

て戻ってきた。勿論、竜馬のおごりである。

「はい、烏龍茶と紅茶だよ。竜馬は緑茶でいいかな？」

「ありがとうシャルル。はい……」

竜馬は飲み物を受け取ると、鈴とセシリアに渡した。

「あ、ありがとう…」

「いただきますわ…」

2人は渡された飲み物を受け取ると、ゆっくりと飲んだ。

「まぁ、保健の田村先生が落ち着いたら帰っていいって言ってるし、しばらく休んだら……」

―ドドドドドドッ……―

「ん？」

すると竜馬は廊下から響く音に気付いた。

―ドドドド**ドッドッドッ**！―

しかもその音はだんだんと近づいてくると、保健室のドアが開かれ

た。

「龍東君！」

「デュノア君！」

保健室に入って来たのは数十名の1年生の女子生徒だった。すると、その生徒一同は学内の緊急告知文が書かれた申込書を2人の前に出した。

「なになに……トーナメントの仕様変更？」

竜馬は申込書の内容を見た。

どうやら今月開催される学年別トーナメントでは、2人組のペアに参加しないといけなかった。

「だからっ！」

そして女子一同から一斉に手が伸びてくると、竜馬とシャルルはそれを見て若干引いていた。

「私と組もう、龍東君！」

「私と組んで、デュノア君！」

生徒一同は2人しかいない男子ととにかく組もうと、先手必勝とばかりに勇み迫っていた。

「え、えっと……」

シャルルは困っていた。誰かと組むといつ正体がバレてしまうと思い、竜馬の顔を見た。

「ん？」

するとシャルルは竜馬といきなる視線が合い、すぐに逸らした。

（竜馬も大変そうだし、ここは自分で解決しないと……）

シャルルがそう思っていると、竜馬は苦笑にも似た表情を浮かんでシャルルを見た。

（ふぅ……。相変わらずだなぁ……）

竜馬は心の中で呟くと、わあわあと騒ぐ女子全員に聞こえるようにきっぱりと大きな声で言った。

「ごめん。僕はシャルルと組むから諦めてくれないかな！」

――……――

（……やっぱり、まずかったかな？）

その発言後、女子全員は沈黙して竜馬は気持ちが少し後ずさるが、女子達は各々口にしながら1人また1人と保健室を去っていった。

「まあ、そう言う事なら……」

「他の女子と組まれるよりはいいし……」

「デュノア君×龍東君っていうのも絵になるし……ごほんごほん」

女子達は改めてペア探しが始まり、ばたばたとした喧噪が廊下から聞こえた。

「ふぅ……」

竜馬は安堵のため息をすると、シャルルが声を掛けた。

「あ、あの、竜m――「「竜馬(さん)っ！」」――…」

しかしシャルルの言葉を上回る勢いで鈴とセシリアがベッドから飛び出した。その勢いは竜馬を締め上げかねない程であった。

「あ、あたしと組みなさいよ！」

「いえ、クラスメイトとしてここはわたくしと！」

（こ、困ったな。さっきの人達と違って、２人を説得するには一苦労だぞ……）

竜馬が困っていると保健室に入ってきた人がいた。

「ダメですよ」

「「「「っ！？」」」」

４人は驚くと声がした方へと振り向くと、そこには真耶がいた。

「おふたりのＩＳの状態をさっき確認しましたけど、ダメージレベルがＣを超えています。当分は修復に専念しないと、後々重大な欠陥を生じさせますよ」

真耶の言葉の後、竜馬が続けて言った。

「２人共、山田先生の言う通りだよ。その状態で起動させると、特殊エネルギーバイパスを構築して平常時での稼動に悪影響を及ぼすし……」

そして竜馬は再び、２人の頭を優しく撫でて言った。

「何より、２人には無理をしてほしくない。ＩＳを休ませるように、２人にも怪我を治してほしい……」

「…わ、わかったわよ……」

「…わかりましたわ……」

「はい。分かってくれて先生嬉しいです」

真耶の言葉に、頭を撫でられている２人は了承した。すると竜馬はかねてから疑問に思っていた事を２人に聞いた。

「しかし、何でボーデヴィッヒさんとバトルする事になったんだ？」

「え、いや、それは……」

「ま、まあ、なんと言いますか……女のプライドを侮辱されたから、

ですわね」

「…？」

「……ああ」

すると、会話を聞いたシャルルは何かピンと閃いた。

「もしかして竜馬の事を――「「うわあああっ！」」――…むぐぅ！」

しかし、シャルルの言葉は鈴とセシリアが超特急の勢いで取り押さえた。

「あああっ！デュノアは一言多いわねえ！」

「そ、そうですわ！まったくです！おほほほほ！」

「むぐぐ…！（く、苦しい…！）」

「こらこら…」

竜馬は苦しそうにもがくシャルルを2人から離した。

「とりあえず怪我を早く治して、また一緒に訓練しよう。それじゃあ……」

竜馬は保健室を出ると、シャルルもその後を追った。

◆学園システム管理室◆

「まったく、竜馬には困ったなぁ……」

その頃、黄金はアリーナの遮断シールドを直し終えてシステム管理室に戻ったところだった。

『黄金殿、シュヴァルツェア・レーゲンの戦闘データが完了しました』

するとシベラーはラウラのＩＳが稼動しているデータを黄金に見せた。

『俺が見たところじゃあ、マキマキ女とちびっ子の2人組と戦った時と竜馬と戦った時、性能はどっちも同じだったぜ。本当にそのイヤミって言うプログラムは稼動してんのか？』

『イマージュ。イヤミではなくヤミーですよ…』

「ふむ……」

黄金はイマージュの言葉を聞いて考えると椅子に座り、キーボードを叩いてある画面を映し出した。そこに映し出されたのは、黄金専

用のページだった

「だったら、直接見るしかないな…」

そう言うと黄金の両肘から数本のコードが伸びて、パソコンに繋がれた。

「見せてやる。メルダ三人衆の１人、《ダイヤモンド・ハッカー》と言われたオレの力を……」

そして黄金は検索を開始したのだった。開かれた瞳の光は、メルダ三任衆と言われている鋭いものだった。

◆深夜　竜馬・シャルルの部屋◆

シャルル　Ｓｉｄｅ

「……」

あれから時間が経って、僕と竜馬は夕食の後部屋に戻った。それから少し話しをしてから眠る事になったんだけど……。

（うぅ～……眠れないよ…）

そう……、僕は眠れなかった。

竜馬と話した時に、『無理に男子口調にしなくてもいいんじゃないかな？』って言われたんだけど、これは父が徹底的に男子の仕草や言葉遣いを覚えさせられたからすぐには直らない。

僕は竜馬に、自分の事を『僕』って言うのは女の子っぽくないかなって言ったら、竜馬は『別に女の子っぽくないとか、そういう事はないよ。僕は、シャルルは可愛いと思うよ』って言ってくれた。

僕は嬉しかった。そう言われたから、この口調はこのままで良いって思うよ。

「……」

でも困ったなぁ。嬉しくてなかなか体の火照りが収まらないから、僕はベッドから降りて水を飲んだ。

「ふぅ……」

これで火照りは収まるかな？僕はそう思うと自分のベッドに戻ろうとした時、ふと竜馬の方を見た。

「……」

そして僕は暗い部屋の中、竜馬が寝ているベッドに近づくと顔を覗き込んだ。

（ぼ、僕、何やってるんだろう……）

見つめる距離は約５ｃｍ。今でも竜馬の呼吸だけでなく、その体温までが感じられて、僕はドキドキしながら体が火照ってきた。

「……」

〔ありがとう、話してくれて〕

〔もうそんな悲しい顔をしないで。いつもの優しい笑顔に戻って……ね？〕

……初めて、そんな事を言われた。

母さんを亡くしてからずっと、居場所がなかった僕。

血の繋がりだけの父には息苦しさしか感じられず、いつしか僕が必要とされる事さえ求めなくなって、温度のない灰色の生活が繰り返したけど慣れてしまった。

そして父からの命令で日本に行く事が決まった時も、僕は別段何も感じなかった。それなのに……

（どうして竜馬はこんなに僕の心を揺り動かすんだろうね）

僕はみんなと……竜馬と出会って、変わったと思う。

灰色だった生活も、篠ノ之さんや凰さん、オルコットさん、それに竜馬と出会ってから、少しずつ色鮮やかに戻ってきた。

「ズルいよねぇ、竜馬は…」

今もこうして目と鼻の先にいるのに、竜馬は眠っているだけで目覚めもしない。

（これじゃあまるで眠れる森の美女……ふふっ。それはさすがに役を間違えているよ）

僕はそう思うと急におかしくなった。でも、案外似合ってるかもって思う自分もいるなあ。

「おやすみ、竜馬……」

それから僕はしばらく竜馬を見つめてから、小さい頃に母さんがよくしてくれたように竜馬の額にキスを落とした。

（さてと、早く寝ないとね……）

それから僕は自分のベッドに潜って眠りについた。冷めやらぬ体の火照りを抱きながら……

シャルル　Ｓｉｄｅ　Ｅｎｄ

１１話【噂と黒雨の暴虐と分身コンボ】（後書き）

最近、車の仮免試験が近いのでなかなか文章を書けない方、作者です。

でも、更新から１０日以内に１話（短編含む）でも投稿できたらいいなー、と思います。

頑張りますので、これからもよろしくお願いします。

短編3話【ずぶ濡れのC／動き出す地球（ほし）のメモリー】（前書き）

少し修正しました

短編3話【ずぶ濡れのC／動き出す地球（ほし）のメモリー】

◆放課後　第1アリーナ・ステージ◆

【クワガタ！カマキリ！バッタ！…ガ～タ　ガタガタキリッバ！ガタキリバ！！】

竜馬がシャルルとペアになって3日、2人はトーナメントに向けて特訓をしていた。

「ハァッ！」

開始早々、竜馬はオーズ・ガタキリバコンボに変身するとシャルルに向かってカマキリソードの連続攻撃を行った。

「くっ！」

しかしシャルルは左腕のシールドで防御しつつ、近接ブレード《ブラッド・スレイサー》を展開してカマキリソードを受け流していた。

「そこだ！」

シャルルは竜馬の隙を付いて、ブラッド・スレイサーを前に突き出す。

「まだまだ！」

しかし竜馬はツノ型ユニットを突き出してシャルルの腕を掴み、大きく振り回してから後ろに投げ飛ばした。

「それなら…！」

シャルルは姿勢制御をして体勢を調えると同時に、連装ショットガン《レイン・オブ・サタディ》を1秒と掛からず展開すると、竜馬に向けて攻撃した。

「くっ……！」

竜馬はショートバーニアで不規則に回避しながらシャルルに近づくと、ツノ型ユニットにエネルギーを送り込んで雷を放った。

「うわぁっ！」

シャルルはレイン・オブ・サタディを雷によって落とされてしまった。

「今だ！」

【ＳＣＡＮＮＩＮＧ　ＣＨＡＲＧＥ！】

竜馬はシャルルの隙を付いてベルトをスライドさせるとガタキリバキックを繰り出した。

「セイヤアアアッ！」

「これなら、どうかな！」

竜馬が近づく中、シャルルは左腕のシールドを弾け飛ばすと中から69口径パイルバンカー《灰色の鱗殻（グレー・スケール）》（通称：盾殺し（シールド・ピアース））が露出し、ガタキリバキックが当たる直前に竜馬に叩き込んだ。

―ズガドゴォォォン！―

「「うわぁっ！」」

2つの衝撃によって、2人は弾け飛んでしまった。

「はぁ、はぁ、はぁ……」

「ふぅ、ふぅ、ふぅ……」

2人はしばらく見つめると地上に着地し、ISをそれぞれ解除した。

「はぁ……。流石シャルル、あそこでグレー・スケールとはね。軽量型のガタキリバじゃあ、弾かれるのも無理ないね」

「竜馬も凄いよ。あんな回避をするなんて、僕じゃあ当てる事も難しいよ」

「いや、それを言うならシャルルも……ん？」

2人が会話する中、竜馬は空から一滴の雨粒に気がついた。

「雨だね……。シャルル、今日はここまでにしようか」
「そうだね。それじゃあ行こっか」
そして2人はステージを後にした。

◆学園内◆

（ふふっ、相合傘〜♪）

雨が降る中、シャルルは竜馬が持ってきていた折り畳み傘に入れてもらい、2人は寮へと戻っていた。

「雨が降ると訓練ができないから嫌だなぁ……」

「梅雨なんだから仕方ないよ。……あれっ？」

すると、シャルルは茂みの中から何かがいるのに気付いて目線を向けた。

「どうしたのシャルル？」

「ごめん竜馬、ちょっと待ってて！」

シャルルは傘から出ると茂みに近づいてしゃがみ込んだ。すると、そこにいたのは1匹の猫だった。

「……子猫？」

「そうみたい。首輪もないし、親猫とはぐれちゃったのかな……」

シャルルは子猫を抱き上げると、子猫はプルプルと震えていた。

「寒いのかな…。こんなに震えて…」

「ミー…」

子猫は弱々しく鳴くと、シャルルは竜馬に言った。

「ねぇ竜馬…」

すると、竜馬はシャルルの考えている事が分かっているように、シャルルを傘の中に入れながら言った。

「ああ。とりあえず雨が上がるまで部屋に置こうか。そこから先の事は、その時考えよう……」

「…うんっ。やっぱり竜馬は優しいねっ」

「とりあえず、みんなには見つからないように戻ろっか。寮の部屋はペット禁止だし、織斑先生に見つかったら怖いからね」

「そうだね。なるべく慎重に戻ろう」

そして2人は子猫を連れて、寮へと戻って行った。

～数分後～

◆竜馬・シャルルの部屋◆

2人は部屋に戻ると竜馬はベッドに腰掛けて外を見ていた。

「ほーら。今洗ってあげるからねー。大人しくしてるんだよー」

一方シャルルは、シャワー室で制服を脱いでシャツと下着姿になり、子猫を桶に入れて洗おうとしていた。

「やれやれ……。さて、どうするかなぁ……」

竜馬は黄色いカンを持ちながら子猫の事を考えている内に、先日セシリアと鈴にラウラと戦った時の意見を聞いていた時を思い浮かべた。

～前日～

◇夕方　食堂◇

「ＡＩＣ？」

「シュヴァルツェア・レーゲンの第３世代型兵器よ。アクティブ・イナーシャル・キャンセラーの略。慣性停止能力」

鈴の言葉を聞いて、竜馬は京水が話した事を思い出した。

「そう言えば、京水さんに聞いたことがあるな。ＰＩＣを発展した兵器があって、対象を任意に停止させる事が出来るって……」

「まさしくそれですわ。……正直、わたくしも実物を見るのは初めてでしたが、あそこまでの完成度を誇っているとは思ってもみませんでした」

「あー、それはあたしも同意見。あそこまで衝撃砲と相性が悪いとはね……。対策なんてあるのかな？」

鈴とセシリアは小さくため息をすると、竜馬はある事を言った。

「……自信はないけど、一応対策はあるかな」

「「えっ！？」」

その言葉に２人は驚くと、竜馬は続けて言った。

「…多人数で相手をすることかな。ガタキリバならブレンチシェイドを数体展開すれば出来るけど……」

「「けど？」」

「今回のトーナメントは２対２で行うし、味方に迷惑が掛かると思うからガタキリバは使いたくない……かな」

「だったら、どうするのよ？」

鈴の言葉に竜馬は答えた。

「相手に認識されないほど速く移動する……かな。チーターレッグなら出来ると思うし……」

「でも、竜馬さんはそれでＡＩＣに捕まったのでは……」

「うっ……」

セシリアの言葉に竜馬は固まってしまい、結局対策は見つからなかった。

〜現在〜

◆竜馬・シャルルの部屋◆

【ＴＯＲＡ-ＫＡＮ】

『ガォッ！』

竜馬は黄色のカンを開けると虎のような姿になり、床をトコトコと歩き回っていた。これが、《トラ・カンドロイド》である。

「結局対策が出なかったなぁ……。ガタキリバ以外でボーデヴィッヒさんと戦うなんて……ん？」

竜馬は貰ったバースＣＬＡＷｓの資料を見ていると、ある項目に目が止まった。

「……これなら、イケるかもし――「わあ！ちょっと、暴れちゃダメだって！！ちょっと大人しく……ひゃあっ！？」――…ん？」

―ドタン！バタン！―

すると、シャワー室では何か騒がしい音が響いていた。

「フニャー！」

「おっと…」

竜馬は振り向くと、濡れた子猫が竜馬に跳び付いた。

「どうしたんだ、おま――「こらっ、出てっちゃダメだってば！！」――…ウェッ！？」

すると、シャルルも子猫を追ってシャワー室に出てくると、竜馬は驚いた。

「あ……」

シャルルは竜馬の目線に気付くと自分の姿を見た。シャワーで濡れているせいでシャツは体にピッタリと密着し、下着が見えていた。

「～っ！？」

シャルルは体を隠すように後ろに向くと、顔だけ竜馬に向けて言った。

「り、竜馬の……えっち……」

「うっ……、ごめん……」

竜馬は咄嗟に謝ると、目線を子猫に向けた。子猫は何事も無かったかのようにスヤスヤと眠っていた。

◆夕方　学園内◆

夕方、雨が止むと2人は外に出ていた。ちなみに子猫はシャルルが抱いている。

「さて、そろそろ真剣に考えないと……」

「うん……あれ？」

2人は子猫と出会った場所にまで行くと、シャルルは目の前に何かがいるのに気付いた。

「どうしたの？」

竜馬はシャルルが見ている方に目を向けると、1匹の猫がいた。

「親猫……？あっ」

「ニャー」

シャルルがそう言うと、抱いていた子猫が跳び出して親猫に擦り寄り、そのまま歩きだしてしまった。

「もう行っちゃったね……」

「うん……」

竜馬はシャルルを見ると、その顔は喜ぶ中にどこか寂しさが混ざっていた。

「でも……よかった。ちゃんと親と会えて……仲良さそうで……」

「……ああ」

「それじゃあ、僕たちも部屋に戻ろう」

シャルルはそう言って振り返ると、竜馬は言った。

「シャルル」

「ん？」

「仲の良さなら、僕達だって負けてないさ」

「えっ？」

「ほら……僕達だって同じ部屋なんだし、もう家族みたいなものでしょ？」

「…っ！」

竜馬はニカッと笑うと、シャルルは竜馬の気遣いに気付いた。
自分は父と折り合い悪く、母親は亡くなっている。親猫に会えた子猫を見て、シャルルはそれが羨ましいと思ったのだ。

「竜馬……」

「さて、行こう」

「…うん♪」

シャルルは笑顔で言うと、２人は部屋まで戻った。

（ありがとう竜馬……。竜馬はやっぱり優しい……ねっ）

シャルルは心の中でお礼を言った。その事を知るのは、空で綺麗に掛かる虹だけだった。

{ドイツ}

◆昼　某研究所◆

その頃ドイツでは、とある事件が起こっていた。

「これは……一体どういう事だっ！」

1人の軍人が数人連れて研究所にやって来たが、その研究所は既に壊滅していた。

「隊長！」

部下は無事だったパソコンを調べながら言った。

「この施設のデータが全て消去されています！」

「何っ！監視カメラの映像は！」

「それも消されています！」

「負傷者はいるか！」

「どうやら、この施設には誰もいないようでした」

「くっ……、今から本部に戻るぞ。全員、帰還するぞ！」

そして軍人達はその場を離れた。

＼ＩＮＶＩＳＩＢＬＥ／

『……』

軍人達が離れて数分、その研究所跡地から何者かが徐々に姿を現した。
その姿は灰色の全身装甲を纏い、腕や脚、背中、顔等にコネクタが付いたＩＳだった。

『…サテ、次ダ』

＼ＮＡＳＣＡ／

謎の人物は変声器を使ったような声で呟くと、翼をデザインした＜Ｎ＞のＵＳＢメモリーを起動して背中のコネクタに挿した。

『…ハァッ！』

すると背中からエネルギー状の翼が大きく広げられると同時に、そのＩＳはジャンプすると目にも止まらぬ速さで飛び立ったのだった。

『……』

謎のＩＳは飛びながら情報が記載されたディスプレイを展開していた。そのに映し出されていたのは、とある企業がある地図だった。

『……デュノア』

その人物は小さく呟くと、スピードを上げて飛び立った。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6059x/

Ｉ・ＯＯＯ・Ｓ－インフィニット・オーズ・ストラトス－

2011年12月28日08時49分発行